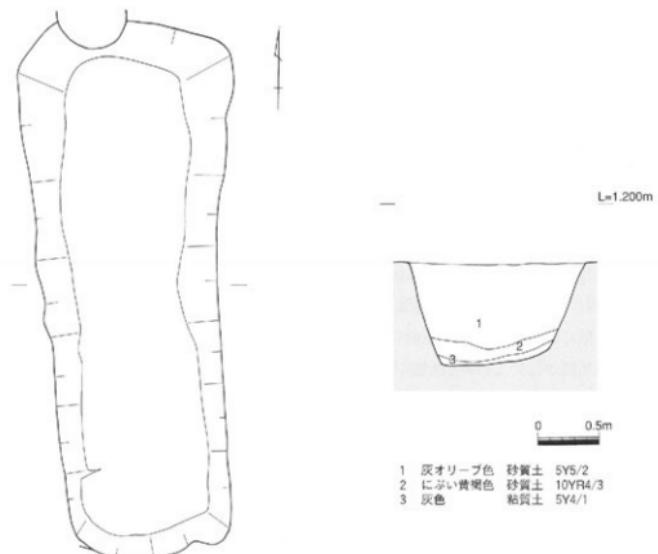


第367図 SK1036実測図

第368図 SK1036出土遺物実測図



第369図 SK1046実測図

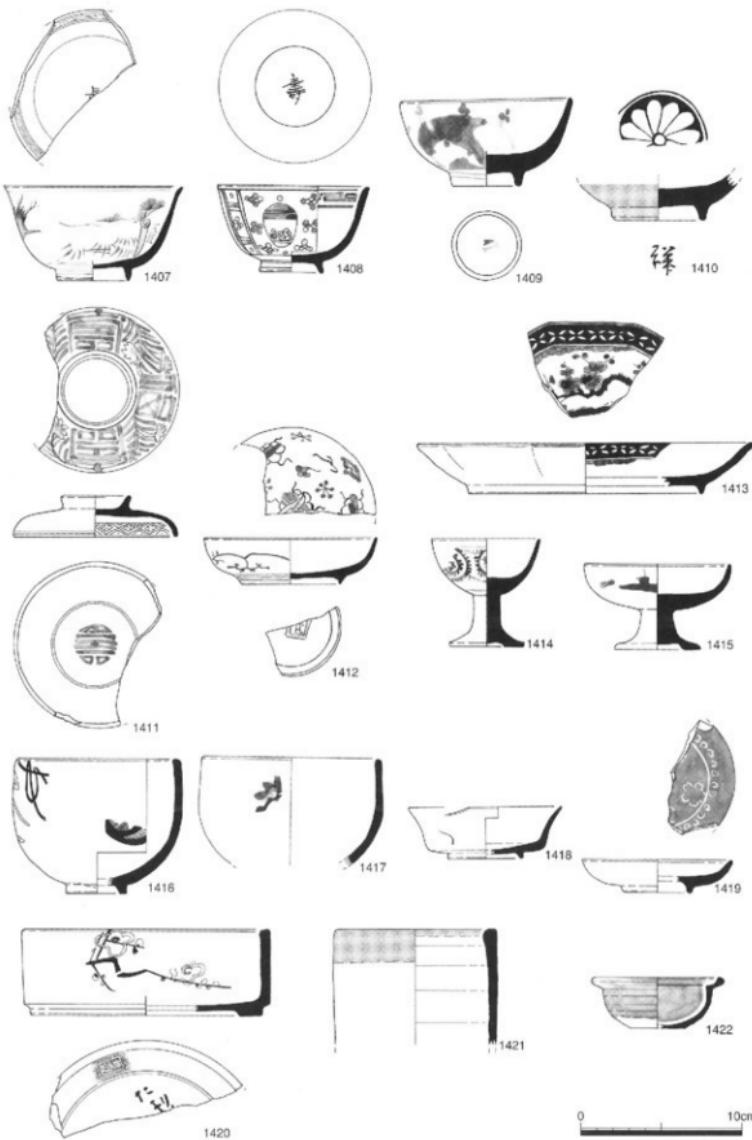
陶器碗である。高台置付以外、全面に鉄釉がかけられ白泥で刷毛目文様が描かれている。1403は京信楽系の陶器碗である。外面には若杉文が描かれている。1404は陶器の香炉である。底部外面以外は内外面とも青緑釉の上に自然釉がかけられている。1405は口径146mmの土師質の皿である。底部の中央には径5mm程の穿孔が施されている。1406は土師質の灯明皿である。口縁部と底部には煤が付着している。

土坑 46 (SK1046) (第369図)

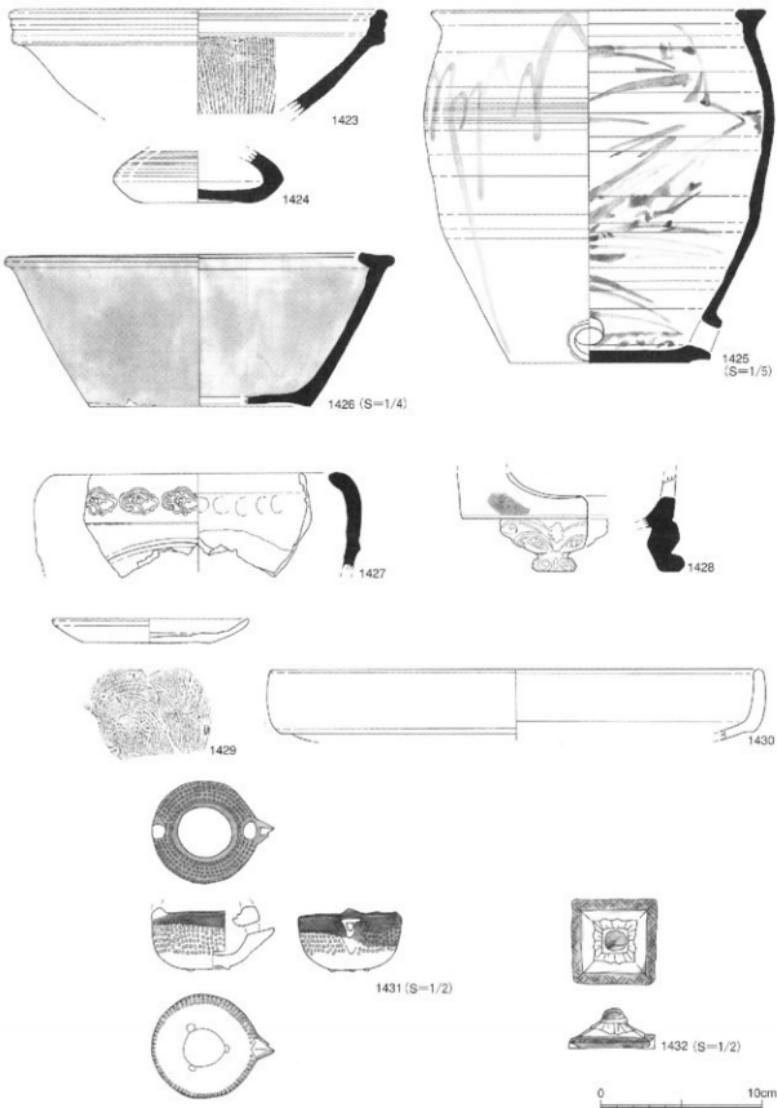
3区のC-16・17グリッドにまたがって検出された長軸を南北方向にとる長さ約4.4m、幅1.5mの長楕円形の大型土坑である。深さ約0.8mの遺構の埋土の上部には炭化物や焼土粒とともに、瓦や片岩の破片が多く混入されていることから、廃棄土坑と考えられる。

出土遺物 (第370・371図)

1407は肥前系の染付磁器碗である。外面には松竹に福と鶴が描かれ、内面の見込み部には文字がみえる。1408は瀬戸美濃系の染付磁器碗である。体部外面には窓絵人物に七宝と区画、内面は口縁部に雷文、見込み部には寿文が描かれている。1409は肥前波佐見の磁器の丸碗である。厚手で外面と高台内には染付により文が描かれている。1410は肥前系の厚手の外青磁の碗である。内面見込部には染付により丸の中菊の文が描かれ、高台内には変形字の銘がある。1411は肥前の磁器製碗蓋である。外面には福寿文と草文、内面には四方櫻文、見込み部には「寿」の丸文が染付で描かれている。1412は肥前系の染付磁器皿である。外面には唐草、内面には宝が描かれている。また、高台内には二重方形枠内に「福」の銘が書き込まれている。1413は肥前系の染付磁器皿である。型打成形で製作され高台置付部分の釉が剥ぎ取られている。内面には七宝、雲、梅花が描かれている。1414は肥前系の磁器製仏飯器で、蛸唐草が染付により描かれている。1415は肥前系の磁器製仏飯器である。底部は輪高台で外面には染付によって文が描かれている。1416は京信楽系の陶器碗である。外面は赤絵により注連文が描かれ、高台部分は無釉である。1417は京信楽系の陶器碗である。外面には上絵付により松が描かれている。1418は京信楽系の陶器皿である。高台部分を除き全面に灰釉がかけられている。外面には鉄絵が僅かに認められる。1419は肥前唐津の陶器製小皿である。口径92mmを測り、内面には鉄釉と白泥により象嵌が描かれている。置付け部分は露胎のまま残されている。1420は折枝梅が描かれた京信楽系の陶器体である。高台置付部分には方形枠内に「錦光山」の刻印が捺され、高台内には墨書が残されている。1421は瀬戸美濃系の陶器製香炉である。半筒形で口縁部内外面は青磁釉、体部外面は灰釉と掛け分けされ、内面は無釉のまま残されている。1422は在地の大谷焼の陶器鉢である。底部外面を除き全面に鉄釉が施釉されている。1423は口径231mmを測る堺堀石系の陶器製擂鉢である。内面には10条1単位の描目が付けられている。1424は塗土が施され堅く焼き縮められた備前の陶器壺である。1425是在地産の陶器壺である。口径320mmを測り下部には注ぎ口が付いている。鉄釉が施釉されており見込みには目模が4カ所ある。1426は口径264mmを測る在地産の陶器製の鉢である。内外面共に厚く鉄釉がかけられているが、口縁の上端部は釉がはぎ取られている。内面見込み部には目模が4カ所残されている。1427は瀬戸美濃系の陶器製火鉢である。体部外面には型押しによる陰刻が施され綠釉がかけられている。1428は瀬戸美濃系の陶器製水盤？の獸足である。1429は口径120mmを測る土師質の灯明皿で、口縁部には煤が付着している。1430は関西系の土師質の培焰である。外面には煤が付着している。1431は土師質のミニチュア土瓶である。型押し貼合せで製作され、外面上部には綠釉が掛けられ、底部には3カ所に足が貼り付けられている。1432は陶器ミニチュアの玩具？である。



第370図 SK1046出土遺物実測図(1)



第371図 SK1046出土遺物実測図(2)

土坑 47 (SK1047) (第372図)

2区のC-14・15グリッドにまたがって検出された長軸を東西方向にとる長さ約1.8m、幅1.3mの大きさの楕円形の土坑である。皿状に掘り込まれた深さ約0.3mの遺構の埋土には陶磁器の破片や礫とともに直径2cmから5cm近い焼土や炭化物をブロック状に含んでいる。

出土遺物 (第373図)

1433は肥前波佐見の磁器製髮油壺である。胴丸形で外面には唐草と鳥が染付により描かれている。高台壺付部分は露胎で若干の砂が付着している。1434は肥前唐津の丸形の陶器皿である。体部下面下半部を除き、青緑釉がかけられている。内面見込部には蛇ノ目釉剥ぎが施され高台内には砂が付着している。1435は堺明石系の陶器製擂鉢である。1436・1437は軒丸瓦である。何れも瓦当部に稻毛紋が配された蜂須賀家替紋瓦である。

土坑 52 (SK1052) (第374図)

遺構の北側が調査区外に延びているため正確な大きさや形が不明であるが、2区のD・E-14・15グリッドにまたがって検出された土坑である。調査区内で検出された遺構は東西約4.0m、南北1.2mと大型で、深さも0.4mある。断面逆台形状に掘り込まれた遺構内の埋土には礫とともに陶磁器や瓦の破片が多量に含まれている。遺物の出土状況から廃棄土坑と考えられる。

出土遺物 (第375図)

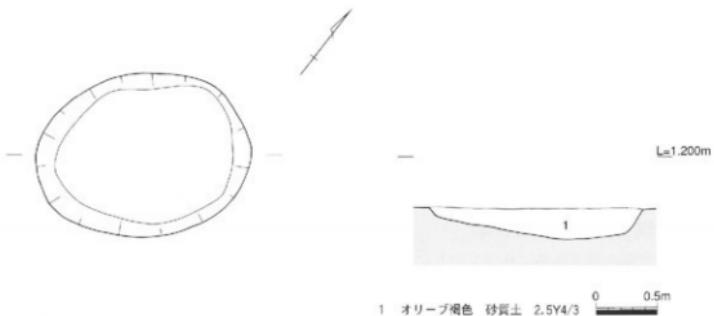
1438は肥前系の白磁の小碗である。1439は肥前系の染付磁器蓋で、内外面には風景が描かれている。1440は肥前系の磁器の火入れと思われる。筒型の本体と蛇ノ目凹型高台を持ち、底部内面は無釉である。外面には染錦と上絵付による菊、七宝に蓮弁が、内面には口縁部に四方櫛文が描かれている。1441は型押により鳳凰が陽刻された三田青磁の磁器片で器種は不明である。1442は高取系小石原窯の碗である。鉄釉の上から薺灰釉と黄灰釉が掛け流しされている。高台内は回転ヘラ削りされ壺付部分は無釉である。1443は堺明石系の陶器製擂鉢である。1单位10条/2.7cmの擂目がつけられ、見込み部は三角状擂目になっている。1444は底部に回転糸切り痕が残された土師質の小皿である。1445は土師質の焼塗壺の蓋である。内面には布目痕が残されている。

土坑 53 (SK1053) (第376図)

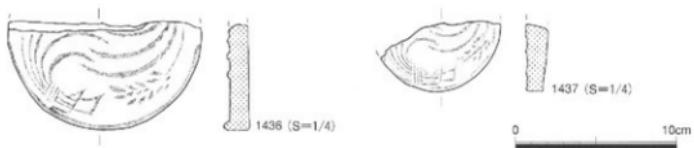
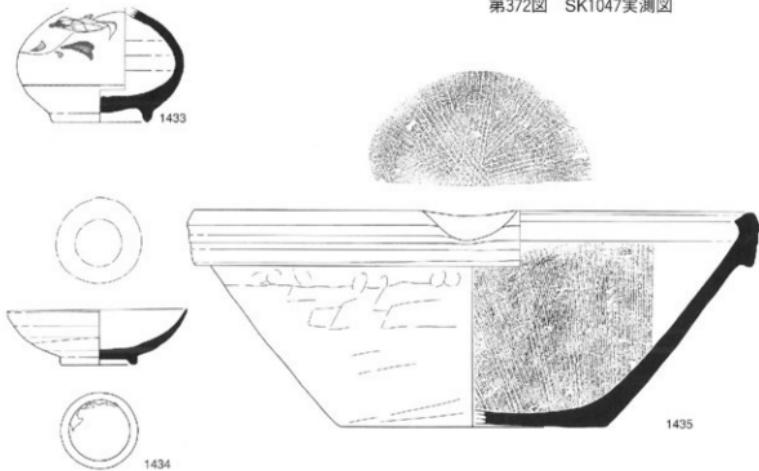
2区のD・E-15・16グリッドにまたがって検出された土坑である。遺構の北側が調査区外にのびているため正確な形や大きさは不明であるが、調査区内に残された遺構は東西約5.2m、南北2.3mほどの広がりを持ち、深さも0.6mある。遺構内の埋土には陶磁器の破片とともに多量の瓦片が投棄されていた。遺物の出土状況から瓦などの廃棄土坑と考えられる。

出土遺物 (第377図)

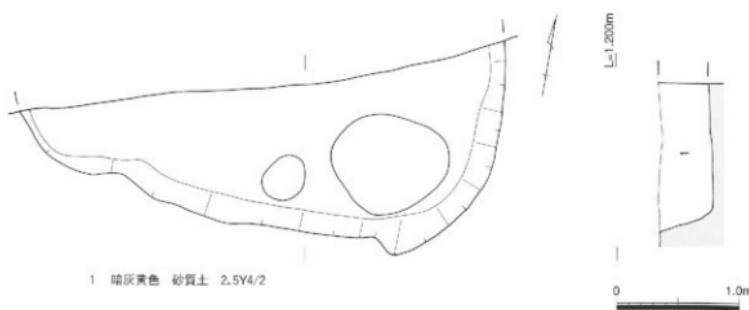
1446は陶器の小碗である。端反形で外面には鳥と梅が描かれ、内面は長石釉、外面には灰釉が掛け分けされている。1447は磁器の小杯である。型打成形で高台壺付け部分が釉剥ぎされ、砂が付着している。1448は備前の陶器鉢である。凹角の鉢で、外面には火捺痕、内面には牡丹餅が見える。1449は堺明石系の陶器製擂鉢である。内面には1单位11条/2.4cmの擂目が放射状につけられている。見込部の擂目は三角状である。1450は堺明石系の附器製擂鉢である。内面には1单位9条/3.6cmの擂目が放射状に付けられている。1451は瀬戸美濃系の陶器壺である。高台部を除き御深井釉がかけられ、見込部には胎土目痕が4カ所に見える。1452は陶器の土瓶である。注口部はS字状をしている。外面上半には漿土が



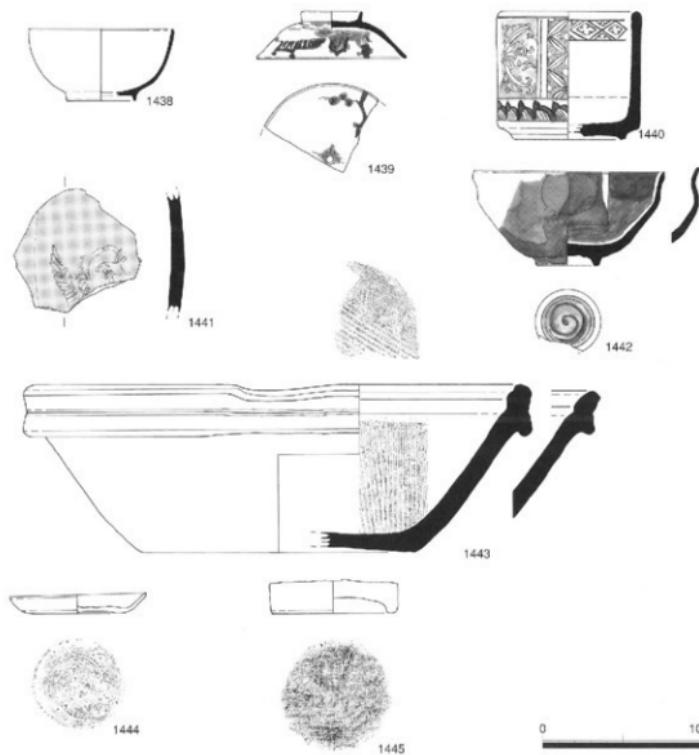
第372図 SK1047実測図



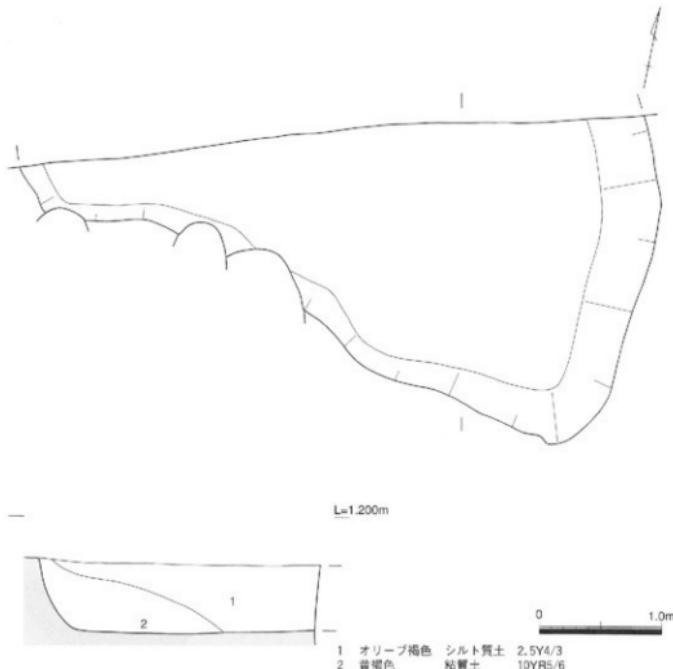
第373図 SK1047出土遺物実測図



第374図 SK1052実測図



第375図 SK1052出土遺物実測図



第376図 SK1053実測図

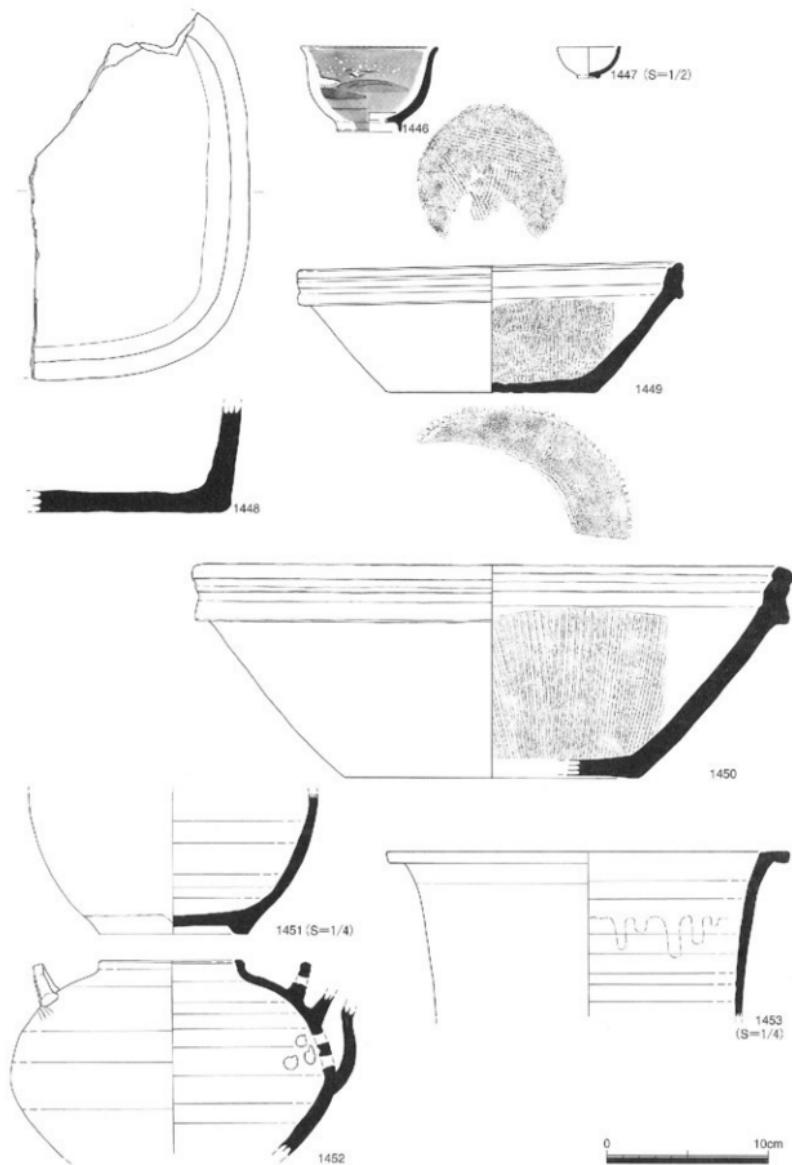
施されている。1453は瀬戸美濃系の陶器鉢である。折線形で外面と内面上端には御深井釉がかけられており植木鉢であると思われる。

土坑 55 (SK1055) (第378図)

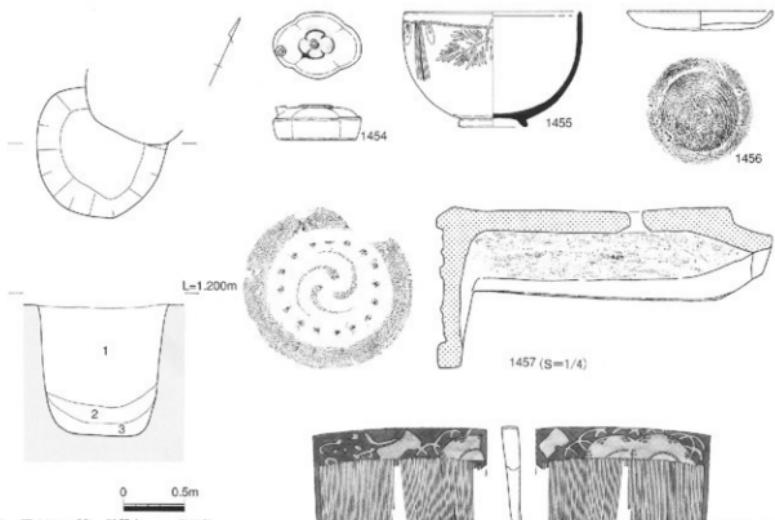
1区のJ-10グリッドから検出された一辺約1.1mの方形の土坑である。断面逆台形状に掘り込まれた深さ約1.0mの遺構内には締まりの良い灰または灰オリーブ色土が堆積し、土師器や瓦の破片が多く出土している。

出土遺物 (第379図)

1454は肥前系の磁器製水滴である。型作り貼合せで製作され穿孔部は染付と鉄釉で装飾されている。1455は京信楽系の陶器碗である。外面には上絵付けにより注連縄文が描かれている。1456は土師質の灯明皿である。底部には回転糸切り痕が残され、口縁には煤が付着している。1457は瓦当部に丸ノ中透珠三巴の紋が配された軒丸瓦である。釘穴が1カ所に見える。1458は木製の櫛である。全面に黒漆が塗られたうえに、赤漆により文様が描かれている。

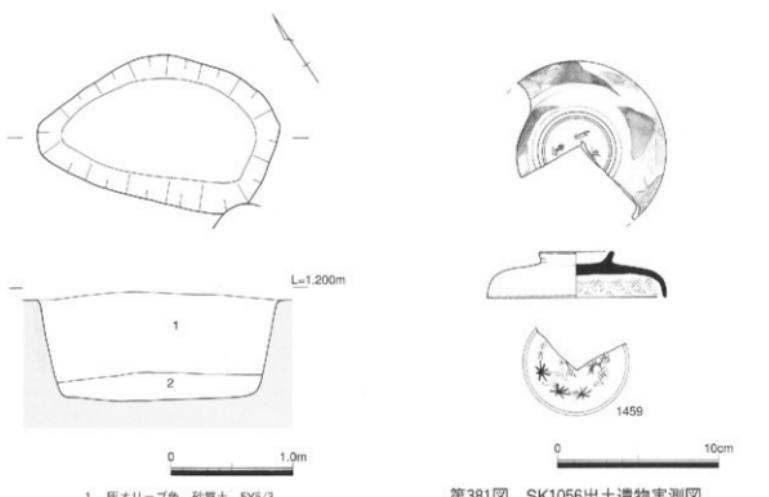


第377図 SK1053出土遺物実測図



第378図 SK1055実測図

第379図 SK1055出土遺物実測図



第380図 SK1056実測図

第381図 SK1056出土遺物実測図

土坑 56 (SK1056) (第380図)

1区のK-10・11グリッドにまたがって検出され、長軸を北西方向にとる長さ約2.0m、幅1.2mの不整楕円形の土坑である。断面が皿状に掘り込まれた遺構は深さが約0.9mと浅く縁まりの良い灰オリーブ色土が堆積している。

出土遺物 (第381図)

1459は肥前系の染付磁器蓋である。体部外面には山水、内面には四方櫻が描かれ、内面見込部はに松竹梅が環状に描かれている。高台内面には「富貴春」の銘が書き込まれている。

土坑 57 (SK1057) (第382図)

3区のJ-14グリッドから検出され、長軸を東西方向にとる長さ約1.1m、幅0.9mの楕円形の土坑である。断面逆台形状に掘り込まれた深さ約0.7mの遺構内は縁まりの良いオリーブ黒色土で中には陶磁器や瓦などの破片が多く含まれている。

出土遺物 (第384図)

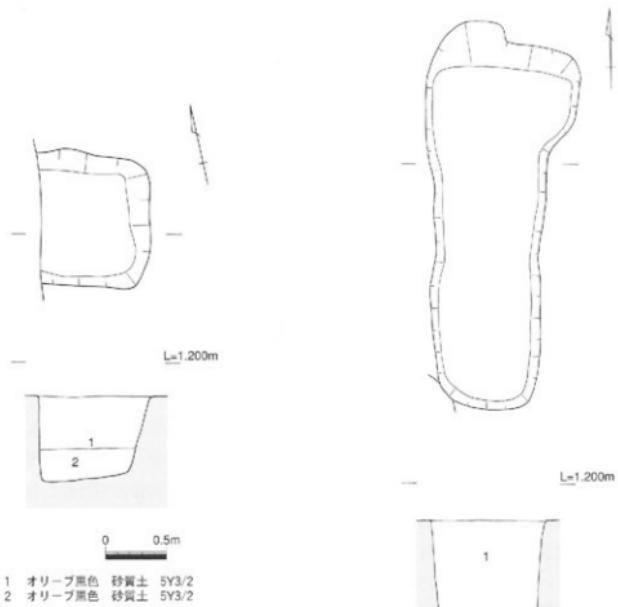
1460は外面に折枝竹が描かれた肥前系の染付磁器蓋である。1461は肥前系の染付磁器鉢である。型打成形で製作され高台部分は蛇目四葉高台である。素描により体部外面には花唐草、内面には梅に松が描かれ、内面見込部にも花唐草が描かれている。1462は肥前系の磁器製御神酒利である。外面には染付により草花が描かれている。1463は肥前系の陶器碗である。高台の部分を除き灰釉がかけられ、口縁部には鉄釉で装飾されている。1464は内面見込部に陰刻櫻押による雲龍が描かれた在地の陶器で張平の型打小判皿である。全面に黄釉がかけられ、底部外面にはハリ支え痕がみえる。19C中葉のものである。1465は肥前系の陶器鉢である。体部は外面下半部を除き灰釉がかけられ、内面には薺灰釉が流し掛けられ見込部には蛇目釉剥ぎが施されている。1466は型打で製作された備前の灯明皿である。内面には陽刻型押により斜格子に円が描かれ、全面に塗土が施されている。1467は備前の陶器製灯明皿で、塗土が施されている。1468は京信楽系の陶器製灯明皿である。内面には梅日が2条つけられ、見込部にはハマ痕が認められる。灰釉がかけられている。1469是在地の大谷焼の陶器製灯明器台である。底部外面を除き灰釉がかけられている。1470是在地の大谷焼の陶器製乗燭である。台付たんころ形で鉄釉がかけられている。底部は外面に穿孔が加えられている。1471は瀬戸美濃系の陶器製蚊遣りである。灰釉、青緑釉が流しがけされている。1472は京信楽系陶器製の合子の身である。淡黄色の胎土で底部外面と口縁上端を除き灰釉が施されている。1473は備前の陶器製小壺である。外面上には沈線が6条入り、塗土が施されている。1474は土師質の栄燭である。1475は土師質のミニチュア家屋である。型押貼合せ成形で製作され屋根部には墨書きがある。

土坑 58 (SK1058) (第383図)

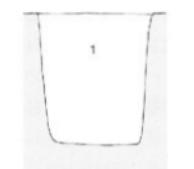
3区のJ-14グリッドから検出された南北方向の長軸を持つ長さ約3.2m、幅1.0m、深さ1.1mの不整楕円形の土坑である。壁面が垂直に近い角度で掘り込まれた遺構内には埋土中には炭化物の他に陶磁器や土師器、瓦、木片が多量に含まれていることから廃棄土坑と考えられる。

出土遺物 (第385・386図)

1476是在地産の陶器で張平の溝縁小判皿である。型押し成形で製作され、黄色の釉がかけられている。内面見込部には雲龍が陰刻で描かれ、底部にはハリ痕が残されている。1477は口径が66mmを測る京信

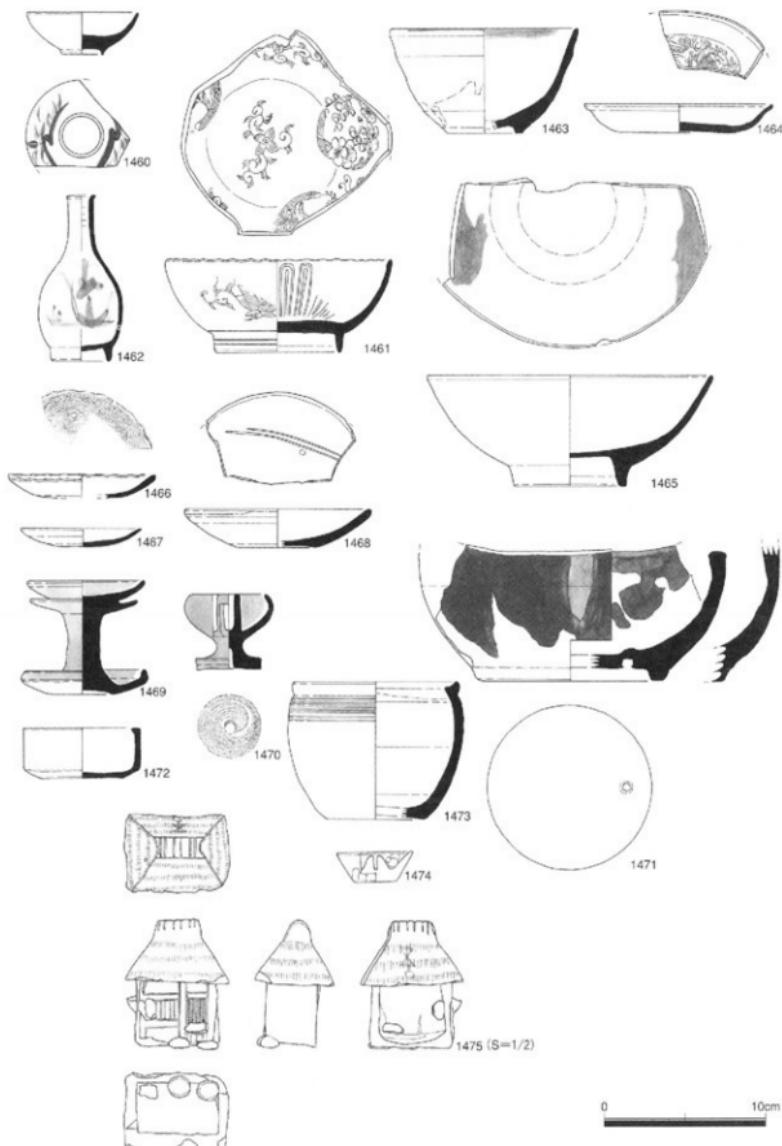


第382図 SK1057実測図



第383図 SK1058実測図

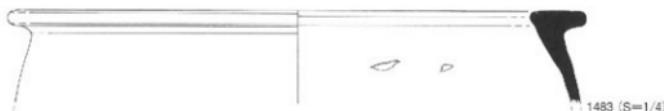
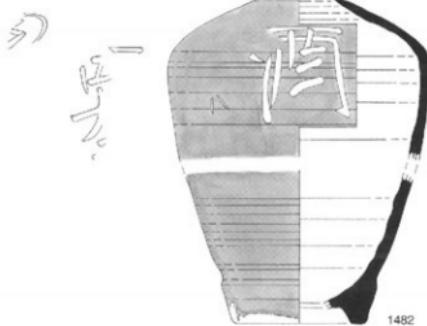
楽系の陶器皿で、内面には灰釉がかけられている。1478は陶器製の壺または瓶である。底部に焼成後の穿孔がおこなわれており植木鉢等に転用されたと思われる。1479は備前の陶器製匣鉢である。堅く焼き締められ、底部にはスノコ痕が残されている。1480は陶器製の土瓶の蓋である。上部には同心円の櫛目文様が広がり、鉄釉がかけられているが、ツマミは剥落している。内面見込部には、方形枠内に「全默知」の刻印が捺されている。1481・1482は在地の陶器で大谷焼の徳利である。鉄釉がかけられた体部外面上にはヘラ描きで横向きに「□□酒」と彫られている。1483は口径386mmを測る堅く焼き締められた関西系の陶器壺である。1484は口径234mmの土師質の火消し壺の蓋である。1485は土師質の焼塙壺の蓋である。1486は関西系土師質の風炉である。底部は同心円削りであり、3脚を削り出している。体部内外面は回転ヘラ削りが顕著で、前部には梢円形の窓が切られ、口縁端部には受けが貼付けられている。1487は瓦質の甌の付属品である。1488は型押し成形で製作された土師質の犬の人形である。1489は菊花紋が配された軒丸瓦である。



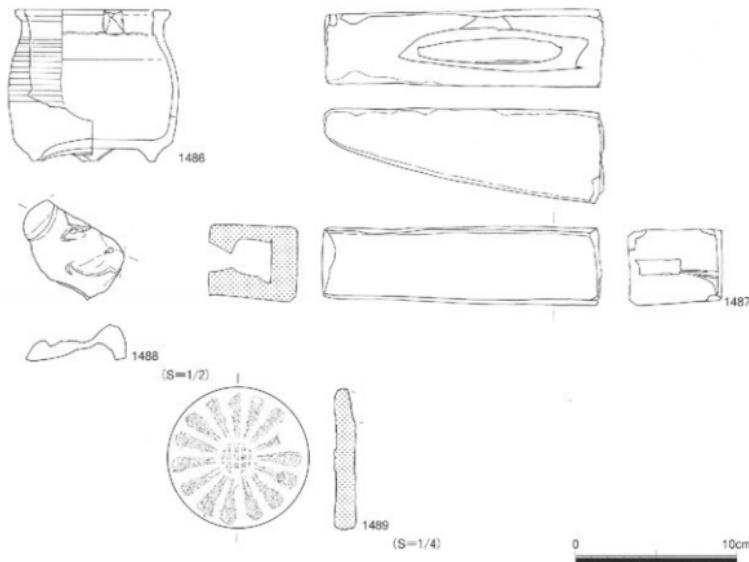
第384図 SK1057出土遺物実測図



1480



第385図 SK1058出土遺物実測図 (1)



第386図 SK1058出土遺物実測図(2)

土坑 60 (SK1060) (第387図)

3区のJ-15グリッドから検出された長軸を南北方向にとる長さ約1.1m、幅0.9mの楕円形の土坑である。断面が逆台形状に掘り込まれた深さ約0.3mの遺構内には礫や瓦片が多く含まれている。

出土遺物 (第388図)

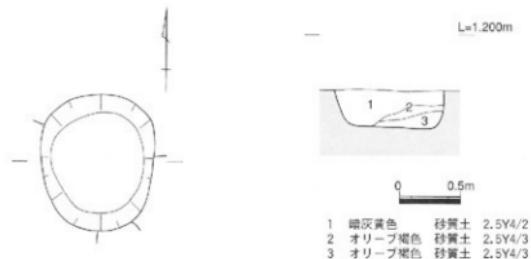
1490は瀬戸美濃系磁器の罐反碗である。体部外側には染付により圓線と花唐草文が描かれ、高台内には圓線内に方形枠内「角福」が書かれている。また、内面には見込部の二重圓線内に草花が描かれている。1491は肥前系唐津の陶器鉢である。内面には灰釉と白泥により刷毛目が描かれ見込部には蛇ノ目釉剥がれが施されている。1492は削り出し高台を持つ肥前系陶器の碗である。内面見込には目痕が見える。1493は陶器の尿瓶である。底部は回転糸切りされ、底部を除き外側には鉄釉が、内面には褐釉が施釉されている。1494は土師質の秉燭である。鉢形で中央突起部に灯心油痕が見える。1495は土師質のままごと道具でミニチュアの土鍋蓋である。型作貼付成形で製作され、無釉である。

土坑 67 (SK1067) (第389図)

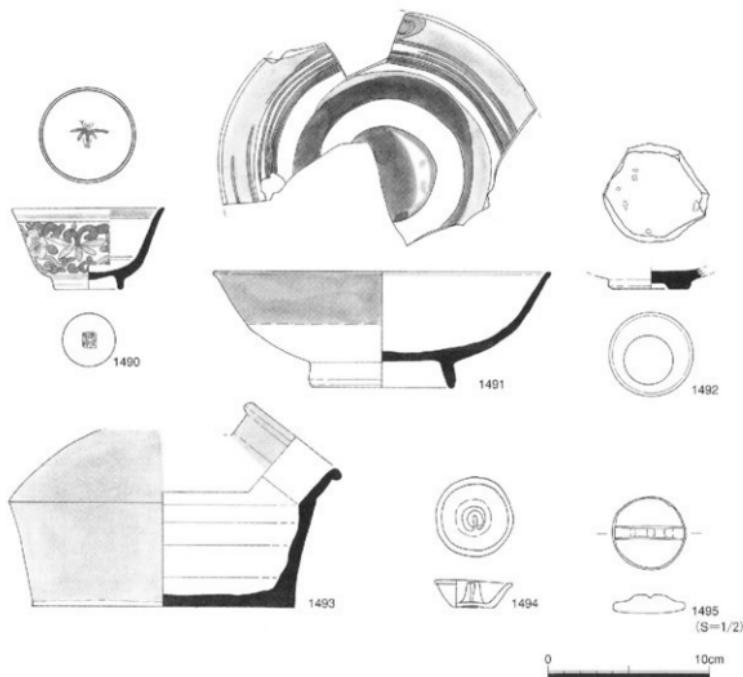
3区のK-15グリッドから検出された長軸を南北方向にとる長さ約0.9m、幅0.7mの不整円形の土坑である。断面逆台形状の深さ約0.6mの遺構内には瓦片や礫が多く含まれている。

出土遺物 (第390図)

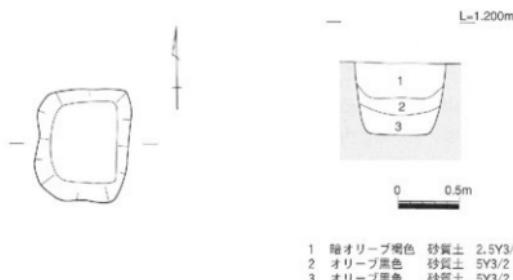
1496は肥前系の磁器皿である。丸形で、外側には唐草と圓線、内面には花と二重圓線が染付と鉄釉で描かれている。覺付部分は露胎で砂が付着している。1497は肥前波佐見の染付磁器皿である。体部外側



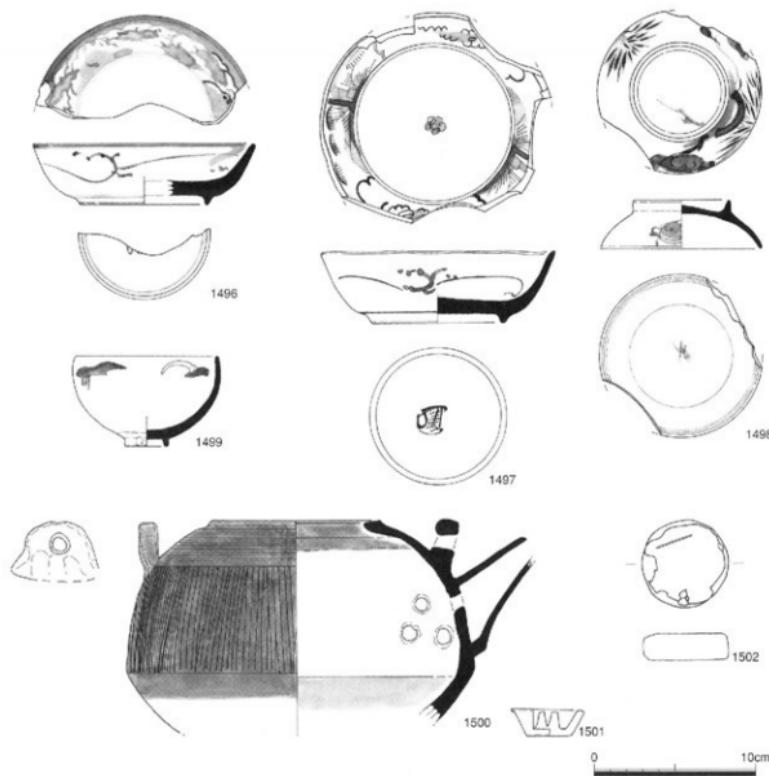
第387図 SK1060実測図



第388図 SK1060出土遺物実測図



第389図 SK1067実測図



第390図 SK1067出土遺物実測図

に唐草、内面には草樹が描かれている。また、底部には「済福」の崩し字が書き込まれ、内面見込部にはコンニヤク印判による五弁花文が付けられている。1498は肥前系の磁器製蓋である。体部外面には筆、岩、枝、内面見込部には蝶が染付により描かれている。1499は半球形の体部を持つ京信楽系の陶器製小碗である。外面には上絵により山水が描かれ、削り出しの高台部分を除き全面に灰釉がかけられている。1500は陶器製の土瓶である。注口部は3ヶ所穿孔されている。体部は外面に縱方向の刷毛目が施され、鉄袖がかけられている。内面の口縁部周辺にも鉄袖がかけられている。底部外面は一部に煤が付着している。1501は土師質の乗場である。口縁部と内面の突起部には煤が付着している。1502は瓦質の加工円盤である。

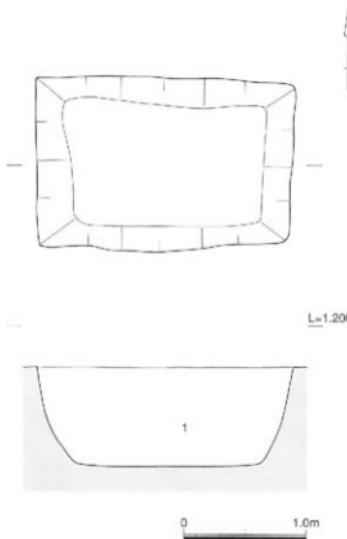
土坑 73 (SK1073) (第391図)

3区のK・L-16・17グリッドにまたがって

て検出された長軸を東西方向にとる長さ2.1m、幅1.4m の方形の上坑である。断面逆台形状に掘り込まれた深さ約0.8m の遺構内からは、陶磁器や土師器、瓦などの破片が多く出土していることから、廃棄土坑と考えられる。

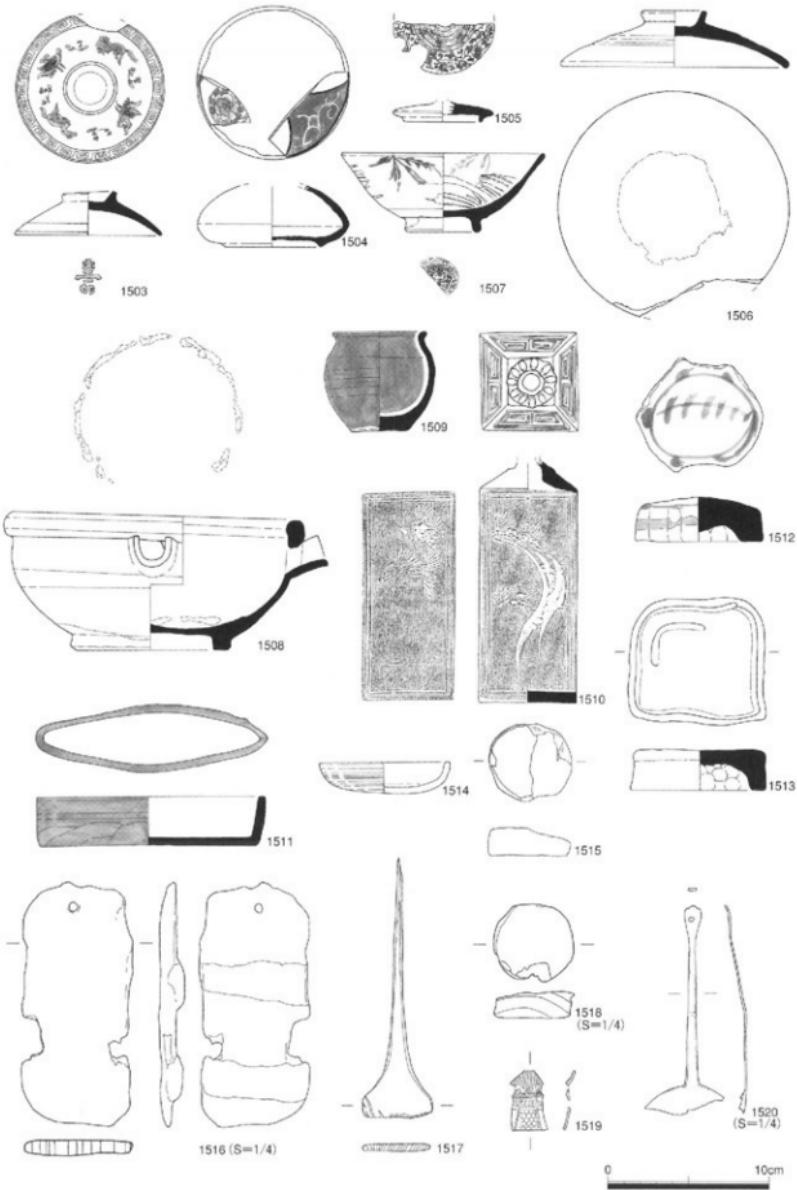
出土遺物 (第392図)

1503は磁器製碗蓋である。染付による赤彩が内外面に施されている。明治のものか? 1504は瀬戸美濃系の磁器製油壺である。型作による貼付で体部外面には銅版転写による牡丹と唐草が描かれている。明治から大正のものか? 1505は肥前系の磁器製合子蓋である。外面には染付による唐草や上絵付けが施されている。1506は陶器の蓋である。灰釉が施釉されているが高台と内面見込部は露胎のまま残されている。瀬戸美濃系のものかと思われる。1507は京信楽系の陶器鉢である。高台部分を除き灰釉が施されている。内外面には上絵による草文と刷毛目文様が描かれ、高台内の多方形枠内には文字が入る刻印がある。1508は肥前系の陶器製片口鉢である。高台部を除き内外面に灰釉が施釉されている。見込部には重ね焼き痕跡が残されている。1509は在地産の大谷焼のものと思われる鉄釉が全面に掛けられた陶器の小壺である。1510は板作り貼合せの型打成形で製作された備前系の陶器製角徳利である。外面には松が陰刻され火拂痕が見える。1511は瀬戸美濃系の陶器の蓋である。容器の内面はコンクリート質のもので埋められていて不明であるが、外面は底部を除き鉄釉が施されている。1512・1513は京信楽系の陶器の文鏡かと思われる。型押成形で製作され、内面には指オサエの痕が残されている。外面は上部のみに灰釉が掛けられ、1512は鉄絵による亀が描かれている。1514は外面に顔料による赤彩が施された土師質の皿である。1515は瓦質の加工円盤である。1516は木製の連歛下駄である。1517は木製の櫛である。1518



1 灰オリーブ色 磁質土 5Y4/2

第391図 SK1073実測図



第392図 SK1073出土遺物実測図

は加工木片である。1519は銅製の箱庭道具で城郭である。1520は銅製の杓子である。

土坑 88 (SK1088) (第393図)

3区のM-10・11グリッドにまたがって検出された長径1.5m、幅1.3mの円形の土坑である。断面逆台形状に掘り込まれた深さ約0.3mの遺構内からは陶磁器や貝殻の破片とともに多量の瓦片が出土している。

出土遺物 (第394図)

1521は肥前系磁器の鉢である。1522は京信楽系陶器の碗で、腰張り形の注連縄文である。削出し高台で、外面には色絵により注連縄が描かれている。1523は京信楽系の陶器碗である。削出し高台で高台脇も削込まれ、外面体部には鉄絵により若松が描かれ、高台周辺を除き灰釉が掛かる。1524は京信楽系陶器の碗である。端反形の削出し高台で、高台周辺を除き灰釉が掛かる。1525は瓦質の加工円板である。長径は70mmを測る。

土坑103 (SK1103) (第395図)

3区のM・N-15グリッドにまたがって検出され、長軸を南北方向にとる長さ約3.5m、幅1.7mの不整梢円形の土坑である。断面逆台形状に掘り込まれた深さ0.8mの遺構内には陶磁器をはじめ土師器、瓦などの破片が多量に含まれていることから廃棄土坑と考えられる。

出土遺物 (第396図)

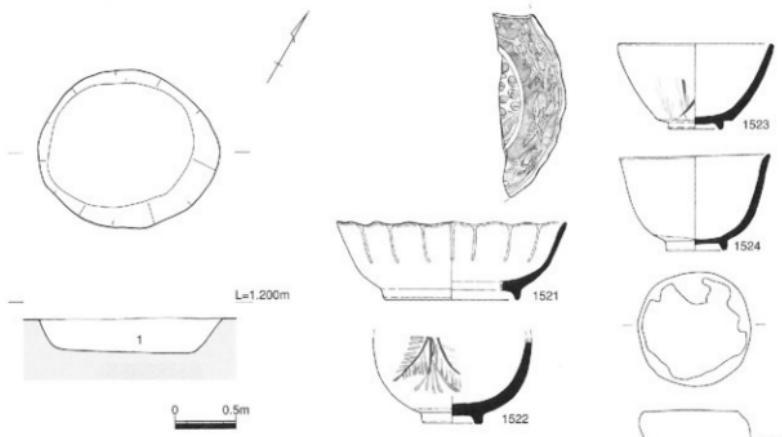
1526は肥前系磁器の碗である。外面には色絵により草花が描かれている。1527は肥前系磁器の染付碗である。外面には松竹梅が描かれている。1528は肥前系磁器で染付の猪口である。外面にはコンニャク印判による文が見える。1529は肥前系磁器の染付蓋である。摘みが貼付され、外面には草花文が描かれている。1530は肥前唐津の繪縁皿である。削出しの高台部分を除き灰釉がかけられている。内面見込部には砂目痕が3カ所見える。1531は口径312mmを測る陶器製の植木鉢である。底部の中央には穿孔が見られる。1532は土師質の灯明皿である。底部には回転糸切り痕が見える。1533は石製品の硯である。石材は泥岩で底部には「宝永八年」と陰刻されている。

土坑 108 (SK1108) (第397図)

4区のE-18・19グリッドにまたがって検出された長軸を東西方向にとる長さ約2.5m、幅1.2mの大きさの長方形の遺構である。逆台形状に掘り込まれた深さ約0.4mの遺構内には焼土粒や炭化物とともに陶磁器や瓦片を多く含む比較的締まりの良い暗オリーブ色の砂質土が堆積している。

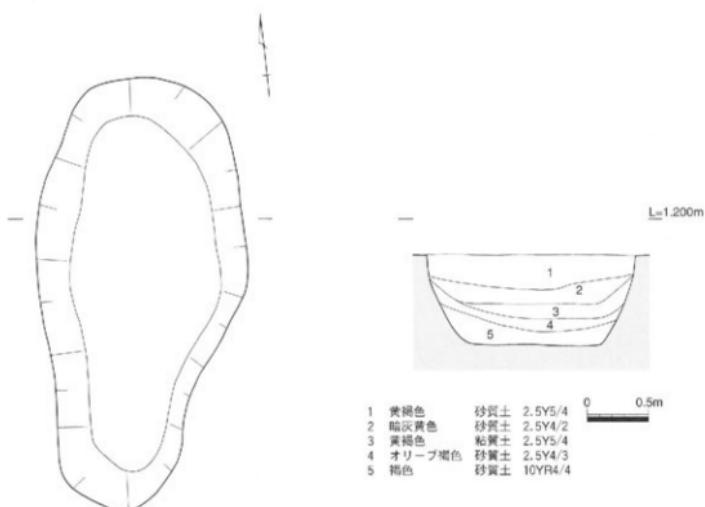
出土遺物 (第398図)

1534は肥前系の染付磁器皿である。体部内面には松の葉が描かれ、内面見込み部は蛇ノ目釉剥ぎが施されている。1535は口径174mmを測る肥前系の陶器皿である。高台部分を除き灰釉がほぼ全面に施され、内面見込み部は蛇ノ目釉剥ぎが施されている。1536は陶器製灯明受皿である。全面に釉がかけられ口縁部には焼が付着している。1537は陶器製の柄杓である。1538は瀬戸美濃系の陶器製片口鉢である。体部上半と内面全体に灰釉がかけられ、内面見込み部には重ね焼きによる日痕が3カ所残されている。18Cのものである。1539は万古系の陶器製土瓶の蓋である。上面には塗上が施されている。19Cのものである。1540は土師質の火消し壺の蓋である。内外面ともに焼が付着している。

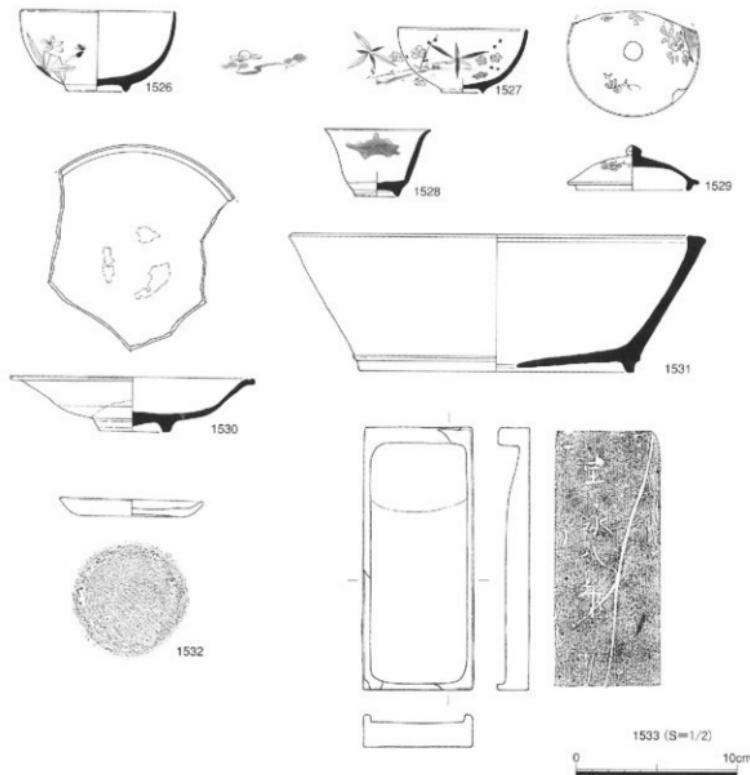


第393図 SK1088実測図

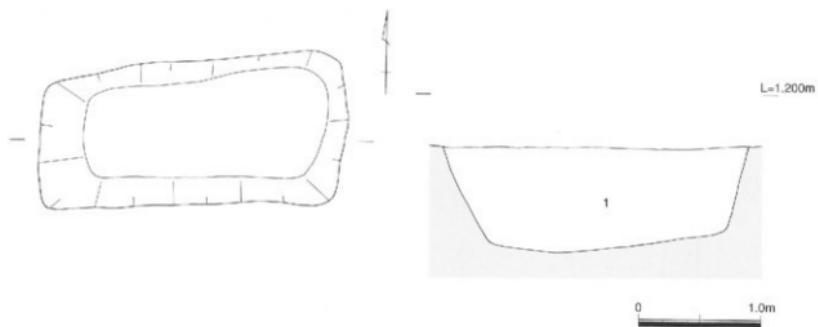
第394図 SK1088出土遺物実測図



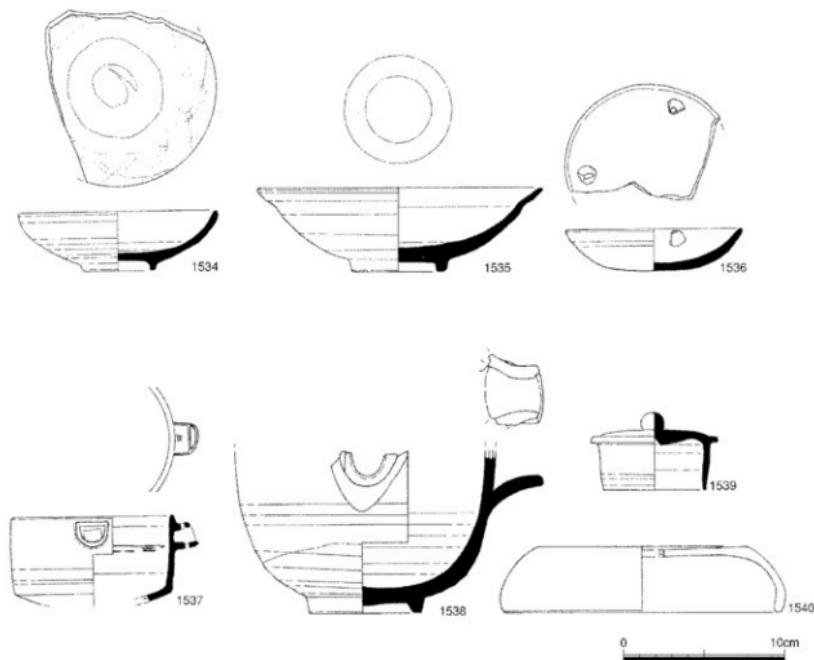
第395図 SK1103実測図



第396図 SK1103出土遺物実測図



第397図 SK1108実測図



第398図 SK1108出土遺物実測図

土坑114（SK1114）（第399図）

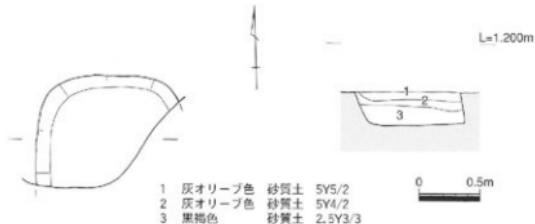
遺構の南側が大きく削平されているため正確な大きさや形を明らかにすることができないが4区のE-20グリッドから検出された遺構である。残された部分は東西約0.9m、南北0.9m、深さ0.3mほどで、遺構内からは片岩の破片や礫が多く出土している。

出土遺物（第400図）

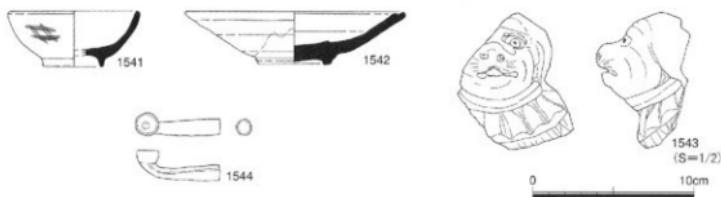
1541は肥前波佐見の磁器小碗である。丸形で外側には染付により井桁が描かれ、高台部分は釉が剥ぎ取られた後に鉄漿が塗られている。1542は肥前唐津の溝縁皿である。外面は底部を除き石灰釉が施釉され、内面見込部には砂目痕が残されている。また、削り出しの高台部分にも砂の付着が見られる。1543は白磁の犬の人形である。1544は銅製品の煙管雁首である。

土坑140（SK1140）（第401図）

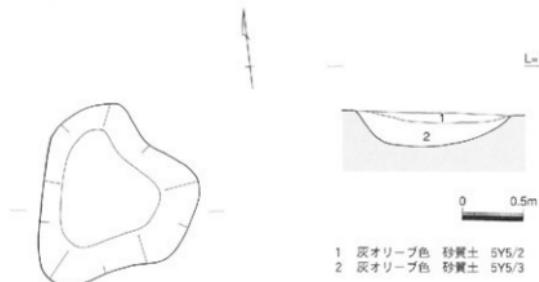
4区のG-19・20グリッドにまたがって検出された長さ約1.4m、幅1.3mの不整形な形の土坑である。U字状に掘り込まれた深さ0.3mの遺構の埋土中には、微量の炭化物や焼土粒とともに、瓦片や礫が含まれる。



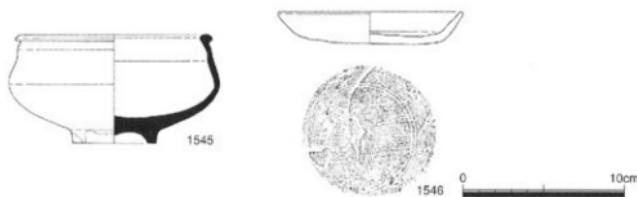
第399図 SK1114実測図



第400図 SK1114出土遺物実測図



第401図 SK1140実測図



第402図 SK1140出土遺物実測図

出土遺物（第402図）

1545は関西系の陶器製香炉である。扁平鼎形の割り出し高台で、内面下半部と高台分部を除き灰釉がかけられている。また、高台疊付部分には目痕が3ヶ所見える。1546は底部の切り離しに回転糸切り技法が使用された土師質の小皿である。底部には回転糸切り痕のほかに板目痕が残されている。

土坑 141（SK1141）（第403図）

4区のG-18グリッドから検出された長軸を東西方向にとる長さ約2.1m、幅1.5mの大きさの遺構である。断面が逆台形に掘り込まれた遺構の埋土中からは石や木片とともに陶磁器や瓦片が多量に出土していることから廃棄土坑と考えられる。

出土遺物（第404図）

1547は色絵の磁器碗である。外面には花、内面見込部には蝶が描かれている。高台疊付部分は意胎のまま残されている。1548は外面に蛸唐草文が描かれた肥前系の染付磁器碗である。1549は肥前系の外青磁の染付碗の蓋である。体部外面は青磁で体部内面には四方捺文、見込部には二重圓線内に五方花文が描かれ、高台外底面には方形枠内に「福」の変形字が書き込まれている。1550は色絵の磁器皿である。外面には四方捺に花、内面には花が描かれ、内面見込部には二重圓線内に「魁」の銘が見える。1551は肥前系の青磁の香炉である。1552は京信楽系の陶器碗である。外面には注連縄文が色絵により描かれている。18Cから19Cにかけてのものである。1553は陶器製の蓋である。外面は塗土が施され内面には透明釉がかけられている。1554は内面に灰釉がかけられた京信楽系の陶器製灯明皿である。1555は陶器製の鍋である。内面には柿釉がかけられているが、外面は無釉で煤が付着している。1556は土師質の秉燭である。突起部には煤が付着している。1557は土師質の鉢である。1558は瓦質の熔塔である。

井戸

井戸 1（SE1001）（第405図）

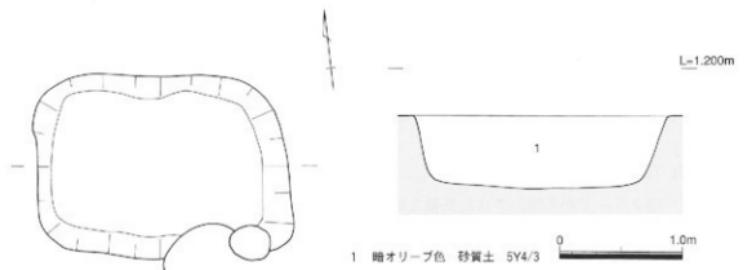
1区のL-10グリッドから検出された直径約2.3m、深さ1.1mの不整円形の掘り込みの中に、底板を持つ直徑約0.7mの木桶を置いて井戸枠とした円形桶側式の構造を持つ井戸である。土坑の底は部分的にさらに下に向かって0.9mほど掘り込まれ、桶の底板にあけられた穴に差し込まれた取水用の竹筒が置かれている。竹筒の周囲はさらに補強のためか板材で囲われている。

出土遺物（第406図）

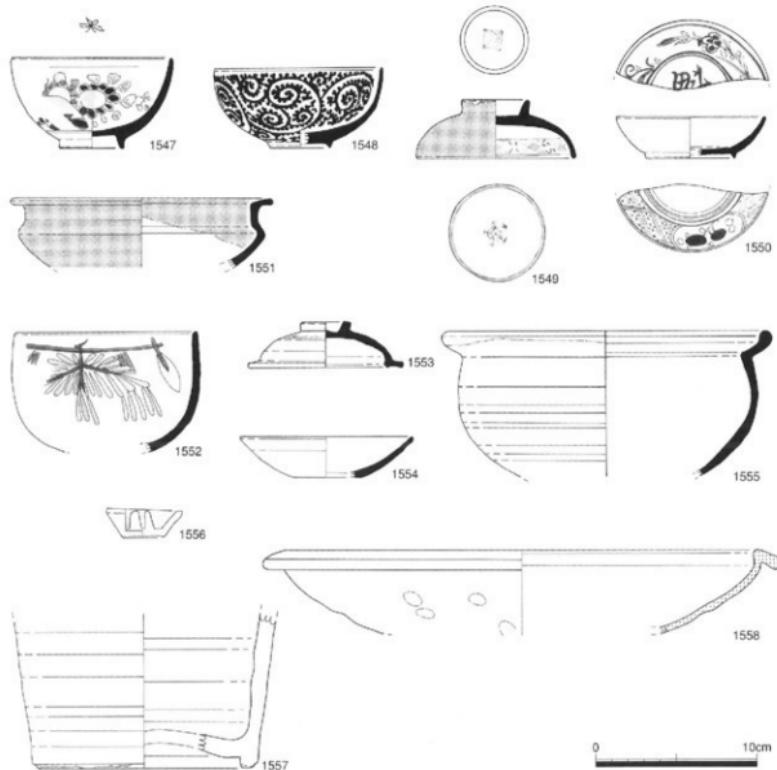
1559は堺明石系陶器擂鉢である。底部は焼成後内面から外面に向けて開けられた穿孔がある。植木鉢に転用されたものと思われる。

井戸 2（SE1002）（第407図）

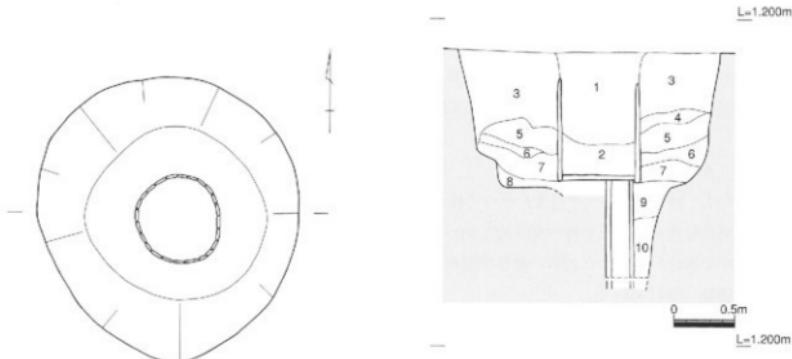
1区のL-6グリッドから検出された直径約1.1m、深さ1.7m以上の不整円形の掘り込みの中に、底板が敷かれた直径0.6mの木桶を置いて井戸枠とした円形桶側式の井戸である。木桶は掘り込みの底から約50cm上部に据えられ、底板の中央付近にあけられた穴に差し込まれた取水用の竹筒が下に向かってのびている。



第403図 SK1141実測図

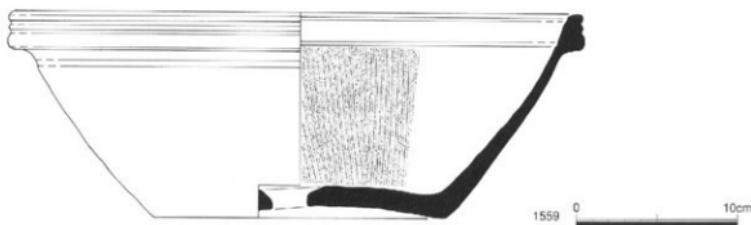
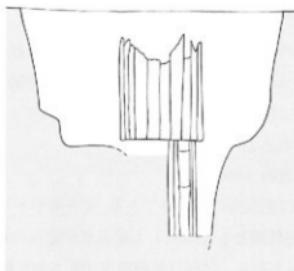


第404図 SK1141出土遺物実測図



- | | | | |
|----|---------|-----|----------|
| 1 | 鷗オリーブ褐色 | 砂質土 | 2.5Y3/3 |
| 2 | 鷗オリーブ灰色 | 砂質土 | 2.5GY4/1 |
| 3 | 灰黄褐色 | 砂質土 | 10YR4/2 |
| 4 | 暗緑灰色 | 砂質土 | 7.5GY4/1 |
| 5 | 鷗オリーブ灰色 | 砂質土 | 5GY4/1 |
| 6 | 緑灰色 | 砂質土 | 10GY5/1 |
| 7 | 暗オリーブ灰色 | 砂質土 | 2.5GY3/1 |
| 8 | 暗オリーブ灰色 | 砂質土 | 5GY3/1 |
| 9 | 暗オリーブ灰色 | 砂質土 | 5GY3/1 |
| 10 | 暗緑灰色 | 砂質土 | 10GY4/1 |

第405図 SE1001実測図



第406図 SE1001出土遺物実測図

出土遺物（第408図）

1560は肥前唐津の陶器皿である。削出高台で疊付部分は面取りされ葵灰釉がかけられている。底部は露胎で高台外底面には「十」の墨書が認められる。1561は木製の椀である。全面に赤漆が塗られているが下地には黒漆が見える。1562は長方形の板状加工木である。大小5カ所の穿孔と鉄釘穴が4カ所に見られる。

井戸 4 (SE1004) (第409図)

1区のL・M-10グリッドにまたがって検出された直径約2.1m、深さ1.1m以上の不整円形の掘り込みの中央部付近に、底板を持つ直径約0.6mの木桶を置いて井戸枠とした円形桶側式の井戸である。調査を途中で断念したことと底板の遺存状況が悪かったため、取水用の竹筒を伴っていたかは不明である。

出土遺物（第410図）

1563は瀬戸美濃系の陶器皿である。丸形で内外面には文が染付で描かれている。

井戸 5 (SE1005) (第411図)

3区のL-12グリッドから検出された直径約1.3m、深さ1.5m以上の不整円形の掘り込みの中に、直径約70cmの木桶を置いて井戸枠とした円形桶側式の井戸である。調査を途中で断念したため木桶の底板の有無は確認出来なかった。井戸を廃棄する時点で井戸内部に遺構検出面から1.2mにわたって大型の礫が詰め込まれていた。

出土遺物（第412図）

1564は肥前産の白磁壺である。沈香壺形をしており口縁部内面と疊付部分を除き全面に釉がかけられている。内外面ともに降灰による黒点が見られる。1565は板作り梨巻付の土師質土管である。長径400mm、短径146mmを測る。1566は均整唐草が配された軒棟瓦である。正面脇の方形枠内に「万新」の刻印がある。

柱穴

柱穴 23 (SP1023)

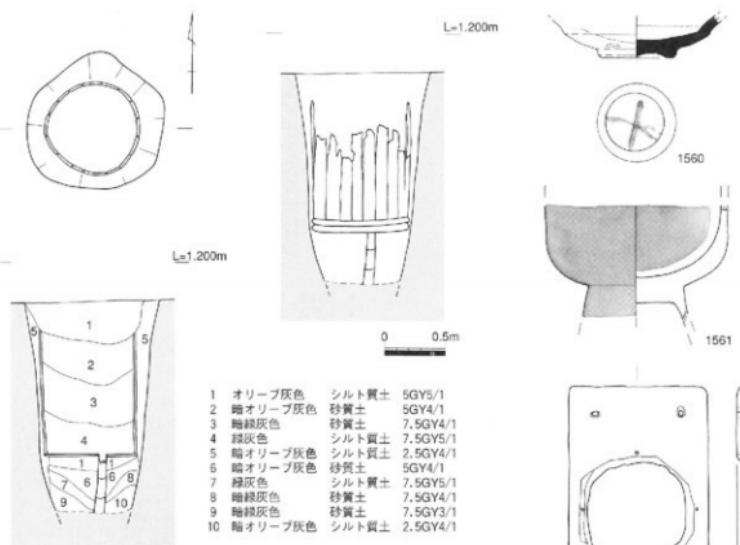
2区のD-3・4グリッドにまたがって検出された直径約1.4m、深さ0.4mの大きさの円形の遺構である。遺構の内部には片岩の各礫が詰め込まれていたことから建物の基礎に伴う地業と考えられるが、対応する柱穴は見あたらない。底面は平坦に掘り込まれ、板が敷かれている。

出土遺物（第413図）

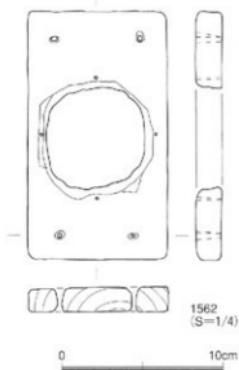
1567は陶器箱庭道具の橋である。型押成形で製作され上面には褐釉がかけられている。裏面には墨書きで「ら」と書き込まれている。1568は土製の泥面子の芥子面である。型作りにより宝が描かれている。1569は土製の泥面子の面打である。型作りにより浪鉢が描かれている。

柱穴 237 (SP1237)

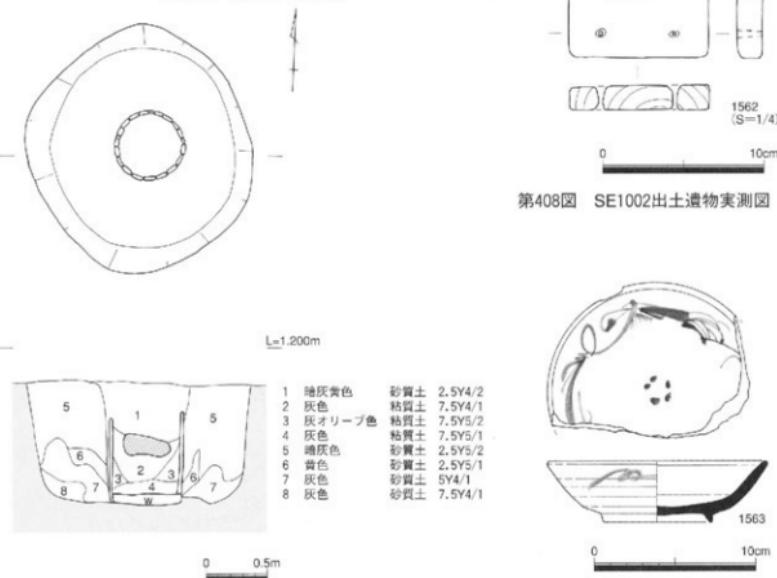
2区のA・B-10グリッドのSK1027内から検出された直径0.8m、深さ0.4mの大きさの不整円形の遺構である。遺構の埋土中には微量の炭化物や焼土粒とともに礫が多く含まれていることから、建物の基礎に伴う地業跡とも考えられる。



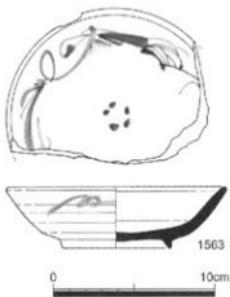
第407図 SE1002実測図



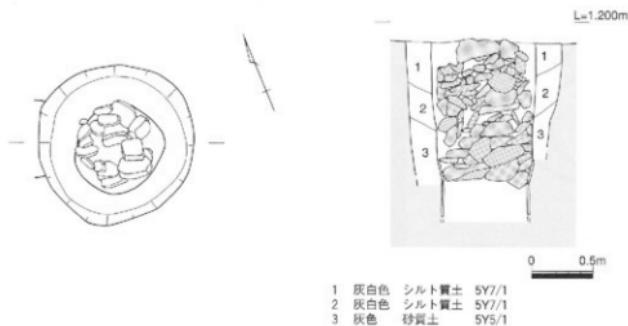
第408図 SE1002出土遺物実測図



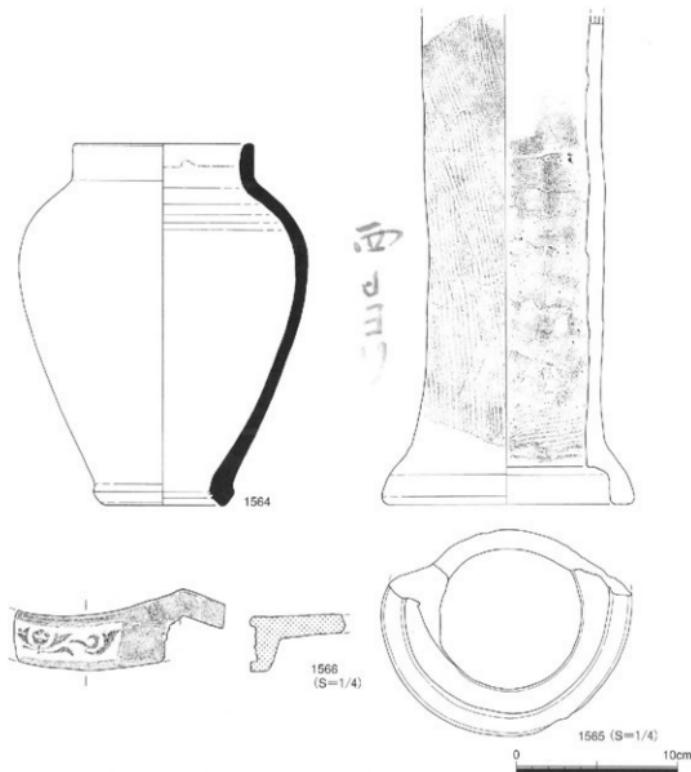
第409図 SE1004実測図



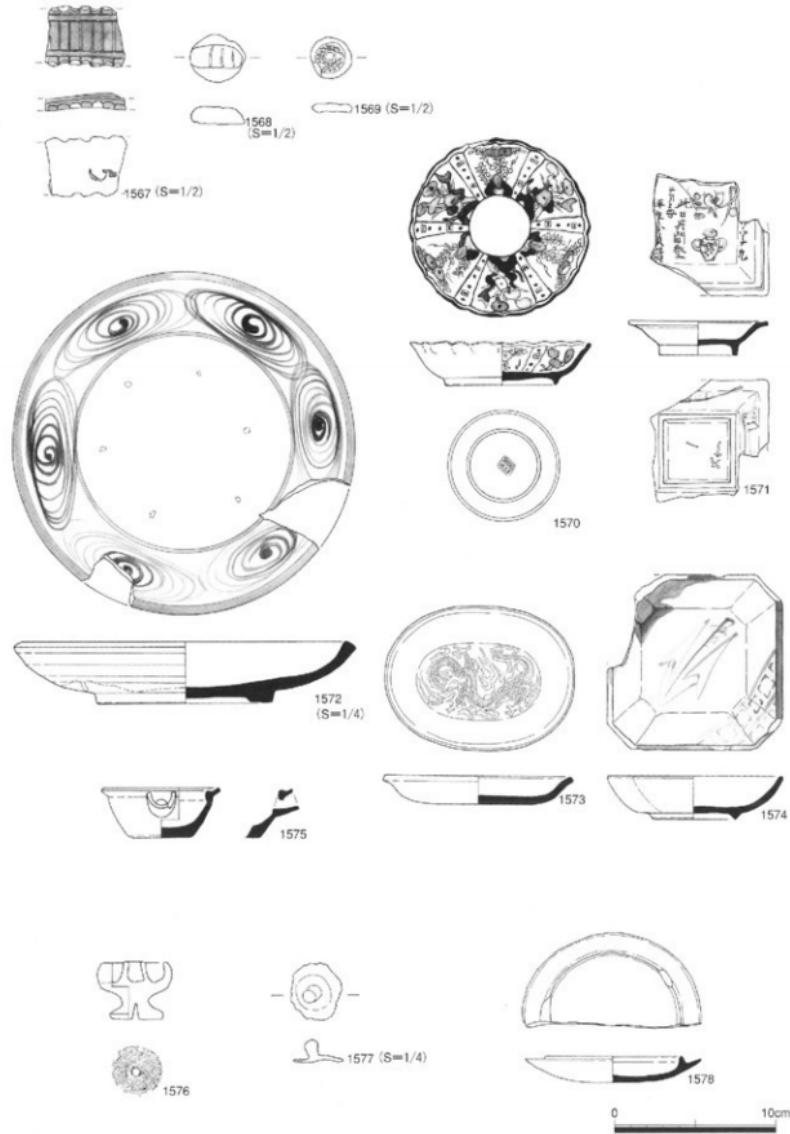
第410図 SE1004出土遺物実測図



第411図 SE1005実測図



第412図 SE1005出土遺物実測図



第413図 SP出土遺物実測図(1)

出土遺物（第413図）

1570は肥前系の磁器皿である。（樋口窯18C 中葉～末）型打併用の輪花形で口錫装飾が施されている。内面には芙蓉手が染付により描かれ、高台外底面には二重方形枠内に銘が書き込まれている。（SK1027に同一遺物あり）1571は型打成形で製作された磁器製の角皿である。底部は貼付高台で内外面には上絵付が施されている。高台外底面には焼難印が「一」「スナ」と書き込まれている。1572は瀬戸美濃系の陶器製の馬口大皿である。内面には鉄釉で馬目が描かれ、見込部には日痕が6点認められる。高台部分は露胎のまま残されている。1573は在地の張平の小判形の陶器皿である。型打成形で製作され内面見込分には雲龍が陰刻されている。全面に黄釉がかけられ底部にはハリ支え痕が3カ所認められる。1574は型打成形で製作された瀬戸美濃系の変形八角形の陶器皿である。内面には草花・幾何文が鉛錫で描かれ、内外面には緑釉・黄釉がかけられている。1575は陶器製のミニチュアの行平鍋である。内外面には柿釉がかけられ、回転糸切り痕が残された底部には煤が付着している。1576は土師質の秉攤である。台付たんころ型で底部には同転糸切り痕が残されている。内面全体と口縁部外面には柿釉が施されている。1577は銅製の摘みである。中央には球形の摘みが付く。

柱穴 252 (SP1252)

2区のC-14グリッドから検出された直径約0.6m、深さ0.1mの大きさの不整円形の遺構である。遺構の埋土中には微量の炭化物と焼土粒とともに礫や瓦片が多く含まれている。建物の基礎に伴う地業跡の可能性がある。

出土遺物（第413図）

1578は備前の陶器製灯明受け皿である。底部は同心円削りされ、油口半月状を呈し、口縁部には灯心油痕が認められる。

柱穴 258 (SP1258)

2区のC-15グリッドから検出された直径約0.5m、深さ0.3mの大きさの指円形の遺構である。遺構内の埋土中には焼土粒や炭化物、礫を少量ずつ含んでいる。

出土遺物（第414図）

1579は皿を再利用したものと思われる陶器製の加工円盤である。上下両面に煤が付着している。

柱穴 292 (SP1292)

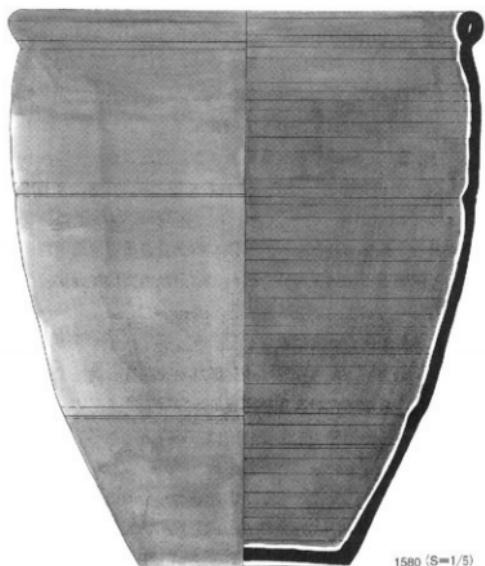
2区のD-15グリッドから検出された直径約0.3m、深さ0.2mの円形の遺構である。遺構内の埋土中には焼土粒や炭化物を少量ずつ含んだしまりの強い砂質土が堆積している。

出土遺物（第414図）

1580は在地の人谷焼の陶器製大甕である。口縁端部は玉縁状に仕上げられ体部には接合痕が2カ所認められる。底部外周以外は内外面とも鉄釉がかけられているが、口縁は釉剥ぎされ目痕が認められる。また底部には窯道具痕が4カ所に認められる。

柱穴 307 (SP1307)

2区のD-14グリッドでSK1052を掘り込んだ状態で検出された直径約0.4m、深さ0.3mの大きさの



1580 (S=1/5)



1579



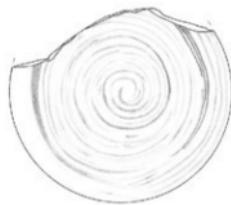
1581



1582



1583 (S=1/2)



1585



1584



1586



第414図 SP 出土遺物実測図 (2)

円形の遺構である。遺構内には微量の焼土粒や炭化物とともに、礫を多量に含む縛まりのある砂質土が堆積している。地業を伴う柱穴の可能性がある。

出土遺物（第414図）

1581は肥前波佐見産の磁器皿である。丸形で内面には二重斜格子が染付で描かれている。内面見込は蛇ノ目釉剥ぎされ重ね焼きの痕跡が認められ、高台畳付部分には砂が付着している。

柱穴 308 (SP1308)

2区のD-14・15グリッドからSK1052を掘り込んだ状態で検出された直径約0.6mの大きさの不整橢円形の遺構である。深さ約0.3mの遺構の埋土中には微量の焼土粒や炭化物とともに、礫を多く含む。

出土遺物（第414図）

1582は在地の大谷焼の陶器製灯明皿である。底部の切り離しには回転糸切り技法が使用され、内面全体と口縁部外面には鉄釉がかけられている。1583は塔の屋根部をかたどった上師質の須庭道具と考えられる。色絵が剥落している。

柱穴 343 (SP1343)

3区のJ-15グリッドから検出された直径約0.4m、深さ0.2mの大きさの円形の遺構である。遺構内には微量の焼土粒や炭化物、貝殻片を含む粘性の強いシルト質土が堆積している。

出土遺物（第414図）

1584は瀬戸美濃系の磁器製水滴である。外面には藤花と鳥が染付で描かれている。

柱穴 358 (SP1358)

3区のM-11グリッドから検出された直径約0.3m、深さ0.2mの大きさの円形の遺構である。遺構内には少量の炭化物や焼土粒とともに陶磁器片を含む縛まりのある砂質土が堆積している。

出土遺物（第414図）

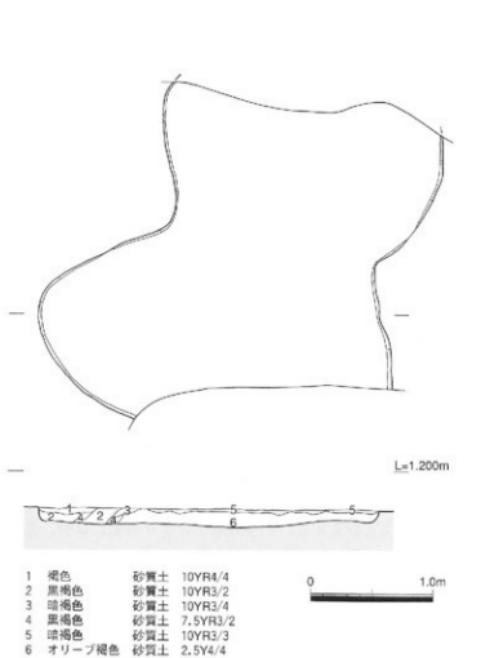
1585は瀬戸美濃系の陶器皿である。内外面に褐釉がかけられているが高台畠付部分だけは露胎のままである。

柱穴 447 (SP1447)

1区のL-3グリッドから検出された不整円形の遺構である。遺構の一部を他の遺構に切られているが、残された部分から推定すると直径約0.6m前後の大きさを持っていたと考えられる。深さ約0.3mの遺構の埋土には多量の焼土粒が含まれている。

出土遺物（第414図）

1586は銅製の煙管雁首である。

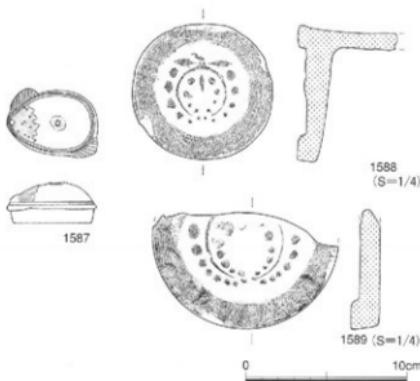


第415図 SX1003実測図

不明遺構

不明遺構 3 (SX1003) (第415図)

遺構の南北両端を他の遺構に切られた状態で検出されたため正確な形や大きさは不明だが、3区のI・J・3グリッドにまたがって検出された不整形な遺構である。残された遺構は東西約2.8m、南北2.4m程の大きさがあるが、深さは最も深いところでも0.2m足らずしかない。遺構の南西には部分的ではあるが炭化物と焼土が厚さ5cmのブロック状に堆積している所があった。また、これ以外にも埋土中からは瓦片や大型の罐が多く出土している。



第416図 SX1003出土遺物実測図

出土遺物（第416図）

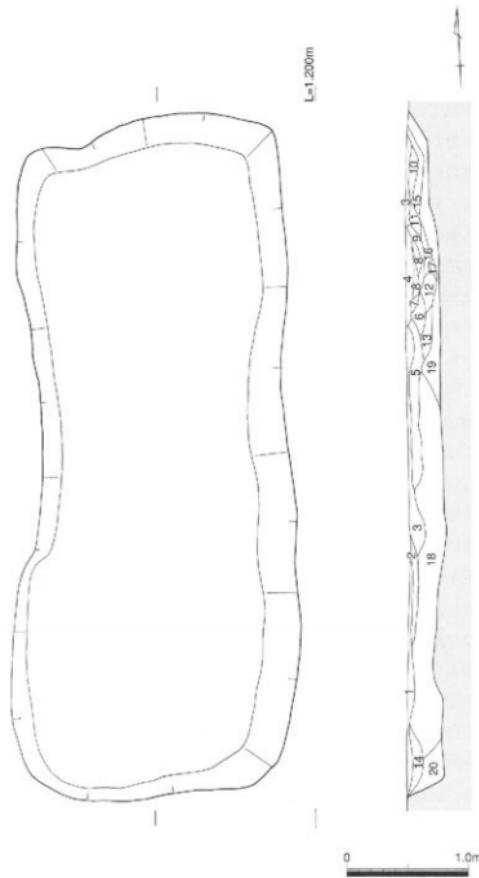
1587は肥前系の磁器製水滴である。型作貼付成形で、外面には染付により魚が描かれている。穿孔が上面2カ所にある。1588・1589は軒丸瓦である。丸ノ中藤ノ丸の紋が配されている。

不明造構 4 (SX1004) (第417図)

1区のJ・K-3グリッドにまたがって検出された長軸を南北方向にとる長さ約5.6m、幅2.0mの大きさの隅丸長方形の造構である。深さ約0.3mの造構の埋土の中には、陶磁器や瓦の破片の他に漆喰や木片などが多く含まれていることから施業土の可能性もある。

出土遺物（第418~424図）

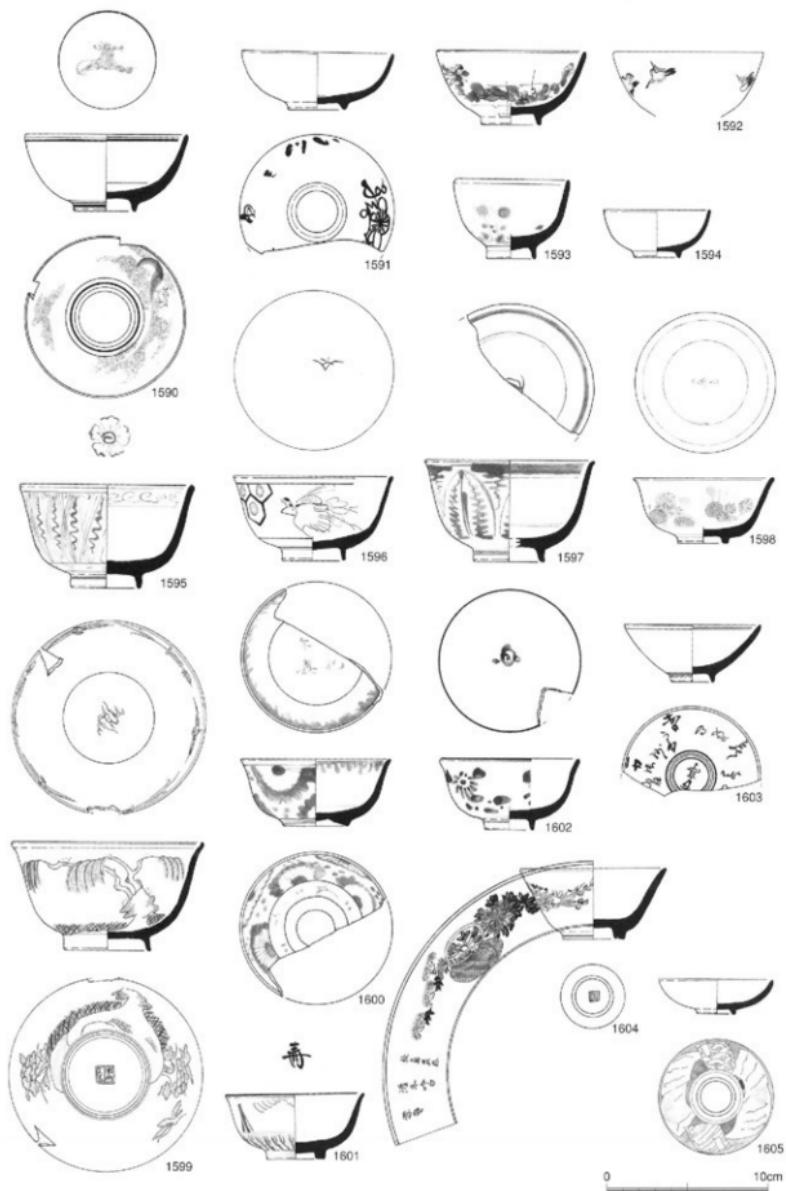
1590は染付の磁器碗である。外面には樹木・鹿・岩、内面には見込に樹木が描かれている。幕末のものである。1591は肥前系磁器の碗である。外面には染付により梅と文字の文が見える。1592は肥前系磁器の碗である。染付により外面には草花・垣根・雀が描かれている。1593は肥前系磁器の猪口である。染付により外面には花と蝙蝠が描かれている。1594は肥前系磁器で白磁の小杯である。口径は64mmを測る。1595は肥前系磁器の染付碗である。外面には斜め並草葉文、内面には渦と見込に五弁花文が描かれている。1596は肥前系磁器碗である。口縁には口鋪装飾が施され、絵付により外面には鶴と亀甲が、見込には岩碎波文が描かれている。1597~1599は肥前系磁器の端反碗である。1597は染付により外面には並草葉文、内面には團線と見込に文が見える。1598は染付により外面には松、見込には波濤文が描かれている。1599は外面には素描による花木文と高台内には変形字の裏銘が、内面と見込に雷が染付により描かれている。1600は肥前系磁器の碗で高台は蛇ノ目凹型高台である。染付により外面には扇、内面に波の連続文、見込みには「□化年製」の銘がある。1601は肥前系磁器の染付碗である。外面は風景、見込に「寿」の銘が描かれ、口鋪装飾が施されている。1602は肥前系磁器の染付碗である。口縁には口鋪装飾がされ外面には菊、見込みには宝が描かれている。1603は肥前系磁器で染付碗である。外面には文字と高台櫛齒、高台内には「万亭」の裏銘がある。1604は肥前系磁器の碗である。蛇ノ目凹型高台で染付により外面には花籠と漢詩が、高台内には二重方形枠内に変形字が描かれている。1605は肥前系磁器の小杯である。染付と色絵により外面には書物が描かれている。1606は肥前系磁器の筒形碗である。染付により外面には牡丹・唐草・櫛齒と高台内裏銘には篆書体による変形字が、内面には雷が描かれている。19Cのものである。1607は磁器の染付碗である。型打成形で外面には桜花に脇梅笛文と高台内に「東光山旭庵」の裏銘、内面には桜花が描かれている。1608は瀬戸美濃系磁器の猪口である。染付により外面には唐草と変形文字が、内面には花蔓草が描かれ、高台内には「太明年製」の裏銘が描かれている。1609は瀬戸美濃系磁器の猪口である。染付により外面には迷弧と変形字、内面には雷文が描かれている。1610は肥前系磁器の碗である。染付により外面には團線、内面には見込に五弁花文が描かれている。1611は肥前系磁器の蓋である。外面には素描による花木文と高台内には変形字の裏銘が、内面には鳥、見込に雷が染付により描かれている。1612は肥前系磁器の蓋である。染付により外面には櫛齒と並草葉文、内面には渦、見込には花文が描かれている。1613は肥前系磁器で染付の蓋である。外面には素描による花唐草と高台内には変形字、内面には楷文と見込に松竹梅が描かれている。1614は肥前系磁器の蓋である。外面には染付により扇と条線が、高台内には方形枠内に変形字、見込みには「寿」が描かれている。1615は染付けの陶器蓋である。外面には樹木・鹿・岩、見込には樹木が描かれている。幕末のものである。1616は肥前系磁器の蓋である。染付により外面には桜木・鳥・岩が、内面には雷文が描かれている。1617



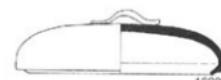
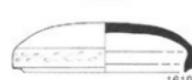
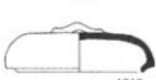
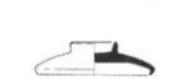
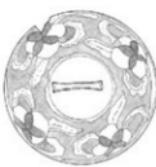
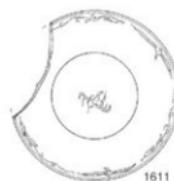
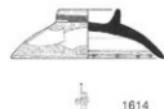
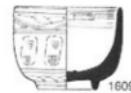
1 オリーブ褐色	砂質土	2.5Y3/3	9 緑灰黃色	砂質土	2.5Y4/2
2 オリーブ褐色	砂質土	2.5Y4/3	10 緑灰黃色	砂質土	2.5Y4/2
3 灰オリーブ色	砂質土	5Y4/2	11 黄褐色	砂質土	7.5YR4/4
4 紅褐色	砂質土	7.5YR4/6	12 黒褐色	砂質土	2.5Y3/2
5 黒褐色	砂質土	2.5Y3/2	13 黄褐色	砂質土	7.5YR4/6
6 にぶい青褐色	砂質土	10YR4/3	14 緑灰黃色	砂質土	2.5Y5/2
7 灰オリーブ色	砂質土	5Y5/2	15 緑褐色	砂質土	10YR3/3
8 黒褐色	砂質土	2.5Y3/1	16 黑褐色	砂質土	2.5Y3/2
				17 黃褐色	砂質土 10YR5/6
				18 鳥灰黃色	砂質土 2.5Y4/2
				19 黒褐色	砂質土 2.5Y3/2
				20 オリーブ褐色	砂質土 2.5Y4/3

第417図 SX1004実測図

は肥前系白磁の蓋である。1618は肥前系磁器で染付の蓋である。外面に十字花が描かれ、摘みが貼付けられている。1619は肥前系磁器の蓋である。外面には素描で花と唐草が染付されている。1620は肥前系磁器の蓋付碗蓋である。把手を貼付け受付部は釉剥ぎ後、白アルミナ土が塗布されている。外面には染付と五彩の色絵により草花・丸・梅・斜格子が描かれている。1622の蓋部と思われる。1621は肥前系磁器の染付鉢である。型打成形され蛇ノ目凹型高台で、外面には墨彈きにより雀が10羽、内面には唐草十字文に蝶と窓絵が描かれている。1622は肥前系磁器の蓋付碗である。口縁部は釉剥ぎされ、見込には釉剥ぎ後白アルミナ土が塗布されている。外面には染付と五彩の色絵により草花・丸・斜格子が描かれている。1620の碗部と思われる。1623は肥前系磁器の鉢である。蛇ノ目凹型高台で染付により外面には唐草が、内面には岩と松、見込には花弁、高台内には渦桟の裏銘が描かれている。1624は肥前系磁器の鉢である。染付により外面上には唐草と高台内に渦桟の銘、見込に五弁花文が見える。1625は肥前系磁器で筒形鉢である。蛇ノ目凹型高台で凹面に鉄漿が塗られ、外面には四方襷と花唐草・渦が、内面には四方襷が描かれている。1626は肥前系磁器の八角鉢である。型打成形で口縁には口銷装飾が施され、外面には人物・遠山・東屋が内面には亀甲に波が描かれている。1627は肥前系磁器の鉢である。染付により外面に山と鳥、内面には魚と水草が描かれている。1628は肥前系磁器で輪花形の皿である。型打成形で蛇ノ目凹型高台である。内面には染付により岩山と船が描かれている。1629は肥前系磁器の小皿である。型打成形で内面には線刻と染付による蝶と草花が描かれている。1630は瀬戸美濃系磁器の染付皿である。型打成形で見込には陽刻による富士・波・龍・雲が描かれている。1631は瀬戸美濃系磁器の染付皿である。型打成形で見込みには陽刻による篆書が描かれている。1632は瀬戸美濃系磁器の染付皿である。型打成形で見込みには陽刻により獅子と牡丹が描かれている。1633は肥前系磁器の染付皿である。外面には源氏香に宝、内面には氷裂に椿の文が見える。1634は四国系の磁器手鉢である。型作成形で把手・高台貼付で、内面と把手には鳳凰や雲・草花が描かれている。1635は陶器皿である。陶胎染付で内面には草花が描かれている。1636・1637は在地系斑平の陶器皿である。型打成形で見込みには雲龍の陰刻文がみられ、全面に黄釉が施されている。底部にハリ支え痕が3点みられる。1638は陶器の角鉢である。型打成形で陶胎染付により高台を除き白釉を塗り外面に丸文、内面には樹木に斜格子が描かれている。高台内には「清」の刻印が押印され、見込にはハリ支え痕が4点見える。1639は陶器香炉の蓋である。胎土は赤褐色の赤土に白泥を練込んでいる。蓋底に釘書と墨書きが見られる。1640は堺明石系の陶器擂鉢である。擂目単位9条がみられる。1641は備前の擂鉢である。口径249mmを測り、胎土は赤褐色である。擂目単位は8条である。1642は堺明石系の陶器擂鉢である。擂目単位8条がみられる。1643は陶器油壺である。鉄釉が施釉された在地系大谷焼のものである。1644は瀬戸美濃系陶器の二耳壺である。灰釉が施釉され高台貼付痕が見える。1645は陶器の壺である。胎土は暗赤褐色で鉄釉が施釉されている。在地系大谷焼である。1646は京信楽系陶器の急須である。外面底部には煤が付着している。1647は京信楽系陶器の土瓶である。鉄釉と緑釉で装飾されている。1648は京信楽系陶器で土瓶の蓋である。鉄釉と緑釉で装飾されている。1649は瀬戸美濃系陶器で水注である。上蓋部に菊花文が型押され注口と上蓋が貼付けられている。1650は瀬戸美濃系陶器で合子の身である。外面底部を除き灰釉が施釉され、貫入が見られる。1652は軽質陶器の餅皿である。内面には鉄絵が描かれ、底部には足貼付痕が2カ所と、墨書きが認められる。1653は土師質の灯明皿である。底部には回転糸切り痕があり、口縁部には煤が付着している。1654は土師質の皿である。口径30mmを測る。底部には回転糸切り痕が見える。1655は土師質の関西系の燈焰である。1656は瓦質の焜

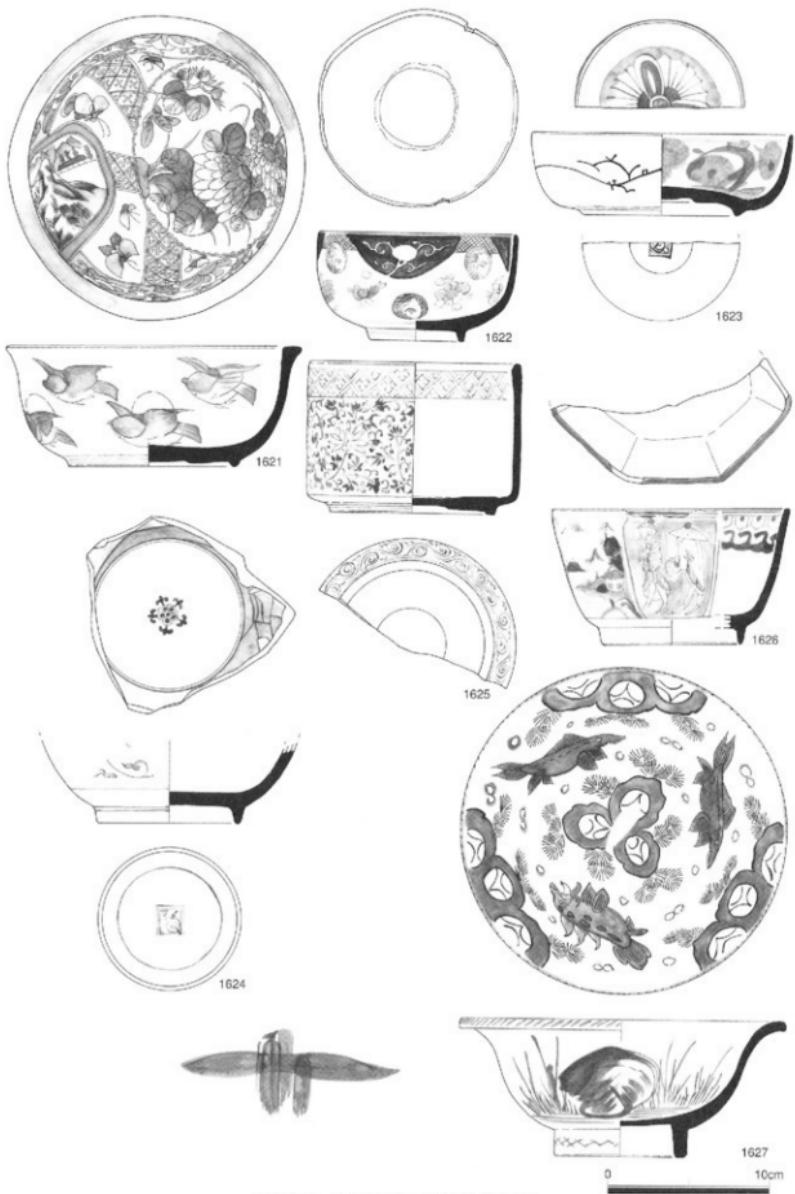


第418図 SX1004出土遺物実測図(1)

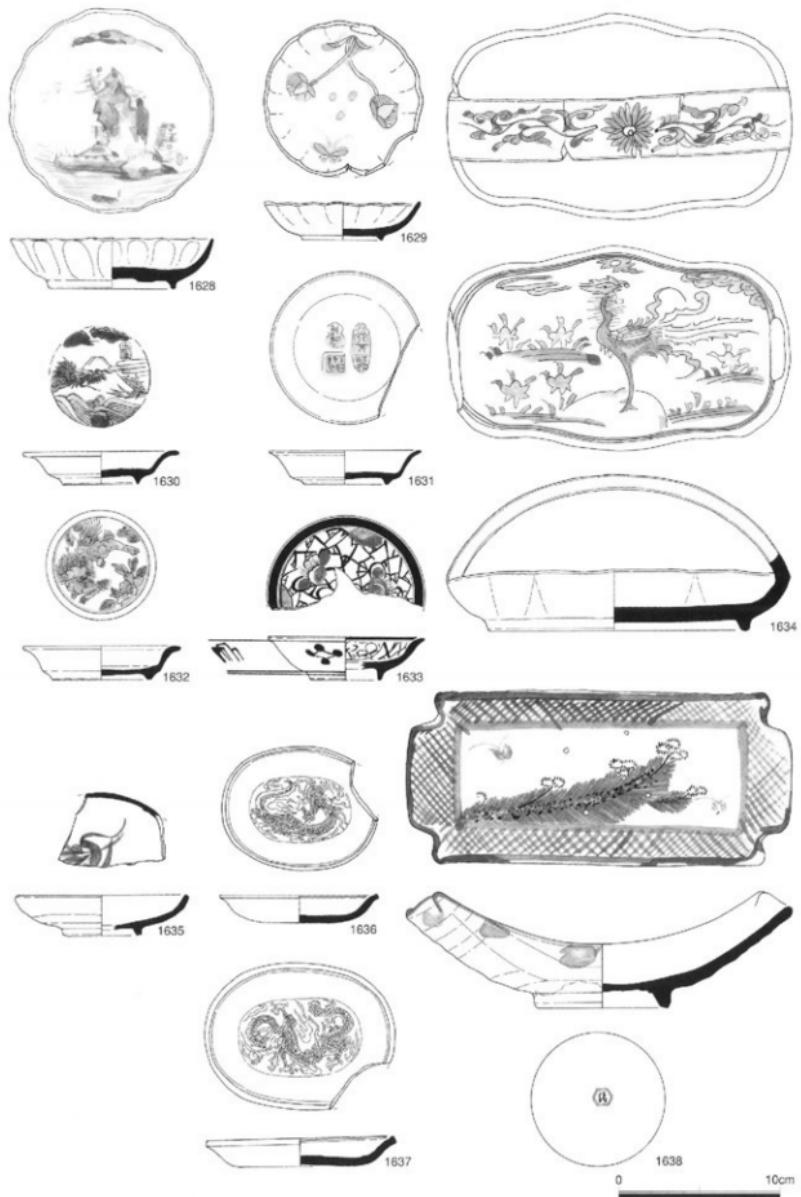


0 10cm

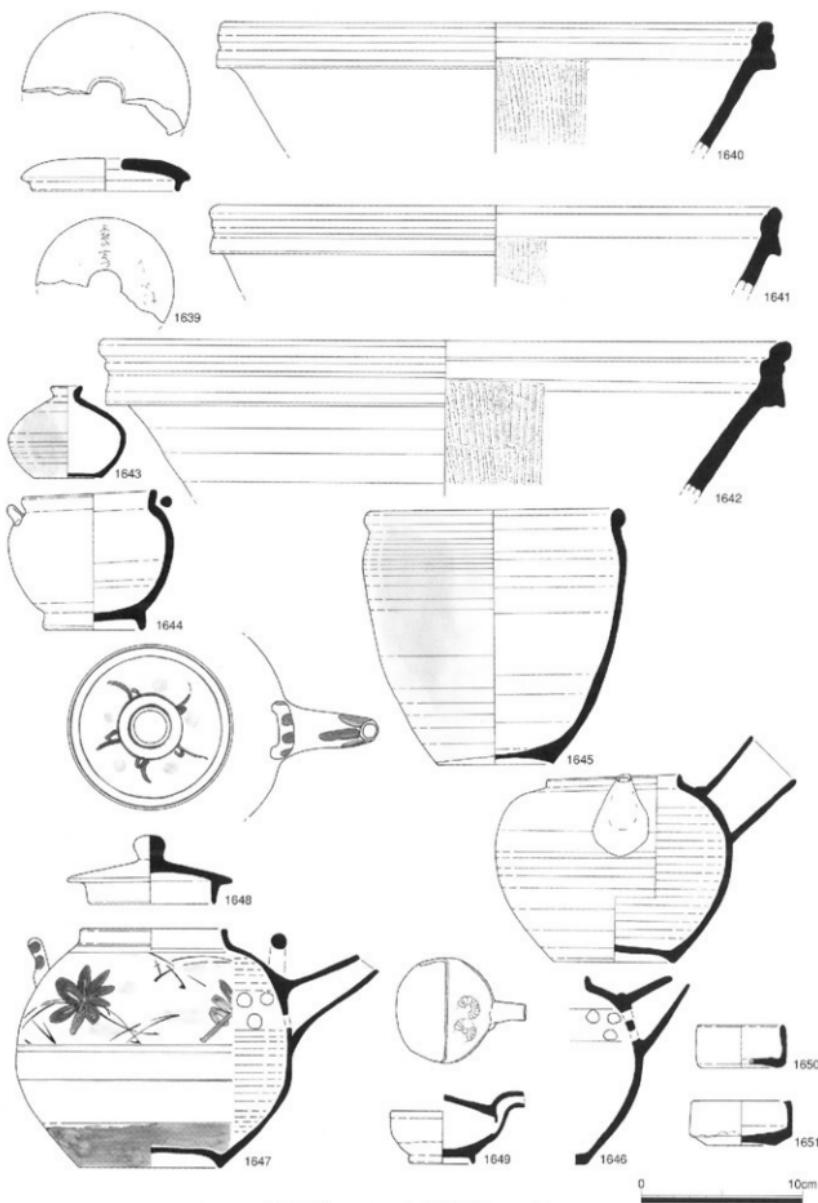
第419図 SX1004出土遺物実測図(2)



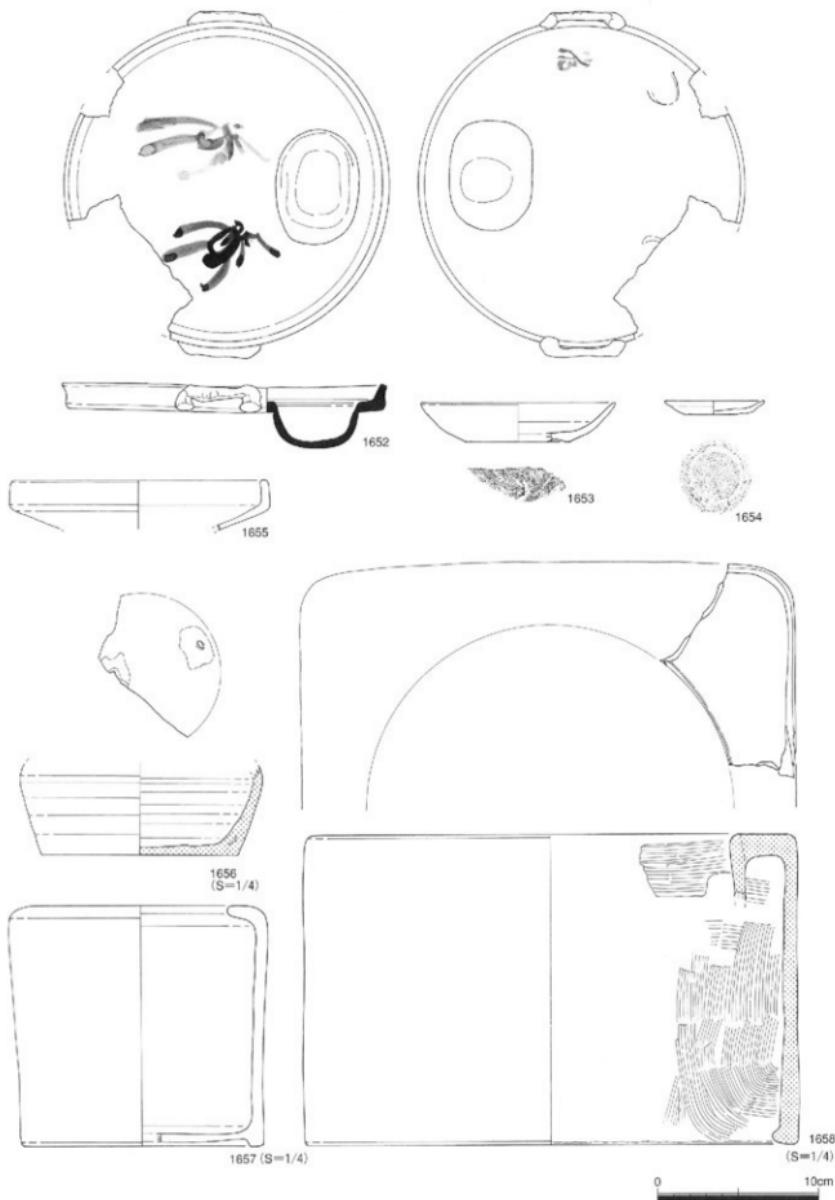
第420図 SX1004出土遺物実測図 (3)



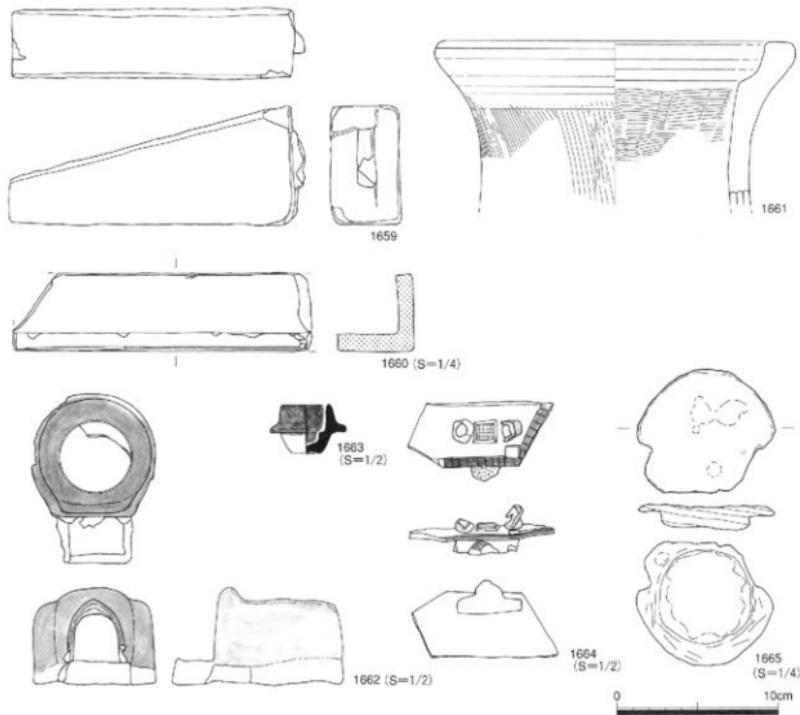
第421図 SX1004出土遺物実測図(4)



第422図 SX1004出土遺物実測図(5)



第423図 SX1004出土遺物実測図(6)



第424図 SX1004出土遺物実測図(7)

炉である。底部には穿孔が見られる。1657は土師質の火鉢である。黒褐の胎土に外面はミガキが施されている。1658は瓦質の甕である。1659は瓦質の甕付属品である。1660は瓦質の建築部材である。1661は土師質の土管である。胎土はにぶい橙をしている。1662は土師質土器でミニュチュアの甕である。型押成形で貼付けられている。外面は底部を除き灰釉が施釉されている。1663は陶器でミニュチュアの羽釜である。型押成形で外面下半を除き綠釉が施釉されている。1664は陶器箱庭道具の部品である。1665は木製品の蓋である。

不明遺構 6 (SX1006) (第425図)

1区のM・N-6グリッドにまたがって検出された直径約1.3mの不整形の遺構である。深さ約0.5mの遺構内には長さ約1mの板を横に渡して方形に組み、内側に木杭を2本ずつ打ち込んで板を押さえている。遺構内には炭化物を多く含む締まりの悪い砂質土が堆積している。

出土遺物（第426図）

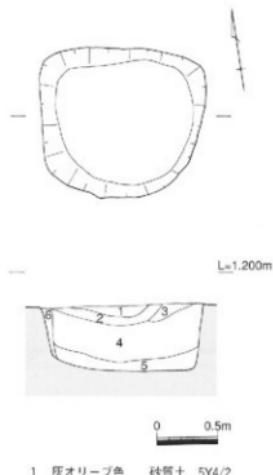
1666は瀬戸美濃系の磁器製端反碗である。高台部分は外反し、外面には花蔓草、内面には浪線に丸が染付により描かれている。また、内面見込部の二重圓線内には「壽」が書き込まれている。1667は肥前系の磁器製香炉である。半筒形のクリ高台で三足貼付になっている。外面と口縁部内面には瑠璃釉が施されている。1668は京信楽系の陶器製鉢形容器である。半筒香炉形で同心円削りされた底部を除き灰釉がかけられ、露胎のままの底部には墨書が認められる。1669は型作り、貼付による瓦質の羽釜である。外面にはタール状の煤が付着している。1670は土製の箱庭道具の灯籠である。型作り貼付成形で製作され施釉の痕があるが、剥落している。

不明造構 8 (SX1008) (第427図)

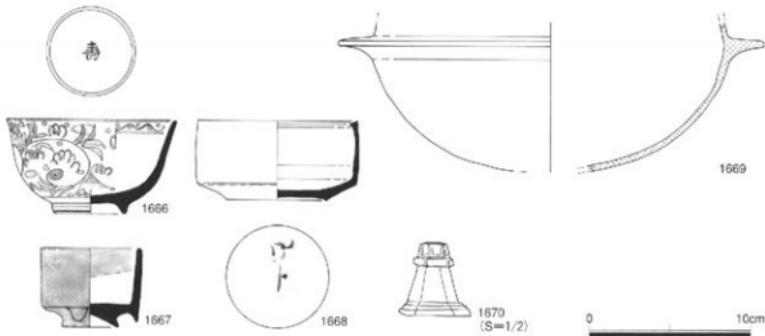
2区のB-11・12グリッドにまたがって検出された長廻を東西方向にとる長さ約6.9m、幅4.5mの長椭円形の造構である。断面が逆台形状に掘り込まれた深さ約0.4mの造構内には礫や瓦片を多く含んだ暗灰黄色土が堆積している。

出土遺物（第428～430図）

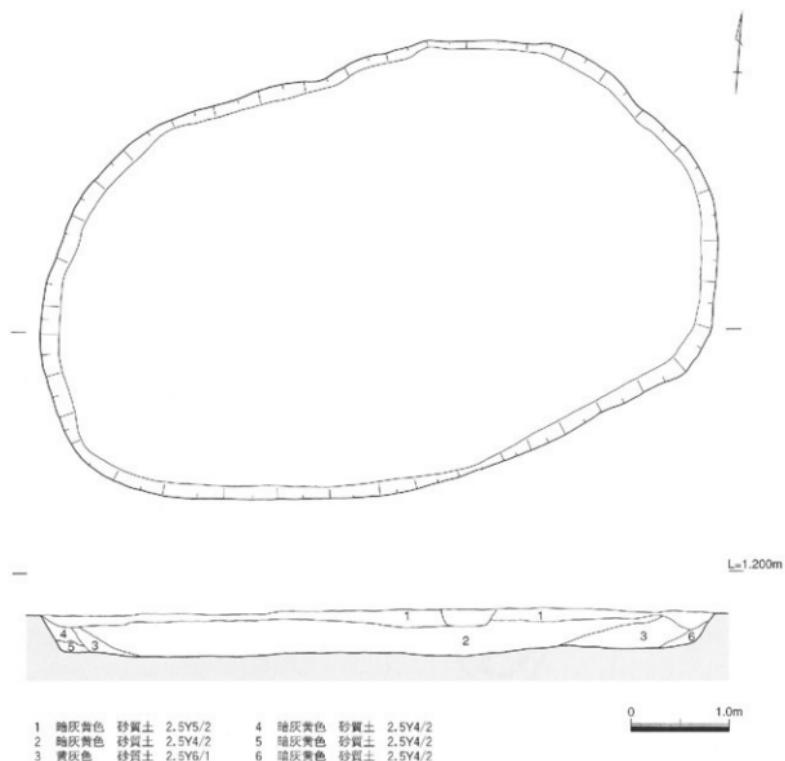
1671は肥前系の磁器大碗である。体部は外面に羽根、内面の口縁部に四方攢文が描かれている。またこれ以外にも内面見込部の二重圓線内に環状松竹梅が描かれ、高台外底面の二重方形枠内には「青」の銘が書き込まれている。1672は肥前波佐見の外青磁碗である。丸形で口縁部内面に四方攢文、内面見込部の二重圓線内には五弁花文が描かれている。また、高台外底面の二重圓線内には「満福」の銘が書き



第425図 SX1006実測図

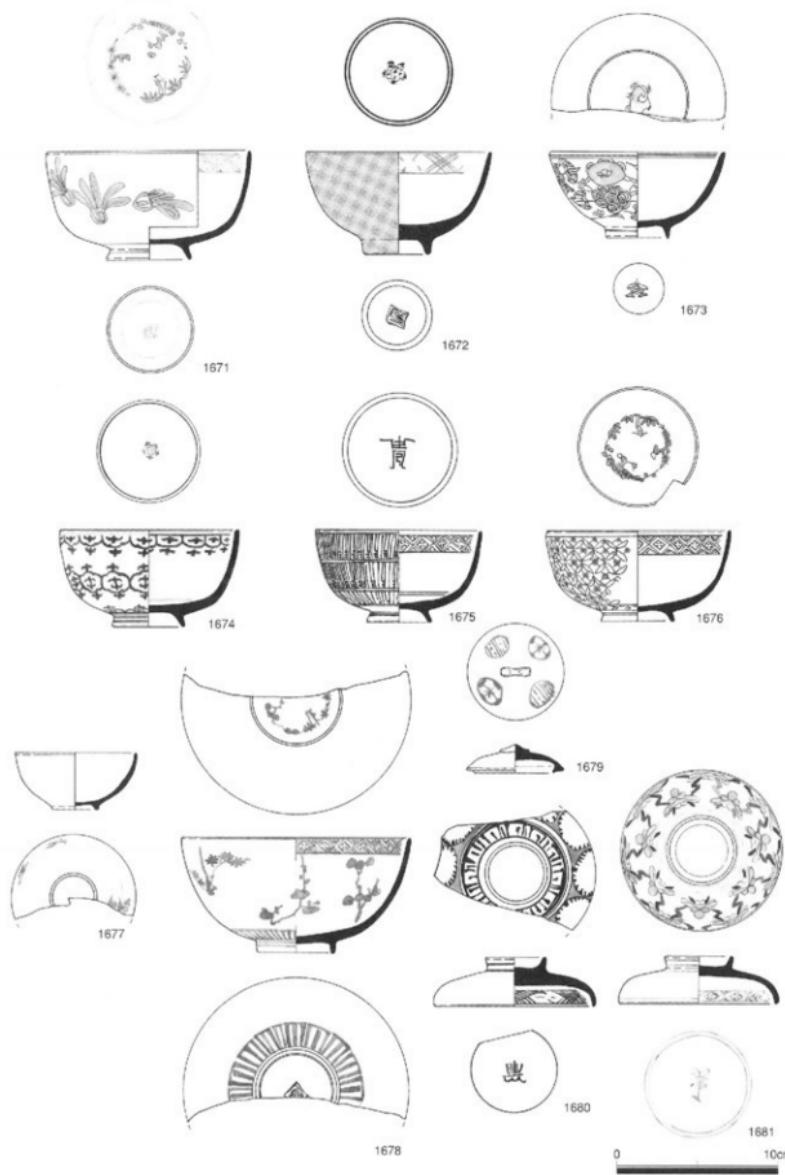


第426図 SX1006出土遺物実測図

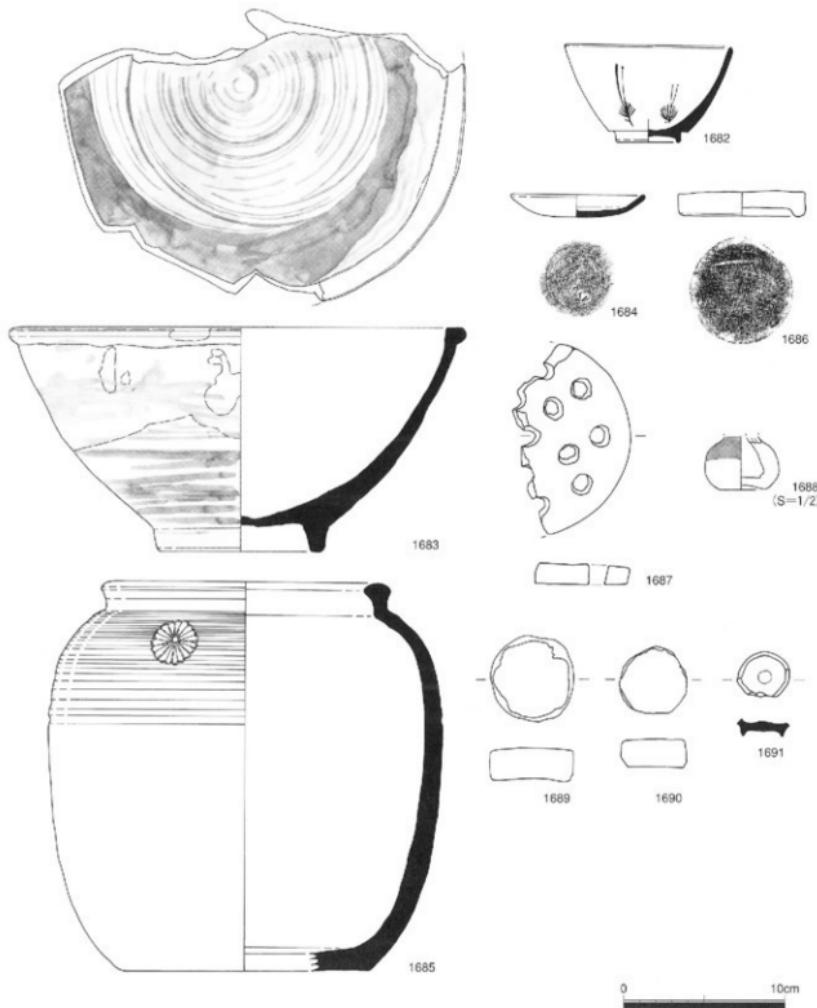


第427図 SX1008実測図

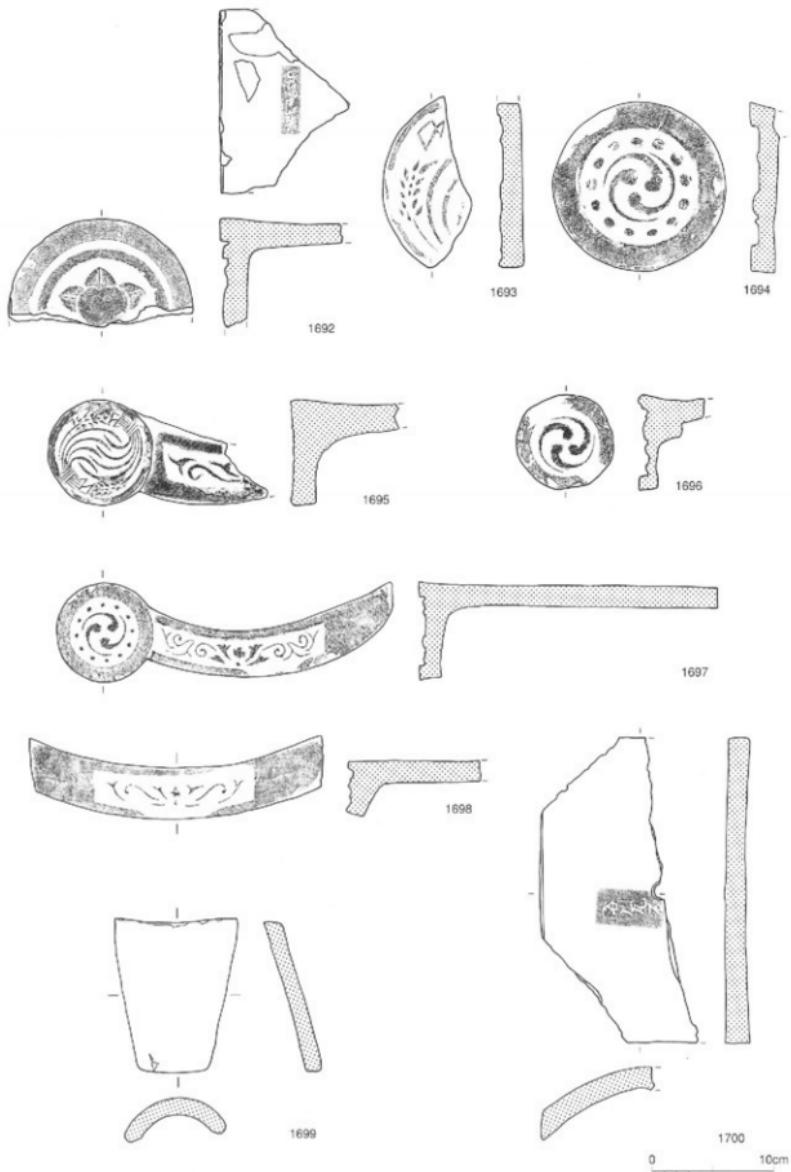
込まれている。1673は肥前系の丸形磁器碗である。体部外面には花唐草に圓線、内面見込部の二重圓線内には宝文、高台内には虫文が描かれている。1674は肥前系の染付磁器碗である。内外面には輪宝雲が、見込二重圓線内には五弁花が描かれている。1675は外反する高台を持つ肥前系の磁器碗である。体部外面には梵字文が、口縁部内面には四方櫛文が描かれ、内面見込部の二重圓線内には「壽」の銘が書き込まれている。1676は肥前系の磁器染付碗である。浅半球形で高台は外反している。体部外面には七宝繫ぎ文と連介が、口縁部内面には四方櫛文が、内面見込部の二重圓線内には環状松竹梅が描かれている。1677は肥前系の磁器小碗である。浅半球形で外面には染付により草花が描かれている。1678は肥前系の磁器鉢である。外面は松竹梅、内面は口縁部に四方櫛文が描かれている。またそのほかにも内面見込部に二重圓線がひかれ内側に環状松竹梅が描かれている。高台は源氏番と、高台外底面の二重圓線内には「滿福」の銘が書き込まれている。1679は肥前系の磁器製蓋物の蓋である。摘み貼付で外面には染付に



第428図 SX1008出土遺物実測図(1)



第429図 SX1008出土遺物実測図(2)



第430図 SX1008出土遺物実測図(3)

より丸文が4つ描かれている。1680は肥前系の磁器製碗蓋である。腰張形で体部外側には雪輪文、口縁部内側には四方擗文、内面見込部の圓線内には「壽」の文字絵が描かれている。1681は肥前系の磁器蓋である。体部外側には松林、口縁部内側には四方擗文が描かれ、内面見込部の二重圓線内には「壽」の鉢が書き込まれている。1682は京信楽系の陶器製小杉碗である。体部外側には若松が鉄絵により描かれ、高台部分は露胎である。1683は肥前唐津の陶器鉢である。内外側には灰釉と白泥により刷毛目文様が描かれている。1684は備前の陶器製灯明皿である。内面は朱泥による繪土が施され、底部は回転糸切後同心円削りが行われている。口縁部には灯心油痕が残されている。1685は関西系の陶器壺である。肩部には菊花が貼付られ繪土(朱泥)が施されている。1686は土師質の焼塙壺の蓋である。内面には布目痕が見える。1687は土師質の七輪の部品で灰落とし(さな)である。型押による粘土板成形で製作され、両面には離れ砂が付着している。1688は土師質のミニチュア壺である。外側の体部上半には緑釉がかけられている。1689・1690は瓦賞の加工円板である。1691は磁器の加工円板である。1692は軒丸瓦である。子持チ輪ノ中橋の紋が配され、上部に「谷川嘉左衛門」と印刻されている。1693は軒丸瓦である。鰐丸紋が配された蜂須賀家替紋瓦である。1694は丸ノ中連珠三巴の紋が配された軒丸瓦である。1695は軒棟瓦である。鰐丸紋と均整唐草が配された蜂須賀家替紋瓦である。1696は丸ノ中三巴が配された軒棟瓦である。1697は軒棟瓦である。丸ノ中連珠三巴紋と均整唐草が配されている。1698は軒平瓦である。均整唐草が配される。1699は練込瓦である。1700は棟瓦である。「谷川瓦屋」と刻印がある。

不明遺構 9 (SX1009) (第431図)

2区のC-12グリッドから検出された不整形な形の遺構である。遺構の一部を他の遺構に切られていて正確な大きさは不明だが、最も長いところでは約3.5m程の長さがある。遺構の深さは0.1mと浅く、少量の炭化物と焼土粒と共に瓦片や陶器片を含むやや締まりのある砂質土が堆積している。

出土遺物 (第432図)

1701は肥前系の染付磁器碗である。外側には紅葉がコンニャク印判により押されている。1702は肥前系の染付磁器皿である。折縁形で外側には渦、内側には草花が描かれている。高台蓋付部分は釉剥ぎされ砂が付着している。

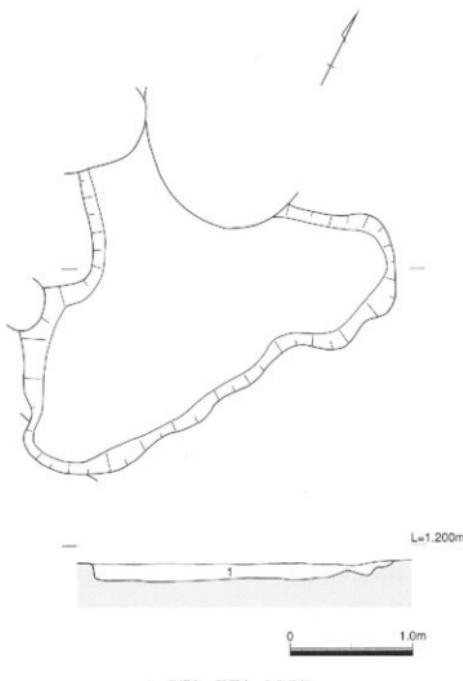
不明遺構 10 (SX1010) (第433図)

2区のB・C-14グリッドにまたがって検出された長軸を南北方向にとる長さ約3.6m、幅2.9mの大きさの方形の遺構である。断面が逆台形状に掘り込まれた深さ0.8mの遺構内からは陶磁器や土師器、木製品が多量に検出されていることから、遺構の埋没する過程では廻棄土坑の性格を持っていたものと考えられるが、遺構の下層には粘土層やシルト質土が堆積していることを考えると本来は溜池のような施設であった可能性が高い。

出土遺物 (第434~445図)

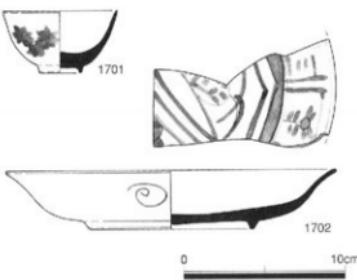
1703は瀬戸美濃系の染付磁器碗で、外側には椿の枝花が大きく描かれ、内面口縁には圓線が2本と見込には圓線内に植物が描かれている。1704は瀬戸美濃系の染付磁器碗で、素描により外側には丸と草花の文が、見込圓線内には菊が描かれ、内外側の口縁部に鋸刃風連続紋が描かれ、腰部には焼織跡が見える。1705は瀬戸美濃系の染付磁器碗で、外側には草花が、内側には口縁部に列点の連続文が、見込には圓線内植物が描かれている。1706は瀬戸美濃系の染付磁器碗で、外側には篆文と窓絵風景(家屋・星岸)

が、内面口縁部には雷と見込二重圏線内に竪文が描かれている。1707は肥前系の染付磁器碗で、外面には斜格子が、内面口縁部には格子の連続文と見込圏線内斜格子が描かれ、高台内に「*」の印が見える。1708は瀬戸美濃系の染付磁器碗で、外面には海辺風景、見込圏線内には波濤文が描かれている。1709は肥前系の染付磁器碗で、外面には文字が縦に三段三列と雲・水が、見込圏線内に「寿」が描かれている。また高台部には焼継痕が、高台内には焼継跡印が「キ」と確認できる。1710は瀬戸美濃系の染付磁器の端反碗で、外面には獅子・並草・葉・梅と口縁部内外共に墨書きによる渦の連続文、見込には二重圏線内に梅が、高台内は方形枠内に変形文字による銘が描かれている。1711は瀬戸美濃系の染付磁器碗で、外面には市松、内面口縁部には渦の連続文、見込には圈線内雲が描かれている。1712は瀬戸美濃系の染付磁器の端反碗で、内外共全面に仙芒祝寿文が描かれている。1713は瀬戸美濃系の染付磁器碗で、外面と見込二重圏線内には河骨が描かれている。1714は肥前系の磁器碗で、色絵による口錆が施され、外面には梅と方形枠内「仮」の銘、見込に岩碎波が描かれている。1715は肥前波佐見の染付磁器碗で、外面には二重半円重ねの網目が描かれている。1716は肥前系の青磁染付磁器碗で、外青磁で内面には口縁部に四方縁と見込圏線内に花が描かれ、高台内には方形枠内に銘が見える。1717は肥

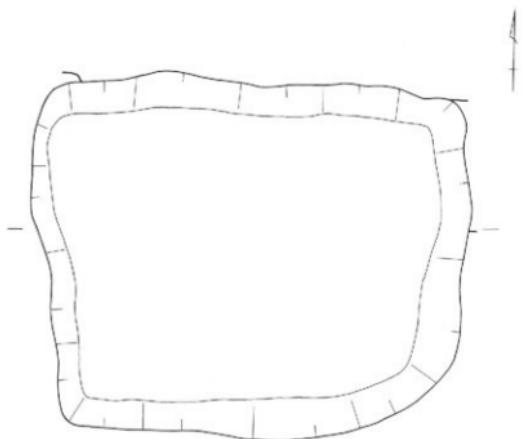


1 黄褐色 砂質土 2.5S5/4

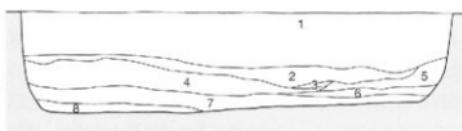
第431図 SX1009実測図



第432図 SX1009出土遺物実測図



L=1.200m



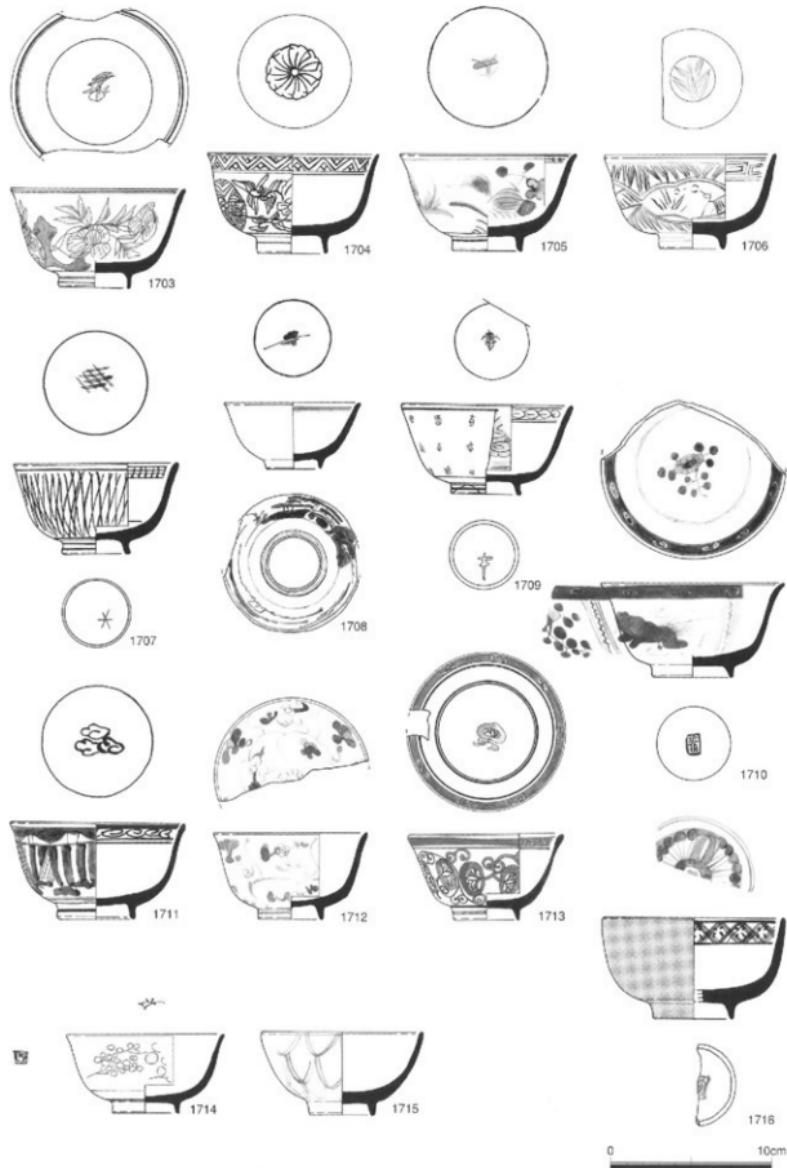
1 黒褐色	砂質土	2.5Y3/2	5 オリーブ黒色	シルト質土	5Y3/2
2 黒褐色	砂質土	10YR3/1	6 オリーブ黒色	砂質土	7.5Y3/1
3 オリーブ褐色	砂質土	2.5Y4/3	7 黒色	砂質土	2.5Y3/1
4 オリーブ黒色	粘質土	5Y3/2	8 オリーブ黒色	砂質土	5Y3/1

0 1.0m

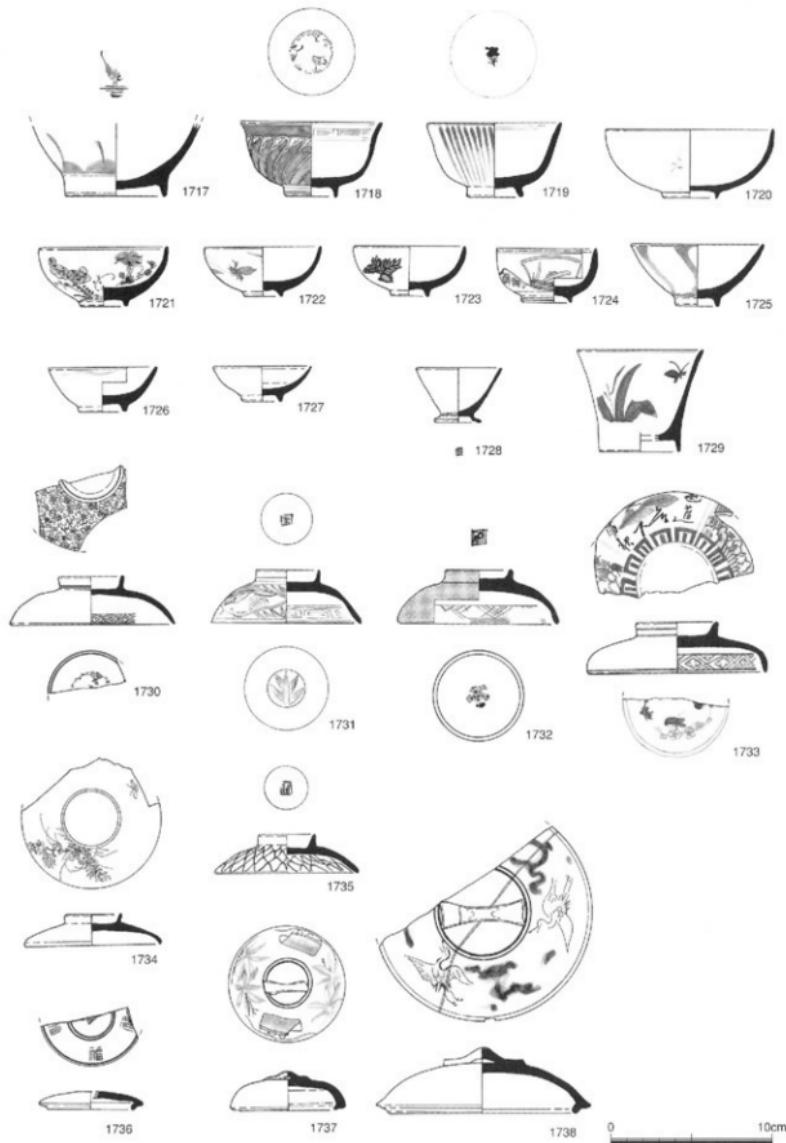
第433図 SX1010実測図

前系の染付磁器による広東碗で、外面には捺花、見込には白鷺が描かれている。1718は瀬戸美濃系の染付磁器の端反碗で、外面には波が内面口縁部には雷の連続文、見込に環状松竹梅が描かれている。1719は瀬戸美濃系の染付磁器碗で、見込圍線内には花が描かれている。1720は瀬戸美濃系の染付磁器碗で、外面には樹木が描かれている。1721は肥前系の染付磁器碗で、外面には草花が描かれている。1722は肥前系の染付磁器の盃で、外面には草文が描かれている。1723は肥前系の染付磁器小碗で、外面にはコンニャク印判による蕉が押されている。1724は瀬戸美濃系の染付磁器小碗で、口縁部無釉で外面には山と窓絵（草花）が描かれている。1725は肥前系の染付磁器碗で、外面には捺花が描かれている。1726は肥前系の染付磁器小杯で、疊付部は無釉である。1727は肥前系の磁器紅皿又は猪口である。1728は肥前系

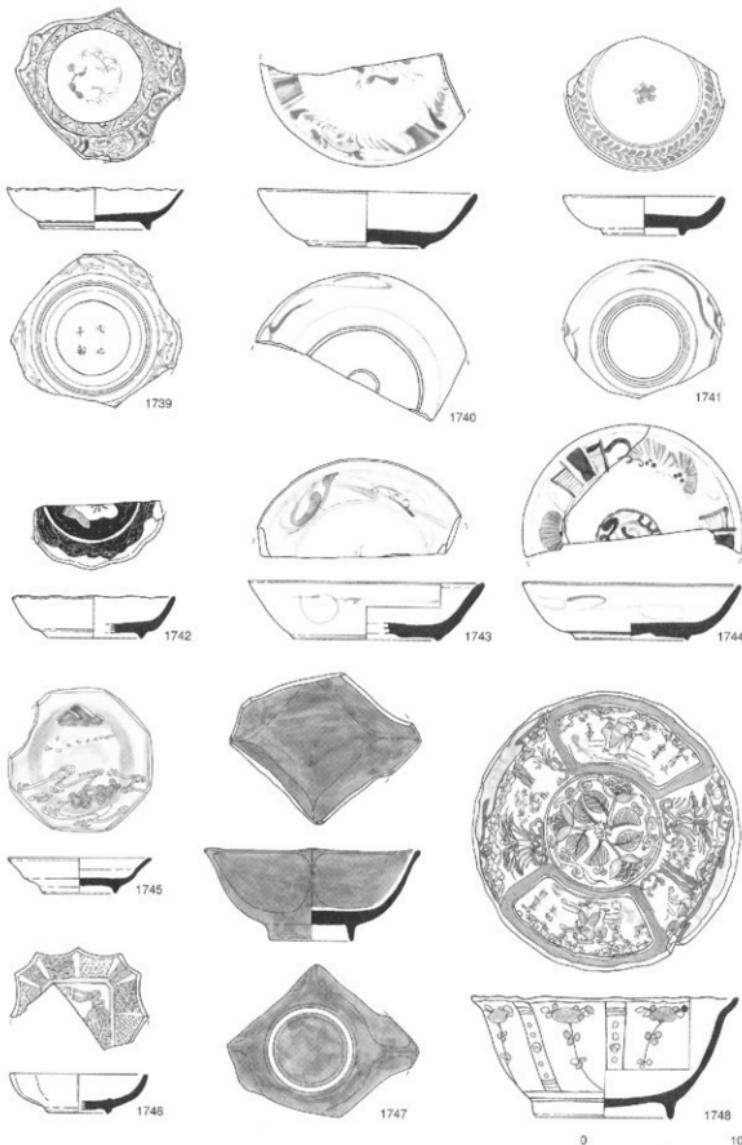
の染付磁器で薄手の盃である。高台の脇には渦連続文が、高台内面には方形枠内に変形文字による銘が描かれている。1729は肥前系の磁器小杯である。葵筋底で外面には鉄絵により蝶と草花が描かれている。釉には虫食い穴が見られる。1730は肥前系染付磁器の蓋で、外面には唐草が、内面には口縁部四方櫛と見込二重圓線内蔓草が描かれている。1731は瀬戸美濃系染付磁器の蓋で、外面には恩絵風景（家屋・星座）と筆が、内面口縁部に雷連続文、見込に二重圓線内筆葉が、高台内には方形枠内の変形文字により銘が描かれている。1732は肥前系の青磁染付による蓋で、外青磁で内面は口縁部に四方櫛が、見込二重圓線内五弁花文、高台内には二重方形枠内「福」が描かれている。1733は肥前系の染付磁器の蓋で、外面は区画・牡丹・花卉・文字（芭蕉）、高台脇連弁、内面には口縁部四方櫛と見込二重圓線内環状松竹梅が描かれている。1734は肥前系の染付磁器の蓋で外面には草花・蝶が描かれている。1735は肥前系の染付磁器の蓋で内外面に網目、高台内には銘が描かれている。1736は肥前系の磁器の蓋で、外面二重圓線は染付で内面「福」の銘は色絵により描かれている。1737は瀬戸美濃系染付磁器の蓋で、橋形の摘み部が貼付され外面には筆・宝が描かれている。1738は肥前系の染付磁器段重の蓋で、口径131mmを測り橋形摘みが貼付けられている。外向には鶴と雲が描かれて焼継痕が見える。1749とセットで18C後半から幕末の物と思われる。1739は肥前系磁器の染付皿で、型打併用成形の輪花形で外面には唐草、内面には蛸唐草に見込環状松竹梅が描かれ、高台内には「或化年製」の銘がある。1740は肥前系染付磁器の皿で、口径132mmを測り、外面には簡略唐草内面には草・区画が描かれている。高台は蛇ノ目凹型高台である。1741は肥前系の染付磁器皿で、外面には唐草、内面には口縁部に蘿花が連続で描かれ、見込二重圓線内五弁花文が描かれている。1742は瀬戸美濃系染付磁器の輪花皿で、型打成形で内面には山波・梅花が型押しされている。1743は瀬戸美濃系の陶器皿である。外面には鉄絵により椿図文が描かれている。1744は関西系の染付磁器皿で、外面には簡略唐草、内面には区画・草が描かれ、蛇ノ目凹型高台で焼継痕が見える。1820年以降の物と思われる。1745は肥前系の染付磁器皿で、内面は墨弾きにより風景が描かれている。1746は肥前系白磁の磁器皿で、陽刻型打成形により内面には七宝繩・青海波・区画が施されている。1747は肥前系磁器の角形鉢である。型打成形で全面には珊瑚釉が掛かり皿付は無釉である。1748は肥前系染付磁器の輪花鉢である。型打成形で外面には仕切・草花、内面には格狭間・梅見人物・漢詩・庭園・見込草花が描かれている。1749は肥前系染付磁器の段重で、外面には鶴が描かれている。口縁と高台皿付は袖剥ぎされた18世紀以降の物である。1738とセットと思われる。1750は肥前系の染付磁器の筒型碗で、外面は蔓草、内面には四方櫛が描かれド平に釉は掛けっていない。高台は蛇ノ目凹型高台で1690年から1780年の物である。1751は肥前系染付磁器の段重で、口縁と皿付は無釉で、外面には恩絵に花・劍・縁が描かれ底部には焼継痕が、高台内には焼継削印「一」が見える。1752は肥前系の染付磁器碗で、外面には雲中飛龍が描かれている。1753は瀬戸美濃系磁器の鉢で、型打成形による腰張型で外面には鎬が施されている。1754は肥前系染付磁器で蓋物の身である。外面には花唐草が描かれているが、呉須が彌けている。18世紀後半の物と思われる。1755は磁器合子身である。白磁で底部は無釉である。1756は肥前系磁器で白磁の合子身である。1757は肥前系の磁器合子身である。底部同軸ヘラケズリで、口縁と底部は無釉である。1758は肥前系染付磁器の瓶である。葵筋底で外面は蛸唐草と連弁である。1759は肥前系磁器の小瓶（神酒徳利）で文二筆・梅が描かれている。1760は三田青磁で六角花卉と思われる。体部は陰刻され内外面共、青磁釉が厚く施釉され、六足が貼付けられている。19C以降の物である。1761は瀬戸美濃系の染付磁器徳利で、外面には草花・鳥が描かれている。1762は肥前系染付磁器の仏飯器で、外面には花卉が描かれている。1763は肥前系染付磁器の仏飯器で、蛇ノ目凹型高台



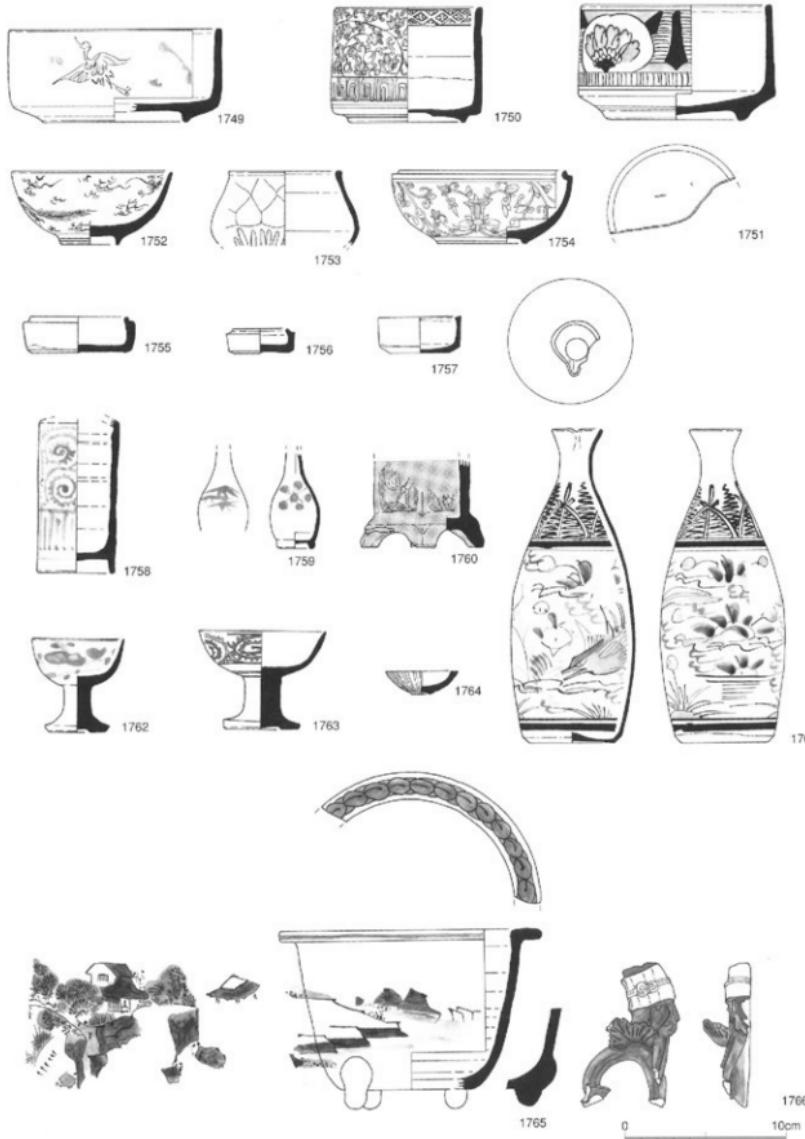
第434図 SX1010出土遺物実測図(1)



第435図 SX1010出土遺物実測図(2)



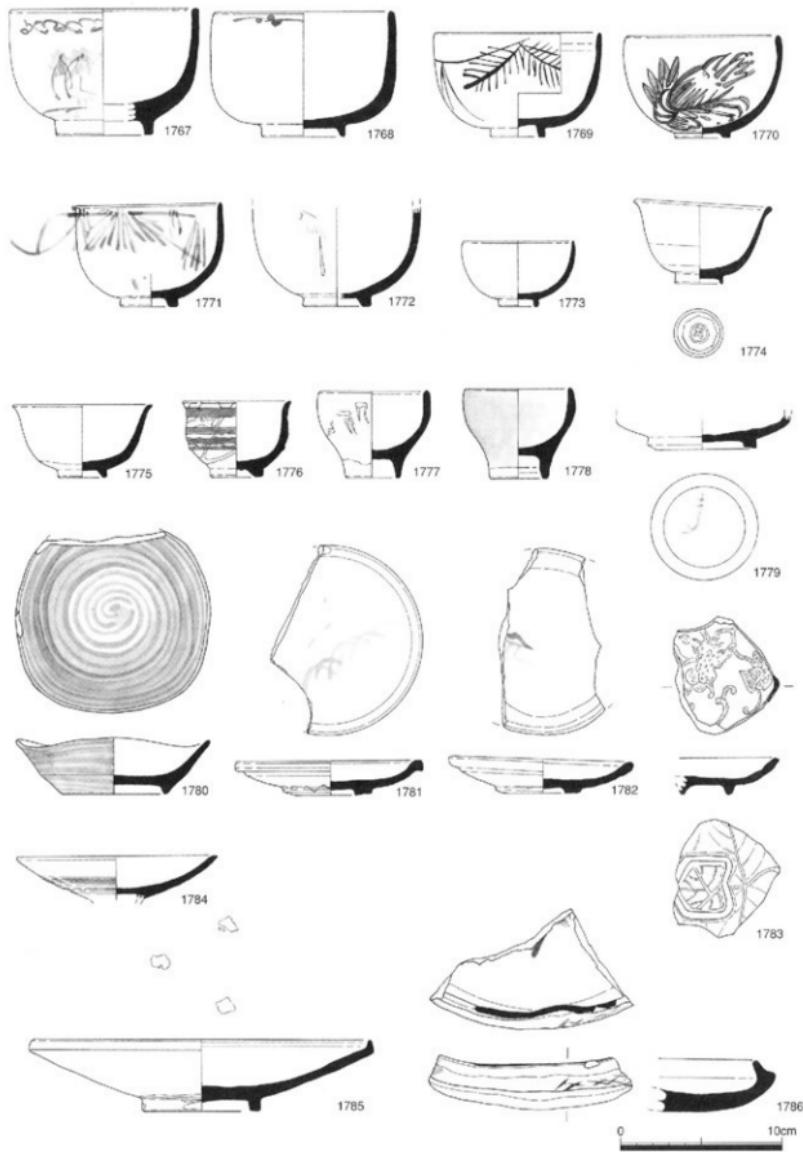
第436図 SX1010出土遺物実測図(3)



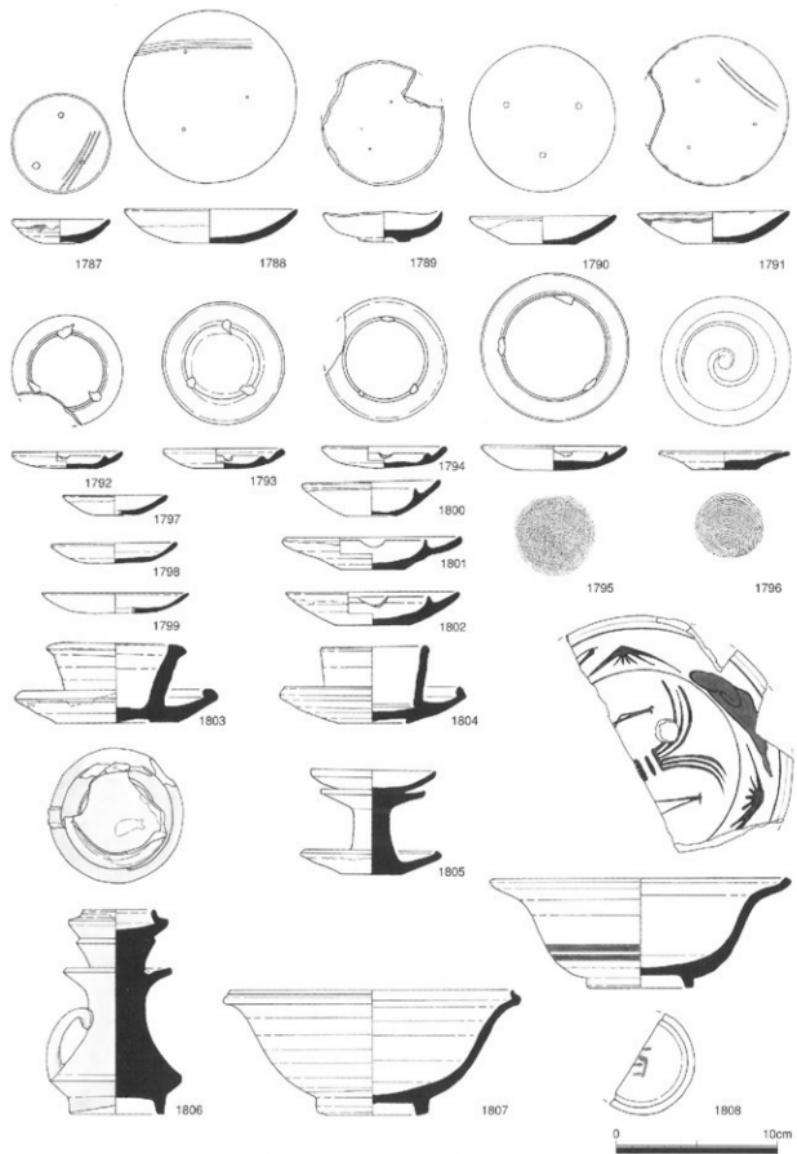
第437図 SX1010出土遺物実測図(4)

で、蛸唐草が描かれている。18C末から幕末の物である。1764は肥前系の磁器紅皿で、外面は型押の陰刻による菊花文で内面には白色の釉が掛かる。1765は肥前系の磁器染付の香炉又は檀木鉢で、縁折の一足で外面には山水家屋、口綫上端に渦の連続文が描かれている。内外面共底部は無釉である。1766は肥前系で装飾の把手部と思われ、唐草にのしが掛かり瑠璃釉と白色釉で彩色されている。1767は肥前吉津の陶器碗で、外面は褐灰の胎土に陶胎染付により梅化・東屋が描かれている。疊付は無釉である。1768は肥前吉津の陶器碗で、外面は灰黄の胎土に陶胎染付により梅枝？が描かれている。1769～1772は京信楽系で陶器の茶碗である。1769は外面には鉄絵により注連繩が描かれている。高台部は無釉。1770は外面には赤絵・透明釉により海老が描かれている。高台部無釉。1771が外面には鉄絵による注連繩が描かれている。高台部は無釉。1772は外面には色絵（赤・緑）により注連繩が描かれている。高台は無釉である。1773は瀬戸美濃系陶器の皿で、口径68mmを測る。1774は京信楽系陶器の碗で、高台部を除く全面に灰釉が掛かり貰人が見える。1775は京信楽系陶器の鐘反碗で、高台部を除く全面に灰釉が掛かり貰人が見える。1776は萩系の陶器ピラ掛け碗で、内面は白釉が全面施釉され、外面には白・鉄釉がイッチン掛けされている。18Cの物である。1777・1778は陶器の猪口と思われる。1777は胎土には鉄粉刻みを練り込まれ、灰釉が全面に掛かる。外面には白泥により帆又は文字が描かれている。疊付無釉である。1778は胎土には鉄粉が多く練り込まれ、灰釉が全面に掛かる。疊付無釉である。1779は京信楽系の陶器碗で、灰白の胎土に灰釉が施釉されている。高台は無釉で内に墨書が見える。1780は瀬戸美濃系陶器の皿で、ロクロ成形後手捏され、やや四角ばっている。内外面とも回転刷毛目装飾が施されている。疊付無釉である。1781は瀬戸美濃系陶器の皿である。口径115mmの縁折で全面に灰釉が掛かる。高台は蛇ノ目高台の無釉である。1782は瀬戸美濃系陶器の皿で、口径113mmの丸縁で見込には鉄絵により家が描かれ、全面に灰釉が掛かる。高台は蛇ノ目高台の無釉である。1783は肥前系磁器の小皿である。口縁の施された白磁で、型打変形の手塙皿である。外面には葉が、内面には蔓草がそれぞれ陽刻されている。高台は貼付高台である。1784は陶器の皿で、外面には沈線が6条ずつ2カ所に見られ、全面に褐釉が施釉されている。1785は瀬戸美濃系陶器の溝縁皿で、灰釉が全面に施釉され、貰入と見込に目模が3カ所見える。高台は無釉である。1786は瀬戸美濃系陶器の鉢で、縁折で口猪が、内外面には鉄絵が施され外面には綠釉も掛かる。1787は瀬戸美濃系陶器の灯明皿で、内面には灰釉が掛かり梅目が施され、見込にはハリ支えが3点に見える。外面は無釉で口縁部には煤が付着している。1788は瀬戸美濃系陶器の灯明皿で、内面には灰釉が掛かり、梅目が施され見込にはハリ支えが3点に見える。外面は口縁部のみ施釉され、全体に煤が付着している。1789は京信楽系の陶器小皿で、口径71mmで内外面には灰釉が掛かり貰人が見える。高台は蛇ノ目高台で無釉である。1790は京信楽系陶器の灯明皿で、内面には灰釉が掛かり貰入と見込には目模が見える。外面は無釉で口縁部には煤が付着している。1791は京信楽系の陶器の灯明皿で、内面には灰釉が掛かり梅目が施され、見込には口模が3カ所見える。外面は無釉で口縁部には煤が付着している。1792は備前の陶器灯明受皿で、内面は油溝3カ所で塗土が施され、底部は回転糸切りされている。1793は備前の陶器灯明受皿で、内面は油溝3カ所で底部は回転糸切りされている。1794は備前の陶器灯明受皿で、底部は回転ヘラ切りされている。1795は備前の陶器灯明皿である。内面は油溝3カ所で底部は回転糸切りされている。1796は備前の陶器皿で、上面は中央より深い渦状の沈線が施され塗土されている。ツマミ痕も見られる。底部は回転糸切りされている。1797は京信楽系の陶器小皿で、内面には灰釉が掛かる。1798は備前の陶器灯明皿で、底部は回転糸切りされ、口縁部には煤が付着している。1799は備前の陶器灯明皿で、底部は回転糸切りさ

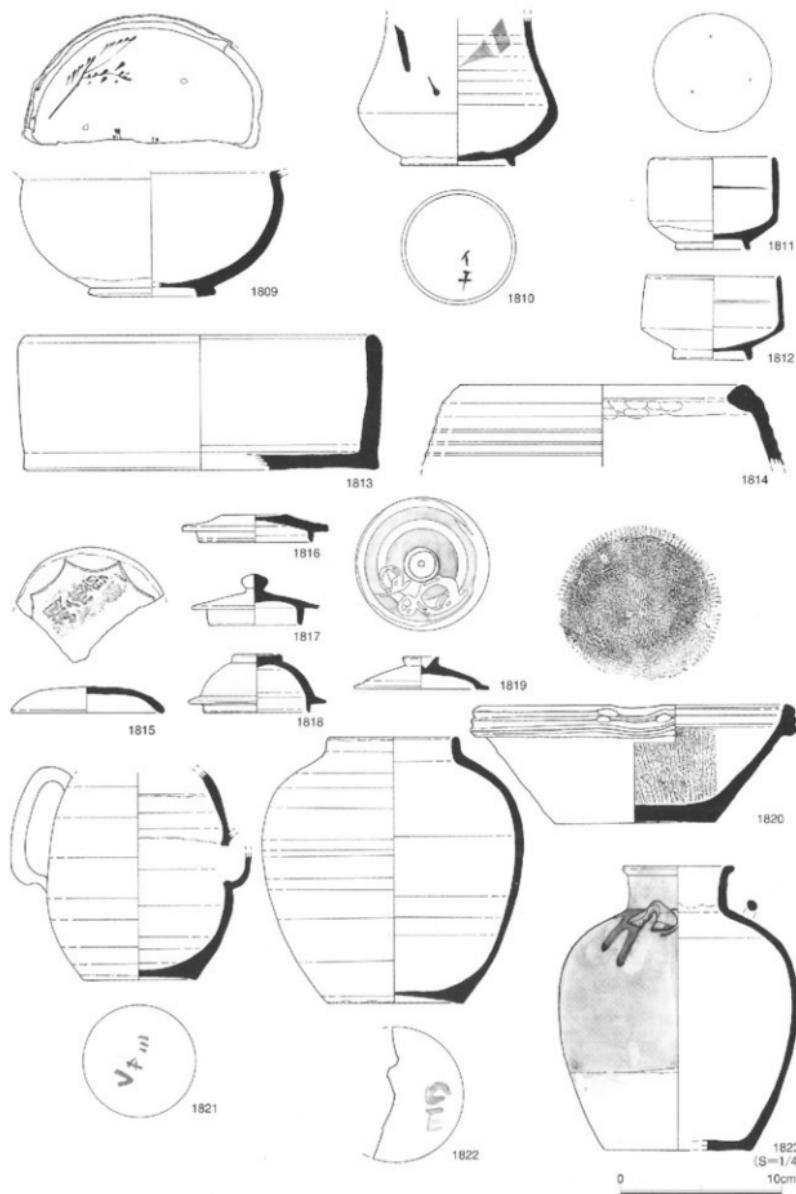
れ、口縁部には煤が付着している。1800は京信楽系の陶器灯明受皿で、内面のみ灰釉が掛かり貫入が見える。1801は京信楽系の陶器灯明受皿で、内面のみ灰釉が掛かり貫入が見える。1802は陶器灯明受皿で、白っぽい灰白の胎土に、つやのある灰釉が施釉されている。1803は瀬戸美濃系の陶器灯明具で、口縁部には煤が付着している。1804は瀬戸美濃系の陶器灯明具で、口縁部には煤が付着している。1805は在地系大谷の陶器灯明具で、底部を除き全面に鉄釉が施釉されている。1806は在地系大谷の陶器灯明具で、把手が1カ所に貼付けられ、全面に鉄釉が施釉されている。高台には砂が付着している。1807は在地系大谷の陶器鉢で、高台部を除き全面に鉄釉が施釉されている。1808は瀬戸美濃系の陶器鉢で、口径189mmを測り鉄絵により内面には山・雲と見込図線内松葉・草束が、外面上には帶線が描かれ、高台を除き透明白釉が掛かる。高台内には墨書が確認できる。1809は肥前系の陶器鉢で、内面には鉄絵により枝が描かれ、見込には日痕が見える。1810は陶器の鉢類と思われる。にぶい橙の胎土に、内面無釉で外面上には灰釉と緑釉が一部掛け流しされている。高台は無釉であるが全体に墨が塗られ、高台内には墨書が「イチ」と読める。1811は京信楽系の陶器碗である。口径74mmを測り、内面には鉄釉による圓線が1条と、高台部を除き全面には灰釉が掛かる。1812は京信楽系の陶器碗である。口径81mmを測り、内面には鉄釉による圓線が1条と、高台部を除き全面には灰釉が掛かる。1813は備前系の陶器浅鉢である。口径284mmを測る短筒型をした厚手の体部で、内外面には塗土が施されている。1814は瀬戸美濃系の陶器火鉢である。1815は陶器の胡麻煎りである。型作成形で天井部には「胡麻煎」と浮き彫りにより文字が見える。外面には鉄釉が施釉されている。1816は京信楽系の陶器蓋である。外面には灰釉が施釉されている。1817は京信楽系の陶器蓋である。外面には灰釉が施釉されている。1818是在地系大谷の陶器蓋である。外面には鉄釉が施釉されている。1819は関西系の陶器蓋である。内面には灰釉が施釉され、外面にはにぶい橙の胎土に鉄釉の二重圓線と白泥のイッチン掛けにより虫?が描かれている。1820は堺明石系の陶器擂鉢である。口径186mmを測り、擂目単位は9条/2.3cmである。1821是在地系大谷の陶器水注である。暗褐色の胎土に鉄釉が掛かり、外面底部は無釉で「□サシ」と墨書が見える。1822是在地系大谷の陶器壺である。鉄釉が掛かるが、外面底部は無釉で墨書が見える。1823は関西系の陶器三耳壺である。外向上半には褐釉が掛かるが、胴部下半は無釉である。1824是在地系大谷の陶器壺である。全面に鉄釉が掛かり体部には「酉春本家森本屋」と刻書がある。1825是在地系大谷の陶器瓶である。底部を除き全面に鉄釉が掛かる。1826は陶器十瓶と思われる。型作り貼合せで外面には篆書が陽刻された釣鐘型で、内面には灰釉が外面は鉄釉が施釉されている。1827は陶器の瓶と思われる。体部台形で白泥と灰釉により花と線が描かれている。1828は瀬戸美濃系の陶器壺である。外面底部には鉄絵による楕垣が描かれている。1829是在地系大谷の陶器短頸壺の口縁部であると思われる。内外面には鉄釉が施釉されている。1830は関西系の陶器壺である。口径332mmを測り、内外面には鉄釉が施釉されている。1831是在地系大谷の陶器壺である。口径420mm、器高483mmを測る。鉄釉と塗土が施釉されている。1832は陶器の植木鉢である。底部は三足が貼付けられ中央に穿孔があり、外面には鉄釉が施釉されている。1833は瀬戸美濃系の陶器置物等の獸足部で白泥が塗布されている。向獅子と思われる。1834は上師質灯明皿である。底部は回転糸切りされ袖釉が施釉されている。口縁部には煤が付着している。1835は上師質の皿である。口径100mmを測り、底部には回転糸切り後板目痕が見える。1836は土師質の秉燭で、たんころ型である。1837は土師質のたんころ型秉燭で、口縁部には煤が付着している。1838は土師質の撚炉である。貼付高台で外面底部には一重円刻内「清山」と刻印されている。1839~1841は土師質の焙烙である。1839は口径270mmを測る。1842は上師質の火消し壺の蓋で、内面中央には煤が付着している。1843は土師質の火入れで、



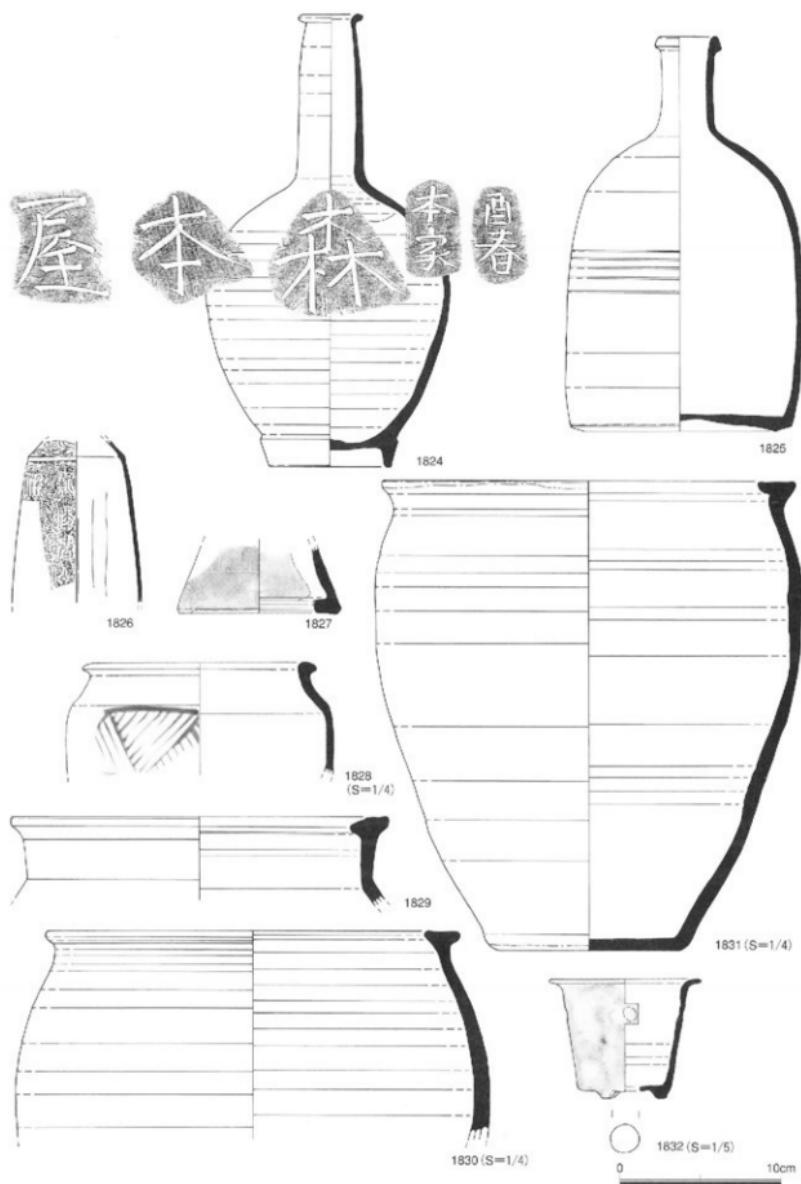
第438図 SX1010出土遺物実測図(5)



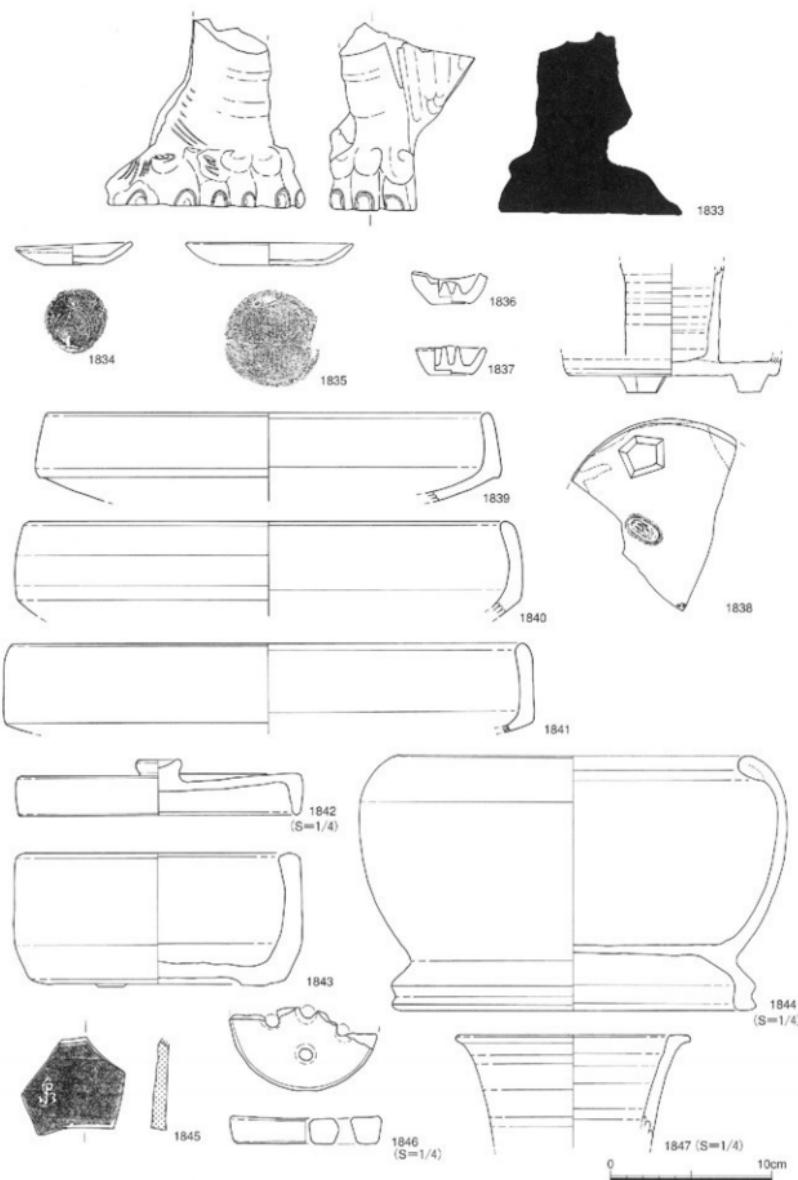
第439図 SX1010出土遺物実測図(6)



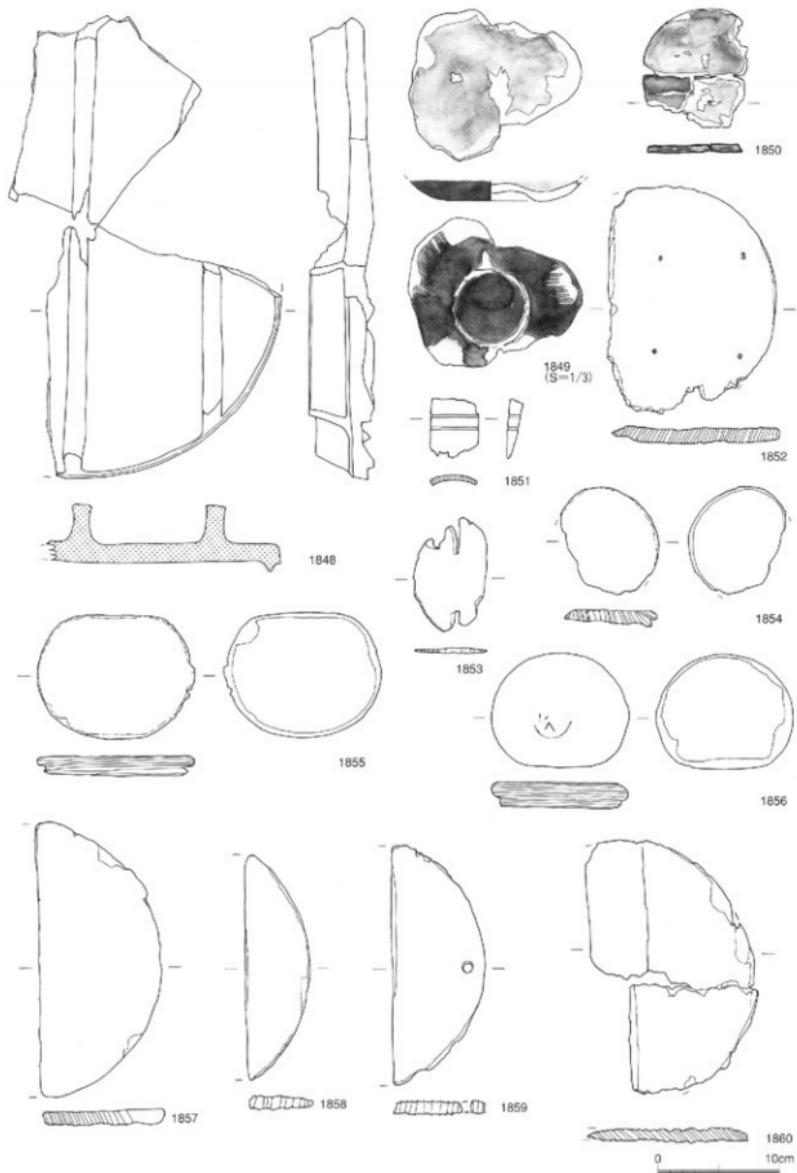
第440図 SX1010出土遺物実測図(?)



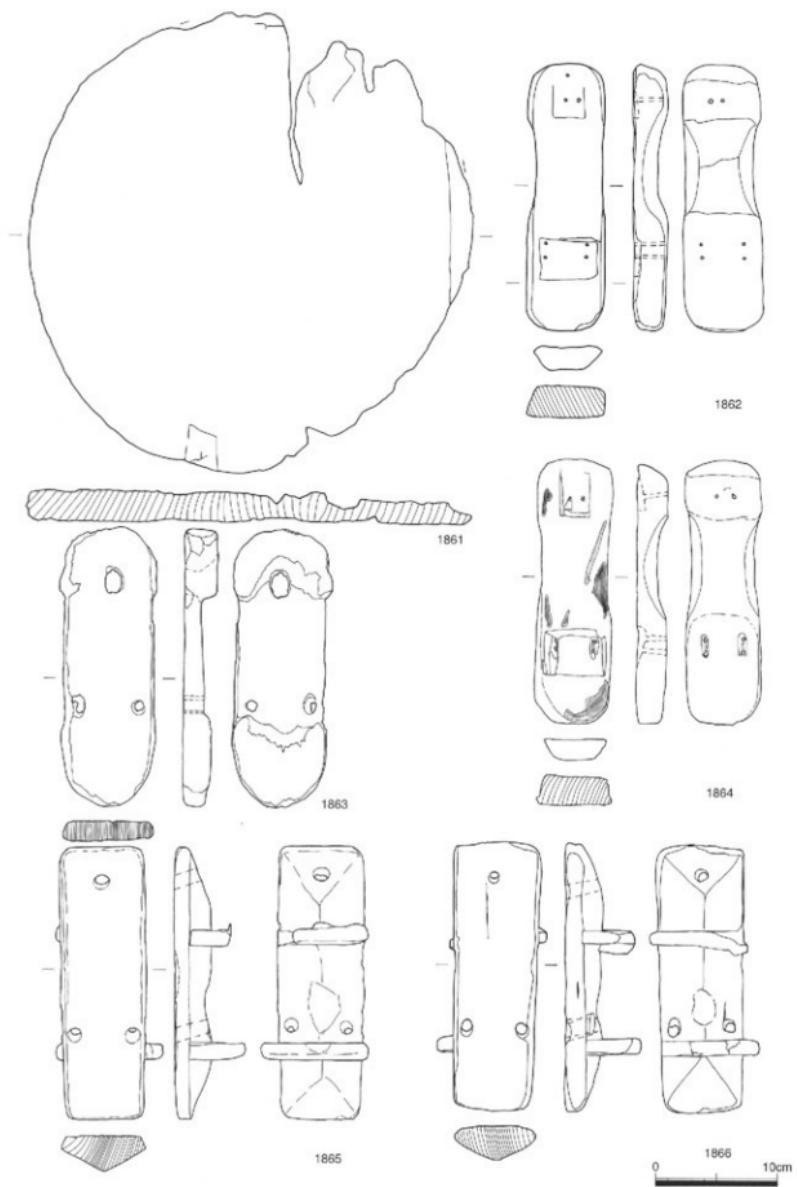
第441図 SX1010出土遺物実測図 (8)



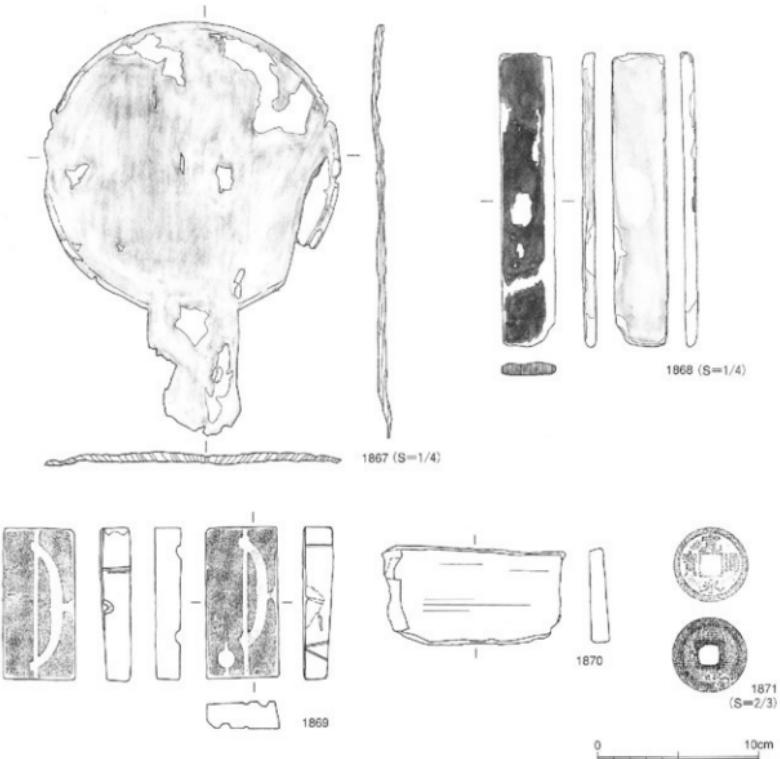
第442図 SX1010出土遺物実測図(9)



第443図 SX1010出土遺物実測図 (10)



第444図 SX1010出土遺物実測図 (1)



第445図 SX1010出土遺物実測図 (12)

非常に短い三足が貼付けられている。1844は土師質の火鉢である。化粧土が塗付されている。1845は瓦質の炉である。涼炉の外面の一部と思われ「泉」と刻印が施されている。19世紀以降の物である。1846は土師質で七輪の目皿である。両面には難れ砂が付着している。1847は口径186mmを測る土師質の鉢である。1848は瓦質の壺蓋で口径383mmを測る。2本の平行な把手と口縁部は貼付けられている。1849は木製品の桶である。内面は黒漆、外面は黒漆の上に茶漆が塗装され、黒漆により装飾が施されている。1850は木製品の曲物である。表面には黒漆が塗布され、中央には穿孔が1点見える。1851は木製品の加工木片である。1852～1856は木製品の蓋である。1852は針穴痕が4ヶ所に見える。1856は上面に焼印が見える。1857は木製品の桶である。口径224mmを測る。1858は木製品の桶である。口径184mmを測る。1859は木製品の桶である。口径195mmを測り、1ヶ所に穿孔が見える。1860は木製品の蓋である。1861は木製品の桶である。口径377mmを測る。1862は木製品の草履下駄である。1863は木製品の削り下駄である。1864は木製の草履下駄である。黒漆が全面に塗られた痕がある。1865は木製品の差し駄下駄である。1866

は木製品の差し歎下駄である。1867は木製品の鏡箱である。全長339mm、鏡幅222mmを測る。全面に僅かであるが黒漆が付着している。1868は木製品の漆指物である。長径241mm測り赤漆が1面に、黒漆が3面に塗り分けられている。1869は石製品で漁網錐の鋳型である。石材は緑色岩である。1870は石製品の砥石である。長径112mmを測り、両面に使用痕が見られる。石材は粘板岩である。1871は銅錢の（新）寛永通宝である。

不明遺構 13 (SX1013) (第446図)

2区のC-15グリッドから検出された長軸を南北方向にとる長さ約2.4m、幅1.7mの大きさの不整形円形の遺構である。断面がU字状に掘り込まれた深さ0.7mの遺構の埋土中には炭化物や焼土がブロック状に混入されている。

出土遺物 (第447図)

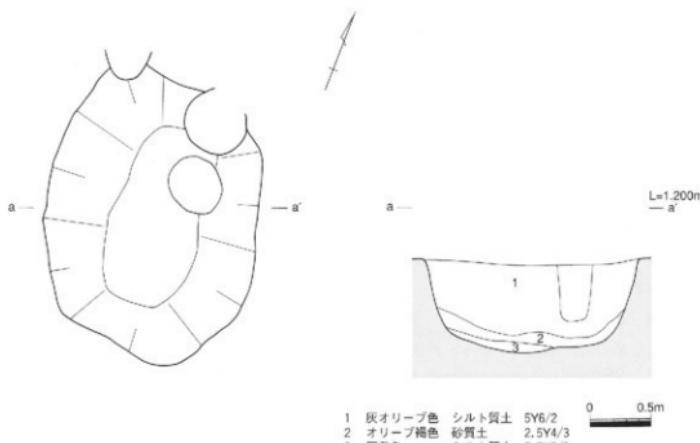
1872は肥前系の染付磁器碗である。外面には桐の木が描かれ、高台外底面には「直明」の銘が書き込まれている。1873は瀬戸美濃系の陶器碗である。高台部分を除き鉄釉がかけられている。1874は肥前唐津の皿である。高台部分を除き灰釉がかけられ、内面見込み部には砂目痕が2点認められる。1875は土師質の灯明皿である。底部には回転糸切り痕が残され、口縁部には煤が付着している。1876は土師質の灯明皿である。底部には回転糸切り痕が残され口縁部には煤が付着している。1877は土師質の皿である。底部には回転糸切り痕が残されている。1878は土師質の焰燈である。

不明遺構 14 (SX1014) (第448図)

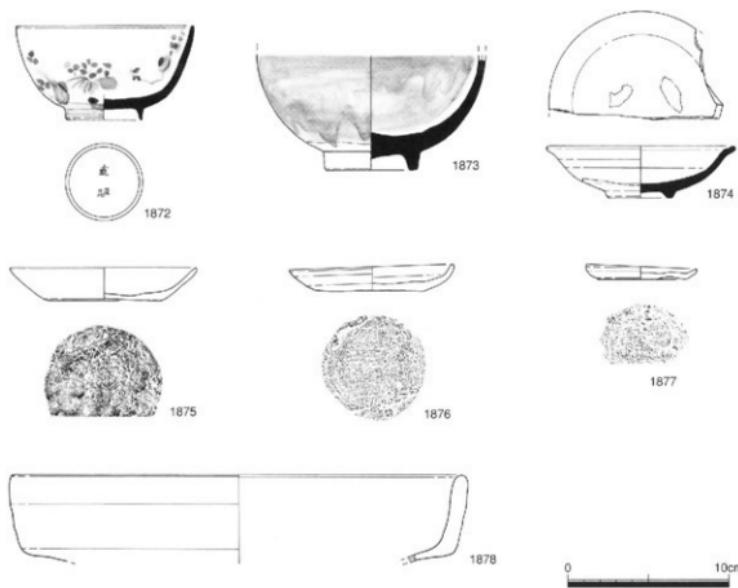
遺構の一部が南側の調査区外に大きく延びているため正確な大きさは不明だが、2区のB-C-16・17グリッドにまたがって検出された東西4.6m、南北3.2m程の大きさの不整形な形の遺構である。床面が二段に掘り込まれた深さ約0.7mの遺構内からは、陶磁器や土師質土器の破片が多量に出土していることから廃棄土坑の可能性がある。

出土遺物 (第449~452図)

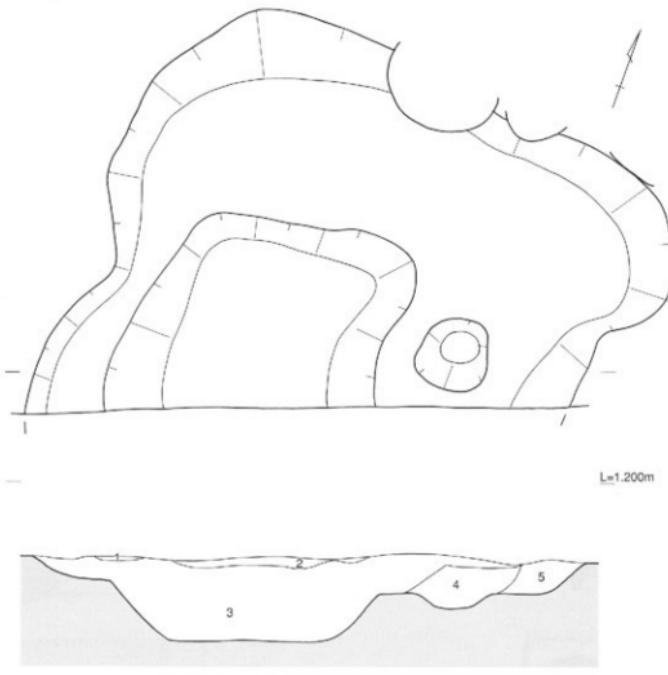
1879は口径96mmを測る肥前系の呉器形白磁碗である。1880は肥前系の磁器碗である。体部外面には二重網目が染付で描かれている。高台骨付部分は無釉で砂が付着している。1881は肥前系の磁器製丸碗である。高台骨付部分は釉剥ぎされ砂が付着している。1882は口径70mmを測る肥前系の磁器製小杯である。高台骨付部分は露胎で砂が付着している。1883は肥前系の磁器製紅皿である。口径56mmを測り、外面には短冊と花の文様が上絵付けにより描かれている。1884は肥前系の白磁鉢である。内面には型押により葉の文が彫刻されている。1885は肥系の染付磁器碗である。体部外面には竹文が描かれ、内面見込部にはコンニャク印判により五弁花文が押されている。1886は肥前系の磁器製広東碗である。内面見込部には染付により山水が描かれている。1887は肥前系の染付磁器碗の蓋である。体部外面には花唐草、高台内と内面見込部には花文がそれぞれ描かれている。1888は口径82mmを測る瀬戸美濃系の磁器製灯明受皿である。1889は肥前系の磁器製仏飯器である。外面には輪線他が染付により描かれている。1890は外面に鳥文が描かれた肥前の陶胎染付碗である。内外面とも全体に貫入が著しい。1891は肥前系の陶器碗である。外面には染付により植物が描かれている。蓋付部分は無釉で周辺には砂が少量付着している。1892は京信楽系の腰折形の陶器碗である。外面には鉄絵により松が描かれている。内面見込部には目痕が見られ高台部分は露胎である。1893は高台部分を除き灰釉がかけられた肥前唐津の溝縁皿である。1894



第446図 SX1013実測図

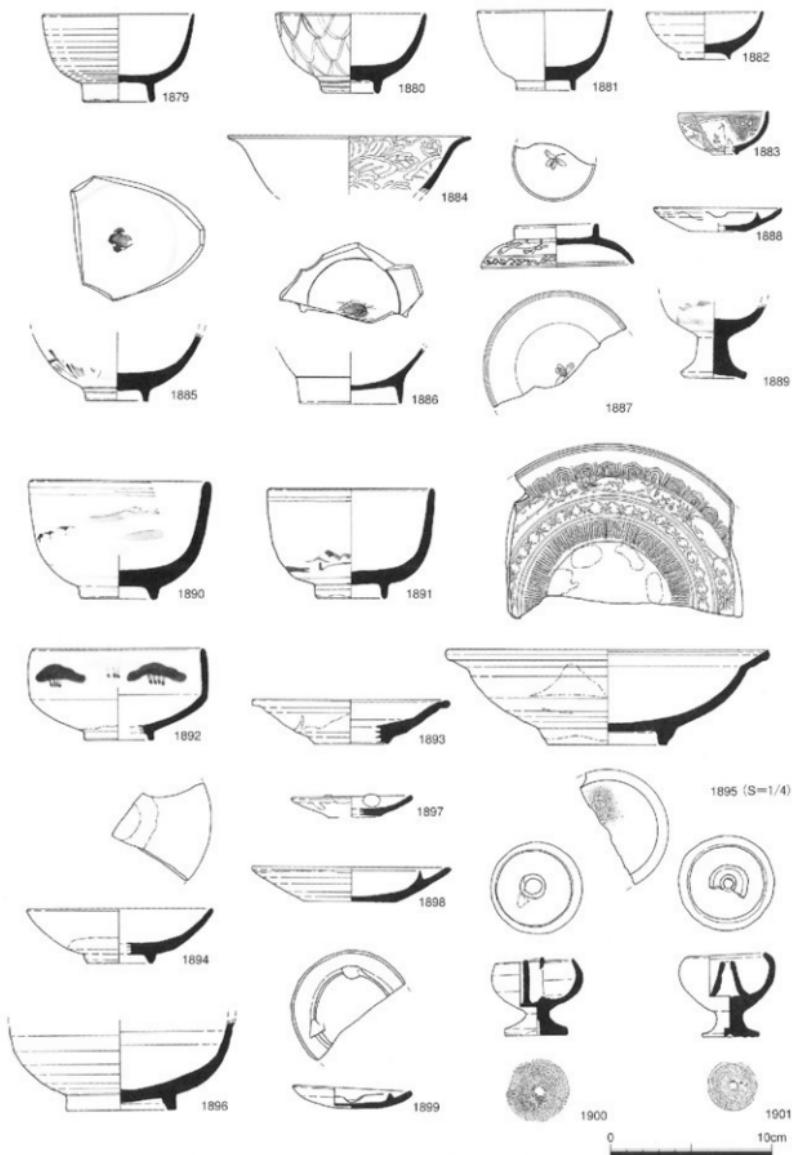


第447図 SX1013出土遺物実測図

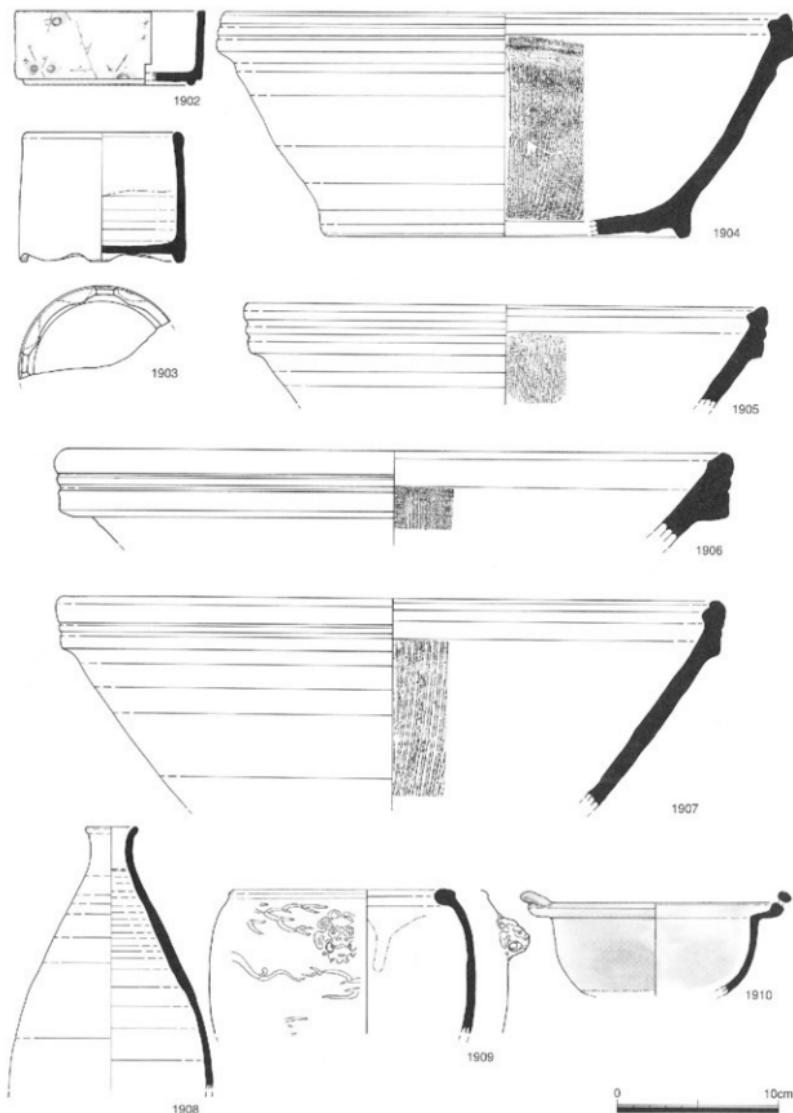


第448図 SX1014実測図

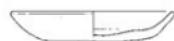
は肥前系の陶器皿である。高台部分を除き灰釉がかけられ、内面見込部は蛇目釉剥ぎが施されている。1895は肥前麻津の陶器製大鉢である。体部内面には鉄釉と白泥を使用して象嵌文様が描かれ、見込部には砂目痕が見られる。外面は底部が無釉で高台外底面には刻印が見える。1896は瀬戸美濃系の陶器鉢である。体部の外面下半部を除き灰釉がかけられ、内面見込部には胎土目痕が3カ所見える。1897は京信楽系の陶器製灯明皿である。内面全体と口縁部外面に灰釉がかけられ口縁には煤が付着している。1898は灰釉が施された京信楽系の陶器製灯明受け皿である。1899は備前の陶器製灯明受け皿である。全面に塗土が施されている。1900は陶器製灯明具の秉揚である。鉄釉がかけられ煤が付着している。1901は灰釉が施された京信楽系の陶器製灯明具の秉揚である。1902は京信楽系の陶器製の段重である。口径114mmを測り外面には鉄釉と白泥により折枝模が描かれている。口縁部内面は無釉である。1903は京信楽系に属する陶器製の半筒形火入れである。疊付部分を削り出して足を作っている。底部外面と内面の下半部を除き灰釉がかけられている。1904・1905は備前の擂鉢である。1904は擂目单位13条／3.2cmを測り、高台部分は貼付けられている。1905は擂目单位12条／3.2cmを測る。1906は口径400mmを測る堺明石系の



第449図 SX1014出土遺物実測図(1)



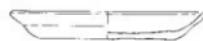
第450図 SX1014出土遺物実測図 (2)



1911



1912



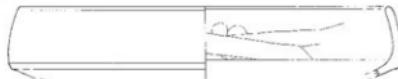
1913



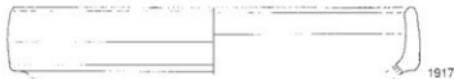
1914



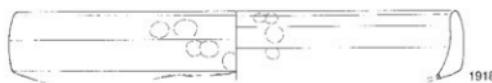
1915



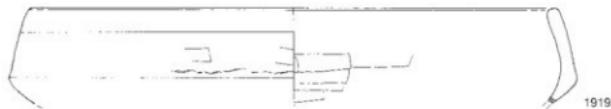
1916



1917



1918

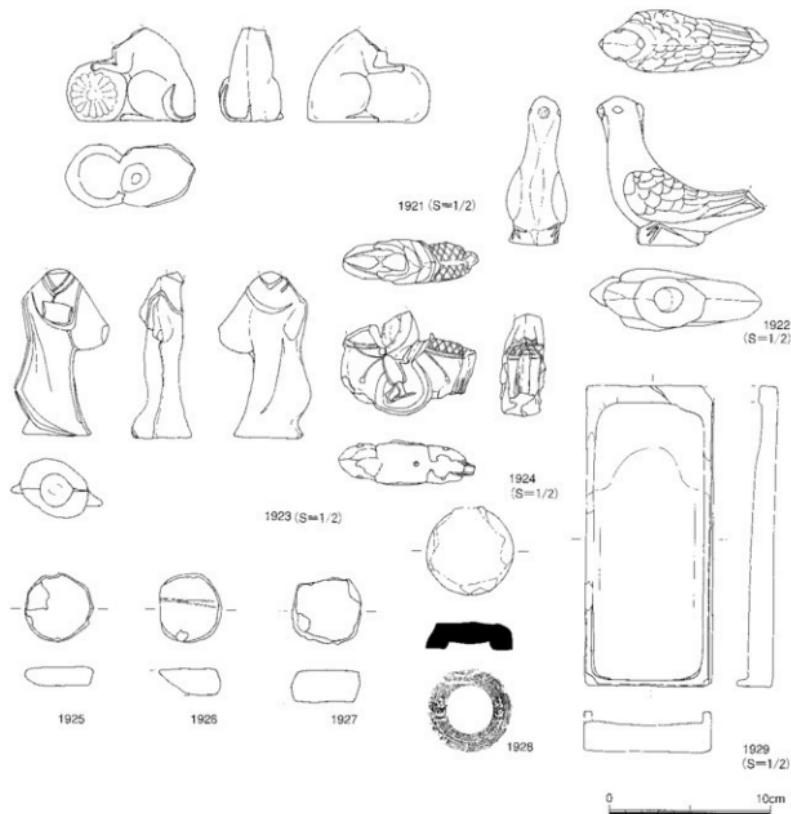


1919



0 10cm

第451図 SX1014出土遺物実測図 (3)



第452図 SX1014出土遺物実測図(4)

陶器製擂鉢である。内面には10条1単位の擂目が付けられている。1907は僧前の擂鉢である。擂目単位10条 $/3.7\text{cm}$ を測る。鉢部下方に重ね焼きの溶着痕が見える。1908は塗土が施された丹波系の陶器徳利である。1909は瀬戸美濃系の陶器製火鉢である。体部内面は露胎であるが、外面には懸垂の突起が貼付けられ、下絞付けに白釉で雲を描いた上から緑釉がかけられている。1910は陶器鍋である。口縁に把手が貼付けられ内外面ともに鉄釉がかけられている。1911は底部の切り離しに回転糸切り技法が使用された口径101mmを測る土師皿である。1912は底部の切り離しに回転糸切り技法が使用された土師質の皿である。1913は底部の切り離しに回転糸切り技法が使用された土師質の灯明皿である。内外面には煤が付着している。1914は底部の切り離しに回転糸切り技法が使用された土師質の灯明皿である。内外面には煤が付着している。1915は口径162mmを測る土師皿である。1916~1919は関西系土師質の熔炉である。

1916は口径226mmを測り外面には煤が付着している。1917は口径244mmを測り外面には煤が付着している。1918は口縁部内外面に指オサエが確認できる。口径は268mmを測る。1919は口縁部内外面に指オサエが残る。口径319mmを測る。1920は口径346mmを測る土師質の上釜である。1921は土製の座猫の人形である。型作り成形で製作され底部は穿孔されている。全面に雲母が付着している。1922は土製の鳩人形である。型作り貼合せで製作され、底部には円錐形の穿孔が見える。1923は人物の立像をかたどった土製の人形である。型作り貼合せで製作され全面に雲母が付着している。1924は乗馬姿をかたどった土製の人形である。型作り貼付成形で製作され腹部には穿孔がある。1925～1927は土師質の加工円盤である。1928は陶器の加工円盤と思われる。高台部が加工されており疊付には刻印がある。1929は石製の硯である。石材は粘板岩を使用している。

不明遺構 15 (SX1015) (第453図)

3区のJ・K-12グリッドにまたがって検出された遺構である。長さ約1m、幅0.8m、深さ0.4mの不整形な形の掘り込みの中から、陶器の壺がほぼ直立した状態で出土している。遺構の周辺は擾乱された部分が多く建物跡は復元できなかったが、地業が行われた柱穴が検出されていることから、SK1009のように建物に伴う遺構の可能性がある。遺構内の埋土は瓦片を含んだ締まりの弱い砂質土が堆積している。

出土遺物 (第454図)

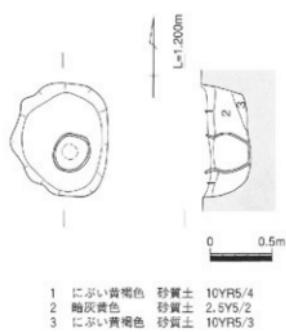
1930は関西系の陶器製大甕である。粘土紐積上げ成形で製作された頸部切立形で、腰部には接合痕が残されている。底部を除き鉄釉が施されているが、体部外向には黒釉の流しがけが施されている。

不明遺構 17 (SX1017) (第455図)

3区のJ・K-14・15グリッドにまたがって検出された不整形な形の遺構である。東西約4.8m、南北5mの範囲に広がる遺構の掘り込みは最も深いところでも0.2m足らずしかない。遺構内の埋土は全体に締まりが良好で、部分的に強い粘性を持っている。遺構内からは陶磁器や瓦の破片が織ととともに多く出土している。

出土遺物 (第456図)

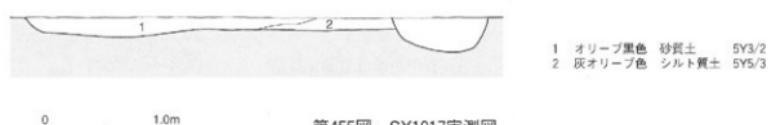
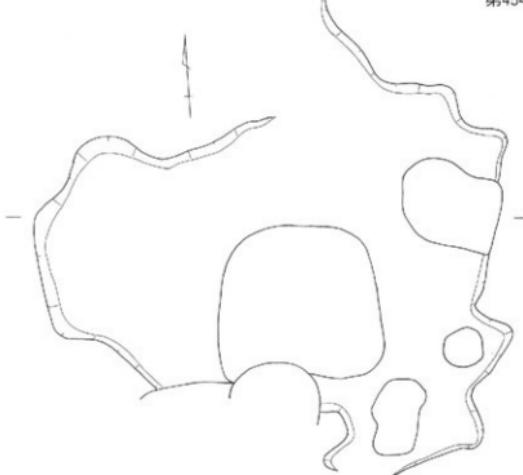
1931は瀬戸美濃系の磁器製端反碗である。外面には仙芝祝寿、内面見込部の二重圓線内には文字が染付によって書き込まれている。1932は瀬戸美濃系と考えられる半球形の染付磁器碗である。体部外面には区画と遠島帆船図が描かれ、内面の口縁と見込部に二重圓線が引かれている。また、高台疊付部分の釉は剥ぎ取られている。1933は肥前系の磁器小碗である。外面には染付により捺が描かれている。1934は肥前系の磁器小杯である。外面には染付による楕散らし文が描かれている。高台疊付部分は釉剥ぎされ露胎で周辺には砂が付着している。1935は肥前系の丸形磁器碗である。外面には染付により蝶が描かれている。高台疊付け部分は釉が剥ぎ取られ周辺には砂が付着している。1936は肥前波佐見の磁器小皿である。内面見込部には蛇ノ目釉剥ぎが施され、草花と二重圓線が染付により描かれている。また高台疊付部分には砂粒が付着している。1937は肥前波佐見の小皿である。口縁端部には口錦装飾が施され、外面には唐草と圓線、内面には花と二重圓線がそれぞれ染付で描かれている。1938は型打成形で製作された肥前系の磁器製輪花小皿である。口縁端部には口錦装飾が施され、内面には名月山水が染付により描かれている。また、焼継痕も残されている。1939は型打成形で製作された肥前系の磁器製輪花小鉢である。体部外面には唐草文、口縁部内面には四方櫛文が染付で描かれ見込部には二重圓線内に環状松竹



第453図 SX1015実測図



第454図 SX1015出土遺物実測図



第455図 SX1017実測図



第456図 SX1017出土遺物実測図

梅が描かれている。また、高台内には「富貴長春」の銘が書き込まれている。1940は肥前系の磁器製合子の蓋である。外面には染付により遠山・船が描かれている。1941は備前焼の灯明受皿である。塗土され、外面には煤が付着している。1942是在地産の大谷焼の陶器鉢である。折線型で内外面とも鉄釉がかけられている。1943是在地産の大谷焼の陶器鉢である。釣緑型の削出高台以外、全面に鉄釉がかけられている。1944は孫太形の陶器盤である。1945は土師質の小皿である。口縁端部には刻目が施され、底部の切り離しには回転糸切り技法が使用されている。1946は綏やかに内彎する体部を持つ土師質の皿である。1947は土師質の丸胴型の焜炉である。球形の胴部には穿孔が加えられ、高台には半円状の抉りが加えられている。1948は瓦質の羽釜である。頸部外面には指オサエが施され、内面には拂刷毛目調整が加えられている。1949は型作り貼合せ成形によって製作された土製の馬の人形で、底部には穿孔がある。1950は銅製の煙管雁首である。

不明遺構 18 (SX1018) (第457図)

3区のL-15グリッドから検出された長軸を南北方向にとる長さ約1.1m、幅0.9mの大きさの不整形の遺構である。壁がほぼ垂直に掘り込まれた遺構の深さは約0.8mほどあり、3層に分かれる埋土はほぼ水平に堆積している。陶磁器や土師器、瓦の破片が多く出土していることから廃棄土坑の可能性がある。

出土遺物 (第458図)

1951は染付磁器碗である。外面に花、内面には連續文が描かれ、内面見込部には「寿」の変形字が書き込まれている。1952は三田青磁の陽刻水鳥型小皿である。外面底部には4つの半環足が貼付けられている。1953は肥前波佐見の染付磁器である。内面には斜格子二重團線が描かれ、見込部は蛇ノ目釉剥ぎされている。また高台豊付部分は露胎である。1954は三田青磁の陽刻草花鉢である。1955は京信楽系の陶器製端反碗である。外面は型押による亀甲で腰部は縱竪彫りになっている。高台部分を除き灰釉がかけられている。1956は京信楽系の陶器碗である。小杉碗で外面には鉄絵による若松が描かれている。高台部分は露胎である。1957は瀬戸美濃系の陶器製土瓶である。外面には染付により筆が描かれている。1958は京信楽系の陶器製行平鍋である。把手と足が貼付けられている。1959は陶器でたんころ型の乗鍋である。1960は土師質の焜炉である。外面は上部に「千津」と刻印があり塗土されている。

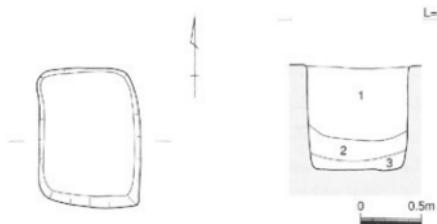
不明遺構 19 (SX1019) (第459図)

3区のL・M-10・11グリッドにまたがって検出された長軸を南北方向にとる長さ約5.7m、幅1.3mの大きさの遺構である。東西と北の壁面はそのまま地山を逆台形状に掘り込んだだけであるが、南側の一部には石垣が築かれている。深さ約1mの遺構内に堆積した粘性をおびたオリーブ色系統の土壤中からは、陶磁器や瓦、漆喰、木や貝殻などの破片が多量に出土している。

出土遺物 (第460~465図)

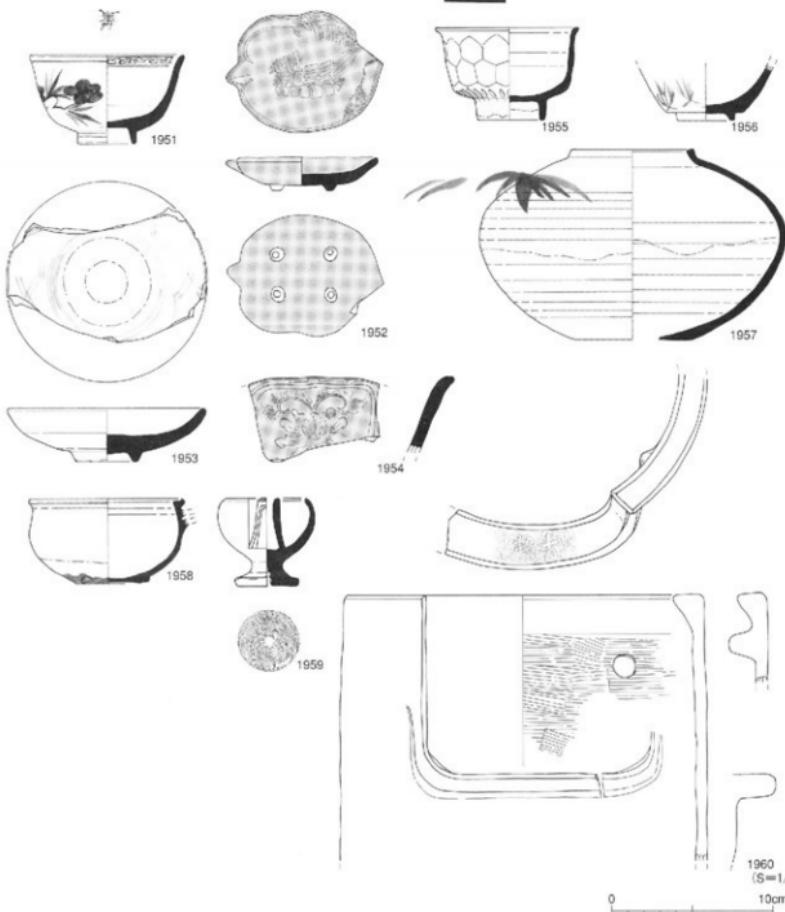
1961は肥前系の丸形磁器碗である。外面は菊花と團線・帯線・コンニャク印判による蕉が描かれ、内面見込部の團線内には「寿」の変形字が書き込まれている。1962は肥前系の染付磁器碗である。外面は仙芝祝寿が、内面は見込部の團線内に草花が描かれている。1963は瀬戸美濃系の染付磁器碗である。広東形で外面に仙芝祝寿が、内面の見込部に團線と草花文が描かれている。高台外底面には二重方形枠内に変形字が書き込まれている。1964は肥前系の丸形磁器碗である。外面には梵字、内面見込部の團線内に「寿」崩し文が書き込まれている。1965は肥前系の広東形の磁器碗である。外面には瑠璃釉が全面に

L=1.200m



- 1 灰オリーブ色 砂質土 5Y4/2
2 オリーブ黒色 砂質土 5Y3/2
3 灰オリーブ色 砂質土 5Y5/2

第457図 SX1018実測図

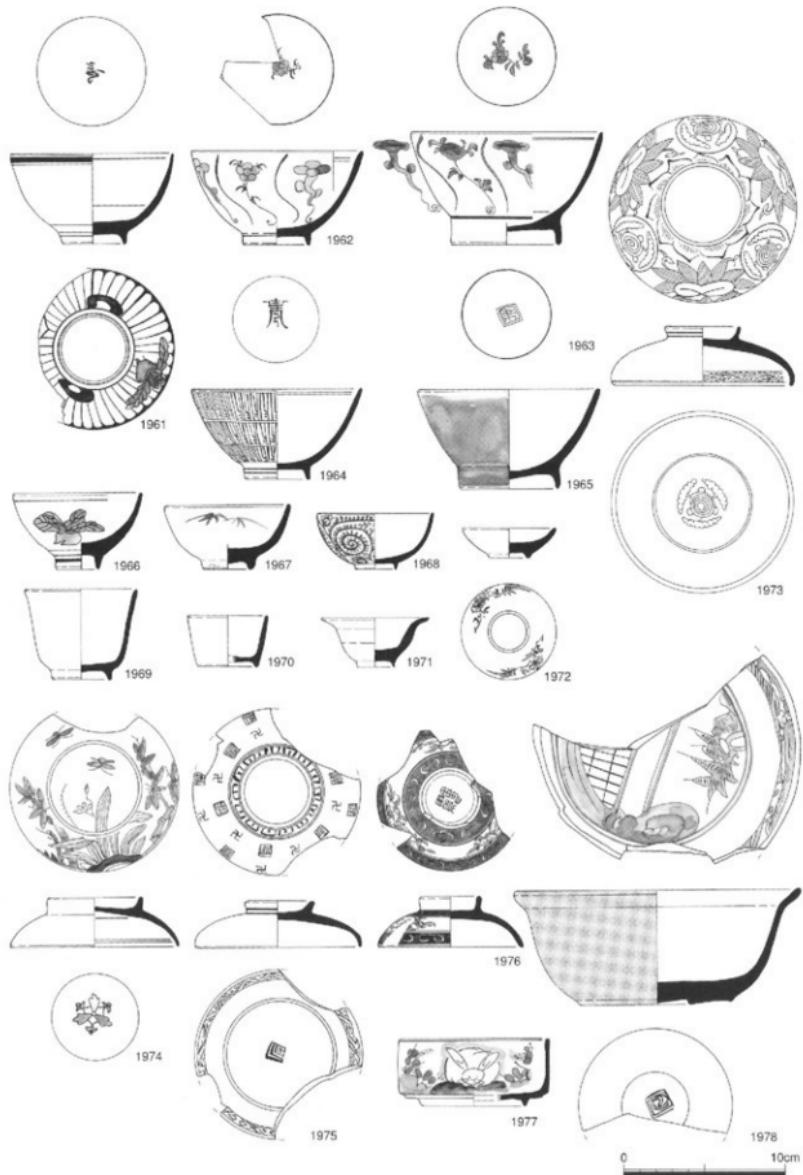


第458図 SX1018出土遺物実測図



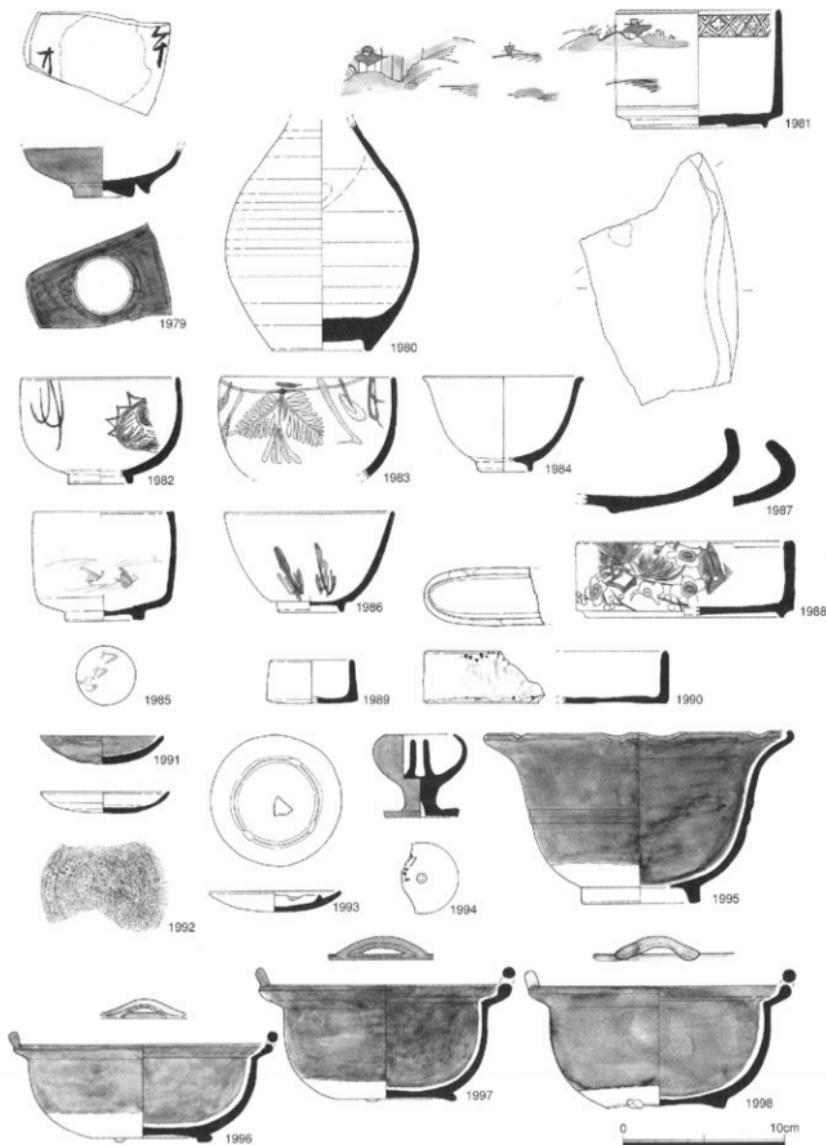
第459図 SX1019実測図

かけられている。1966は肥前系の磁器小碗である。外面にはコンニャク印判による蕉と圓線が描かれている。1967は肥前波佐見の丸形磁器小碗である。外面には染付により筆文が描かれている。1968は肥前系の染付磁器碗である。体部外面には蛸唐草が描かれ、高台置付部分は釉剥ぎされている。1969は肥前系の白磁の小杯である。腰張端反形である。1970は肥前系の磁器製の猪口である。1971は肥前系の白磁の端反形小杯である。高台置付部分は釉剥ぎされている。1972は肥前系の磁器小皿である。外面には

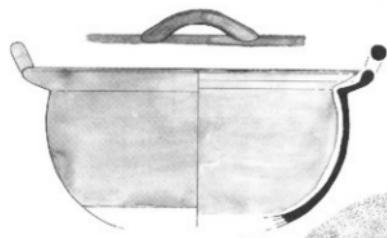


第460図 SX1019出土遺物実測図(1)

染付により草花が描かれている。1973は肥前系の染付磁器蓋である。体部外面には花卉と宝珠が素描で描かれ、口縁部内面には四方擗文、見込二重圓線内に宝珠が描かれている。1974は肥前系広東形磁器碗の蓋である。見込圓線内には唐花、外面には竹・蝶・草花が高台内も含めて描かれている。高台骨付部分は釉剥ぎされている。1975は肥前系の磁器蓋である。体部外面には「卍」、内面には四方擗文が染付により描かれ、体部外面と内面見込部の二重圓線内には「角福」が書き込まれている。吉田1号窯より同様のものが出土している。1976は肥前系の丸形磁器碗の蓋である。外面には染付により蝙蝠と桥樋が描かれ、高台外底面には「乾隆年製」の篆書体の変形字が書き込まれている。1977は肥前系の磁器製段重である。口縁端部は釉剥ぎされ、体部外側には兎と草花が染付によって描かれている。1978は体部内面に庭景が描かれた肥前系の外青磁の鉢である。高台は蛇目亜圓形高台で二重方形枠内に「溝福」の銘が記されている。1979は肥前系の磁器製香炉である。扁平鼎形の三足貼付で外面には鉄釉が施されている。内面は無釉で墨書が認められ、見込部には砂目痕が見える。高台内は無釉である。1980は肥前波佐見の白磁の瓶である。高台疊付部分は釉剥ぎされている。1981は肥前系の磁器製火入れである。半筒形の体部は外面に海岸風景が、内面に四方擗が染付によって描かれ、下半部は露胎のまま残されている。高台には蛇目釉剥ぎが施されている。口縁上端に敲打痕が見られる。1982は京信楽系の陶器碗である。腰張形で外面には色絵により注連繩文が描かれている。高台は露胎のままである。1983は外面に色絵による注連繩文が描かれた京信楽系の陶器碗である。1984は京信楽系の端反の陶器碗である。高台部分を除き内外面に灰釉が掛けられている。1985は瀬戸美濃系の陶器製の筒型容器である。外面には染付により水と鳥が描かれている。内外面とも灰釉が掛けられているが、高台部分は露胎で、高台外底面には墨書が認められる。1986は京信楽系の陶器製小杉碗である。外面には鉄絵により若松が描かれている。削り出し高台は無釉である。1987は瀬戸美濃系の陶器製水盤である。口縁は内湾し底部は削り底になっている。底部外面を除き御深井釉が掛けられ内面見込部には目痕が見える。1988は京信楽系の陶器製段重である。外面は鉄釉、呉須、白泥で松梅が、内面は朱で團線がそれぞれ描かれている。口縁部と高台脇の重ね部は無釉である。1989は瀬戸美濃系の陶器製の合子の身である。底部外面を除き灰釉が掛けられている。1990は瀬戸美濃系の陶器製鬢皿である。外面には鉄絵が描かれ底部外面を除き御深井釉が掛けられている。1991は在地の大谷焼の陶器小皿である。内外面には鉄釉が掛けられ、底部には重ね焼の溶着痕が認められる。1992は備前系の陶器製明皿である。赤褐色の胎土で内面には塗土が施され、口縁部には煤が付着している。1993は備前の陶器製灯明受け皿である。底部には回転ヘラ削りが施され、口縁部には煤が付着している。1994は在地の大谷焼の陶器製承皿である。底部を除き内外面に鉄釉が掛けられ、底部には穿孔と墨書が見られる。1995是在地の大谷焼の陶器鉢である。鉤緑輪花形で体部外面には沈線が2条入り、内外面には鉄釉がかけられている。底部は無釉である。1996・1997は陶器製の土鍋である。三足と紐状双耳貼付の丸形で内面見込み部には目痕が見える。底部外面を除き内外面に鉄釉が掛けられている。1998は陶器製の土鍋である。三足と紐状双耳が貼付けられ、外面底部を除き鉄釉が掛けられている。1999は陶器製の土鍋である。紐状双耳が貼付けられ、底部外面を除き鉄釉が掛けられている。2000は堺明石系の陶器製擂鉢である。見込み部は三角形擂目で、擂目単位は8条／1.8cmを測る。2001は堺明石系の陶器製擂鉢である。見込み部は放射状擂目で、擂目単位は10条／3.4cmを測る。2002は堺明石系の陶器製擂鉢である。内面見込み部は三角形擂目で擂目単位は8条／2.8cmを測る。2003は在地の大谷焼の陶器製擂鉢である。擂目単位は10条／3cmを測り、内面口縁部から外面胎部まで鉄釉が施されている。2004は瀬戸美濃系の陶器製手水鉢である。高台部分を除く内外面には鉄釉・灰釉が流



第461図 SX1019出土遺物実測図(2)



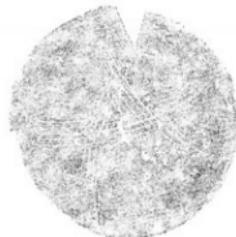
1999



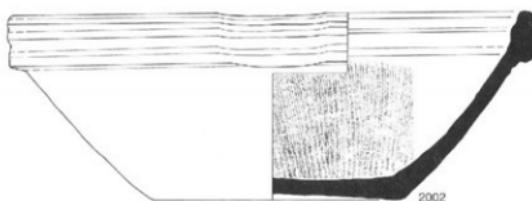
2000



2001



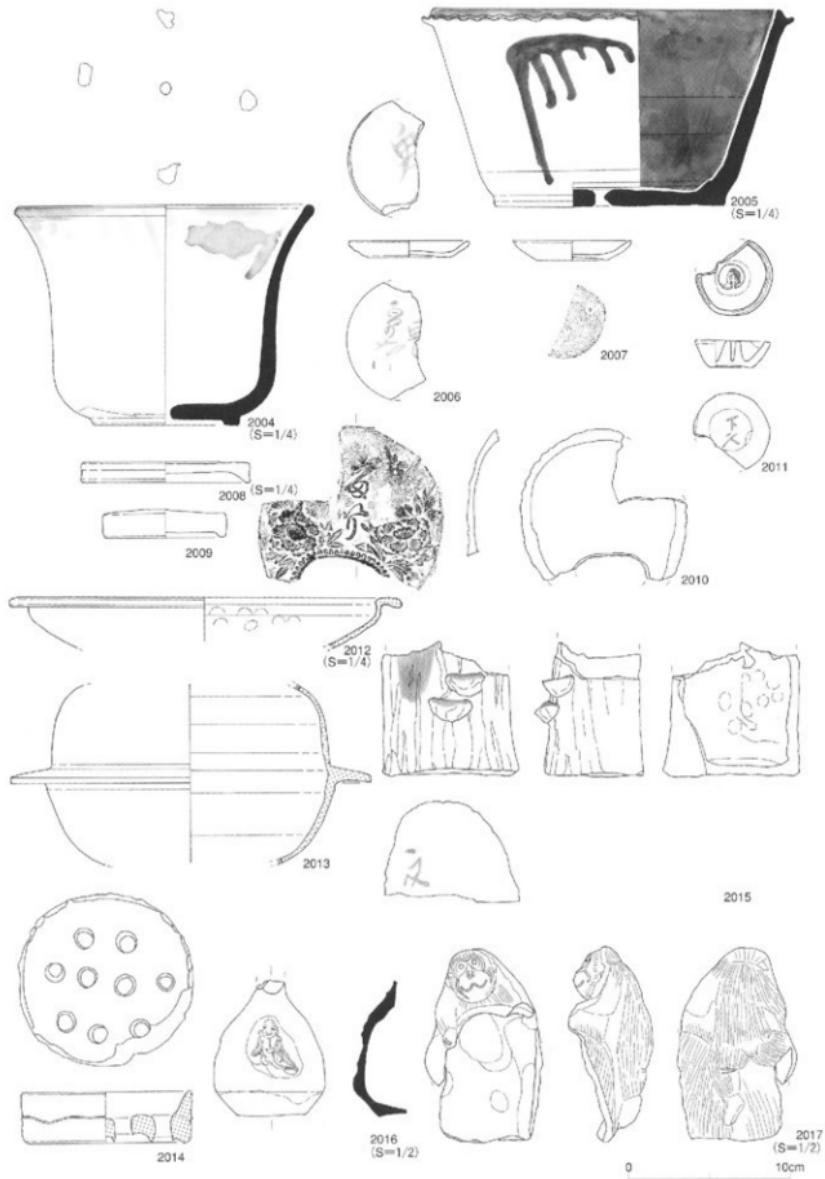
2003



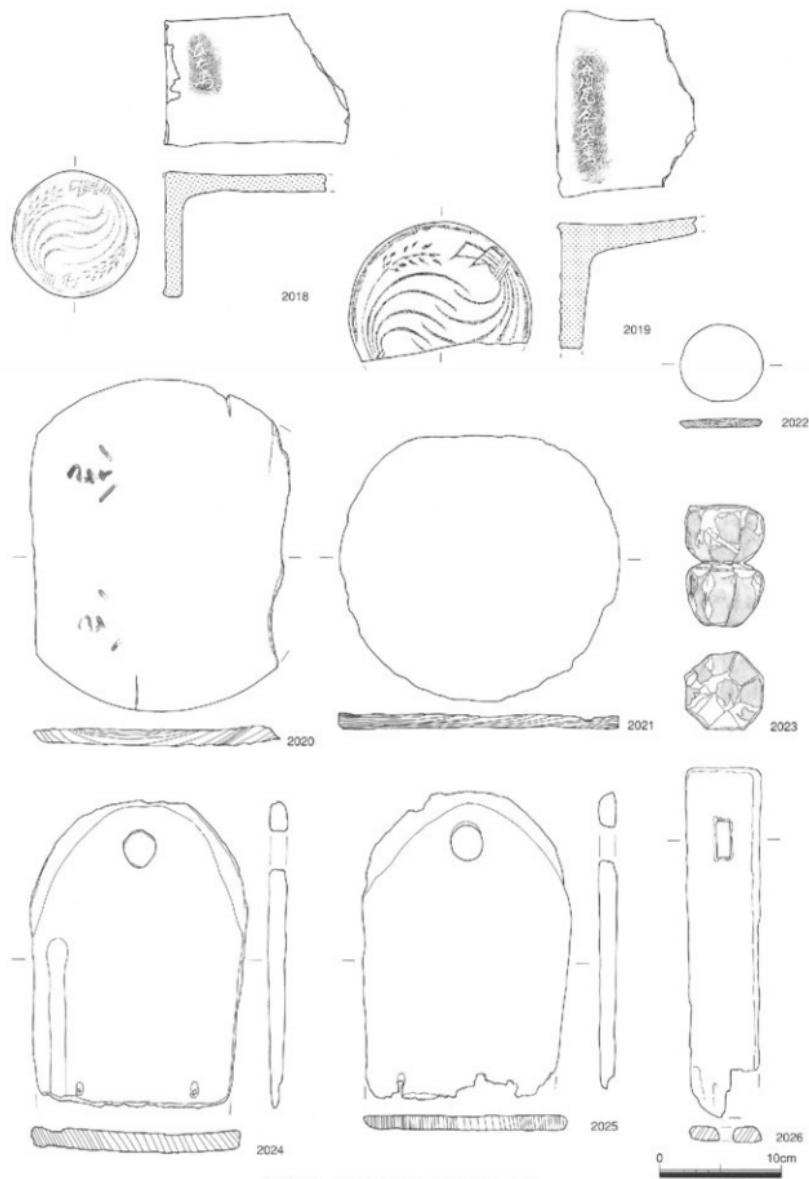
2002



第462図 SX1019出土遺物実測図(3)



第463図 SX1019出土遺物実測図(4)



第464図 SX1019出土遺物実測図(5)

しきられ、見込部には4カ所の砂目痕が認められる。底
部が穿孔されていることから、檀木鉢に転用されたもの
と思われる。2005は半圓形の
体部を持つ陶器製の大鉢である。
口縁部には波形の装飾が
貼付けられ、部分的に鉄釉が
流し掛けられている。2006は
底部に回転糸切り痕が残され
た土師質の極小皿で、内外面
には墨書きが施されている。
2007は底部に回転糸切り痕が
残された土師質の極小皿である。

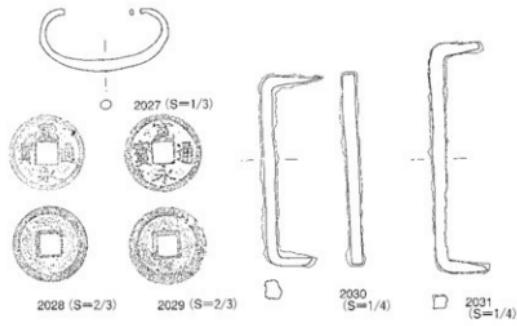
2008は口径136mmを測る土師質の火消し壺の蓋である。内面には煤が
付着している。2009は堺明石系の土師質の焼塙壺の蓋である。型作成形で製作され、内面には布口痕が
残されている。2010は土師質の胡麻煎り焰烙の蓋部である。型作により花柄と文字が描かれている。2011
は土師質の秉燭である。中央突起部には灯心油痕が残され、底部外面には「下久」の陽刻印が捺されて
いる。2012は御厨系の瓦質の焰烙である。口径は300mmで、内面には指オサエ痕が残る。2013は瓦質の
羽釜である。型作り貼合せ成形で製作され、底部外面には煤が付着している。2014は瓦質のさな(目皿)
である。円盤形で口径104mmを測る。2015は陶器製の掛掛花生と思われる。板作り貼合せで製作され、
底部外面を除き灰釉と鉄釉が施され、底部外面には墨書きも認められる。2016は型作り貼合せ成形で製作
された陶器製のままごと道具の人形徳利である。底部を除き外面には黄釉が掛けられている。2017は型
作り貼合せで製作された土製の猿の人形である。2018・2019は軒丸瓦である。稲丸の紋が配された鷺須
賀家替紋瓦である。2018は上部に刻印が「武右衛門」とある。2019は上部に「谷川瓦屋武右衛門」と刻
印がある。2020は木製の容器蓋又は底板である。焼印が見える。2021は木製の桶底板である。2022は木
製の曲物の蓋又は底板である。2023は木製の盤の脚部である。八角で全面に黒漆が塗られている。2024・
2025は大小の穿孔がある加工工である。2026は細長い加工工ではぞ穴がある。2027は銅製の引き具である。
断面形状は円形を呈している。2028は寛永通宝(新)である。2029は寛永通宝(古)である。2030
は鉄製の鍵である。断面形状は方形を呈している。2031は鉄製の鍵である。断面形状は方形を呈して
いる。

不明遺構 21 (SX1021) (第466図)

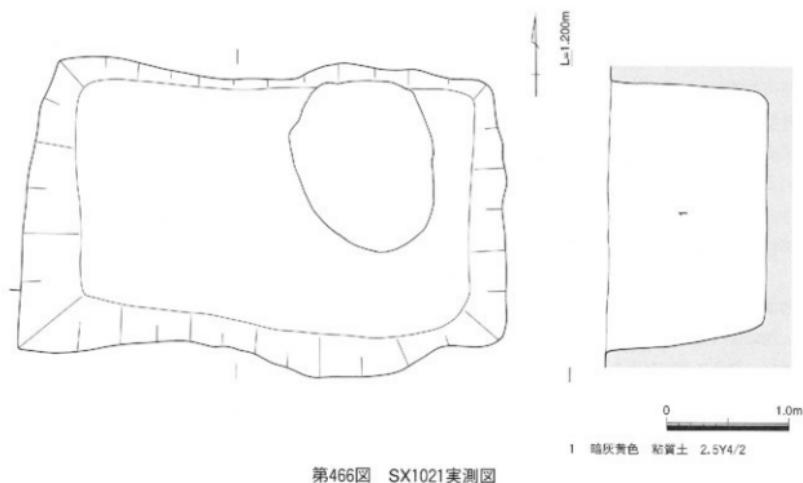
3区のM-14・15グリッドにまたがって検出された長軸を東西方向にとる長さ約3.9m、幅2.6mの
大きさの長方形の遺構である。壁がほぼ直に掘り込まれた遺構は約1.3mと深く、底面は平坦である。
多量の瓦片が出土していることから廐棄土坑の可能性がある。

出土遺物 (第467図)

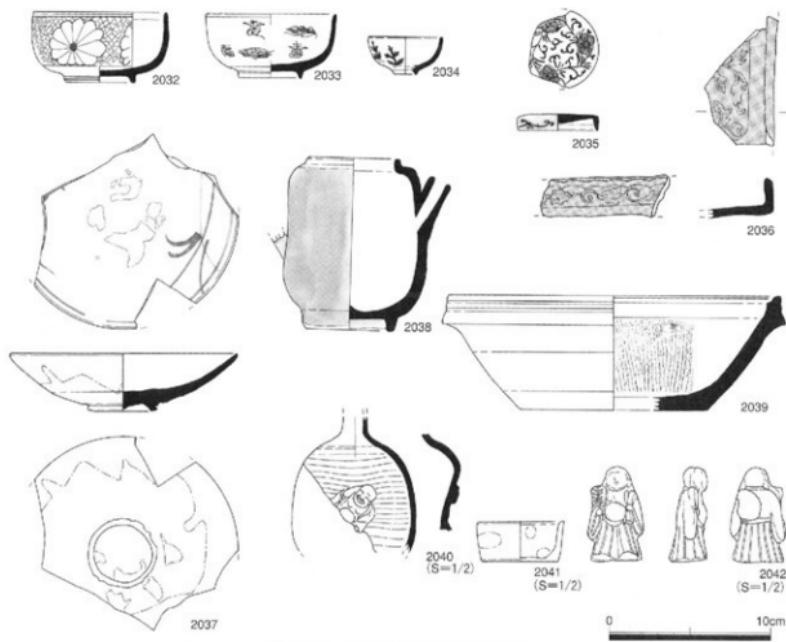
2032は肥前系の腰張型の磁器製小碗で、外面には染付により菊花と水裂、蓋付小碗が見られる。2033
は肥前系の磁器製小碗である。外面には扇と文字「福」・「寿」が染付により描かれている。2034は外面



第465図 SX1019出土遺物実測図 (6)



第466図 SX1021実測図



第467図 SX1021出土遺物実測図

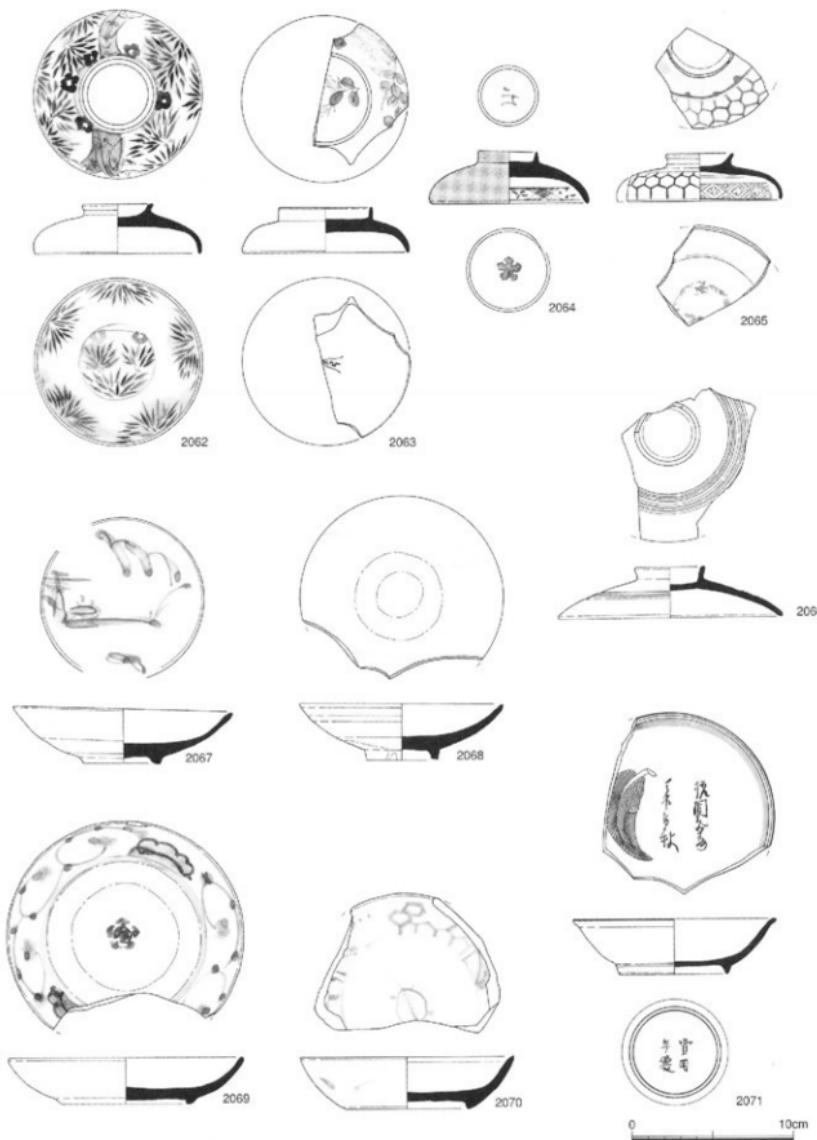
に染付で若松が描かれた肥前系の磁器製紅皿である。2035は肥前系磁器製の合子の蓋である。外面には染付により花唐草が描かれている。2036は型打成形で製作された肥前系の磁器製角鉢である。外面には草花の陽刻が施され青磁釉が掛けられている。2037は肥前系の陶器皿である。灰釉が掛けられ鉄絵により蓋が描かれた内面には見込に砂目痕が見える。2038は高台部を除き鉄釉が施釉された陶器製の中水注である。2039は堺明石系の陶器製擂鉢である。明赤褐の胎土で内面には1単位7条の樋目がつけられている。2040はミニチュアの人形徳利である。陶器製で胴部を押圧して布袋が貼付けられている。2041はミニチュアの浅筒型容器である。土師質で型作成によって製作されている。2042は布袋の人形である。土師質で型作り貼合せ成形で製作されている。

包含層出土遺物（第468図～第483図）

2043は口径114mmを測る肥前系の磁器碗である。体部外面は染付により唐草文が描かれている。高台疊付け部分は釉が剥ぎ取られ若干の砂が付着している。2044は肥前系の磁器碗である。外面には染付により折梅桜が描かれ、高台外底面には「大明年製」とある。2045は外面に染付による雨降り文が描かれた肥前系の磁器碗である。高台疊付部分は露胎のまま残されている。2046は肥前系の磁器小碗である。染付により外面には圓線に花と蝶が描かれている。2047は肥前系の染付磁器碗である。体部外面には丸の中菊花文が描かれ、高台付近には圓線が3本引かれている。内面見込部は蛇ノ目釉剥ぎが施されているが、高台疊付も釉が剥ぎとられ砂が付着している。2048は肥前系の青磁染付碗である。外青磁で内面見込部の二重圓線内には五弁花文が描かれている。2049は口径70mmを測る関西系の磁器小碗である。胎土は明緑灰色で灰釉が掛かる。2050は口銷裝飾が施された肥前系の磁器碗である。外面には染付により扇文が連続して描かれている。2051は瀬戸美濃系の染付磁器碗である。体部外面には草花文、内面の口縁部周辺には草文が描かれ、見込部の圓線内には抽象文が書き込まれている。2052は肥前系の染付磁器碗である。外面には圓線と片柄が描かれている。2053は瀬戸美濃系の染付磁器碗である。口縁部には鉄釉がかけられ、体部外面には隸字体、内面見込部には抽象文が描かれている。2054は肥前系の磁器製広東碗である。外面には梅、内面見込部には花が染付により描かれている。2055は肥前系の青磁碗である。高台疊付部分は露胎のまま残されている。2056は肥前系の青磁碗である。2057は西洋コバルトによる口銷裝飾が施された瀬戸美濃系の磁器製酒杯である。体部外面は圓線、内面は蓮弁、内面見込部は松と帆船がそれぞれ染付と上繪付により描かれている。2058は肥前系の磁器製紅皿である。外面には上繪付けにより扇と草花が描かれている。2059は肥前系の磁器製紅皿である。外面には染付により筆文が描かれている。2060は口縁端部が端反る肥前系の磁器製盃である。外面には染付で葉文が描かれている。2061は口縁端部が端反る肥前系の磁器製小杯である。外面には染付により筆文が描かれている。2062は肥前系の磁器製碗蓋である。腰張形で外面には竹林の七賢人、内面には竹林が染付により描かれている。2063は肥前系の磁器蓋である。体部外面には柴垣、高台外底面には草花が染付により描かれている。また、内面見込部には「寿」の変形字が書き込まれている。2064は肥前系の外青磁の染付磁器蓋である。体部内面には四方捺文が描かれ、見込部の二重圓線内にはコンニャク印判で五弁花文が押されている。高台疊付部分は釉剥ぎされ高台外底面には鉄が書き込まれている。2065は肥前系の磁器蓋である。外面には亀甲文、内面には四方捺文と環状の松竹梅がそれぞれ染付で描かれている。2066は瀬戸美濃系の磁器蓋である。体部外面には弦線が4本引かれ、内外面とも線釉がかけられているが、口縁部は無釉のまま残されている。2067は内面に圓線と風景が描かれた肥前系の染付磁器皿である。全面に釉がかけられていて

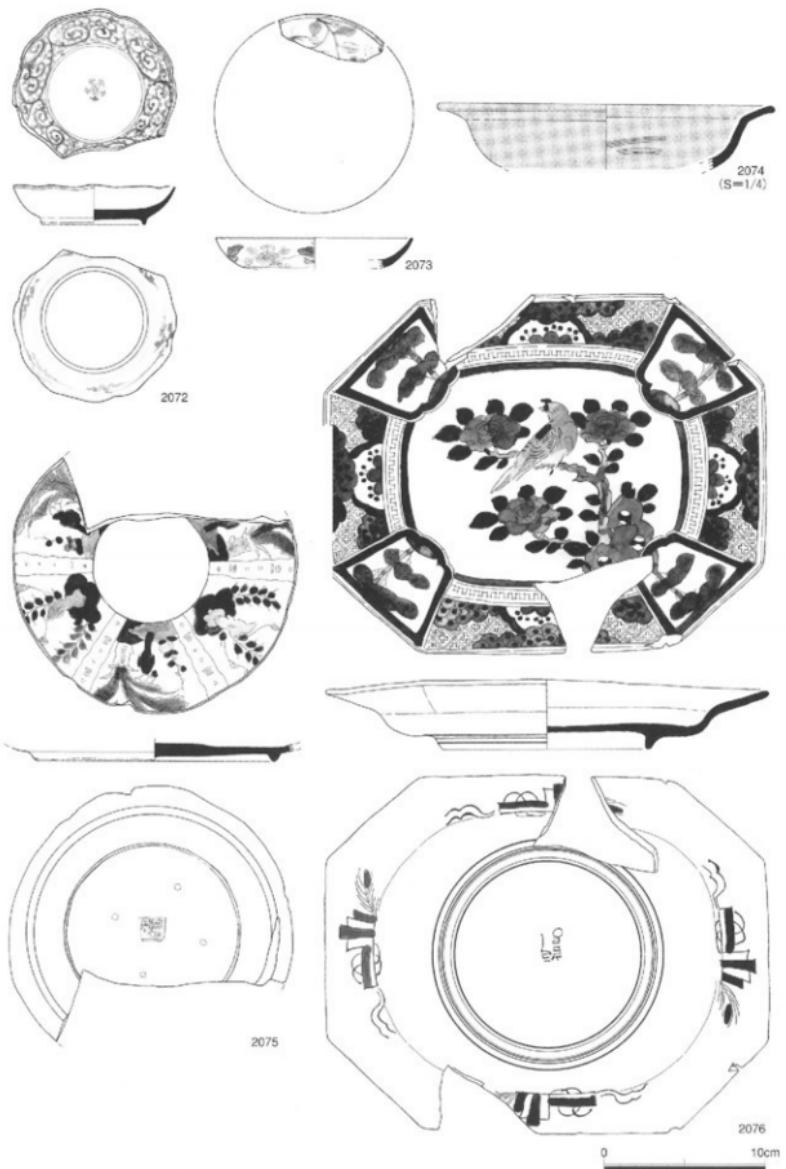


第468図 包含層出土遺物実測図(1)

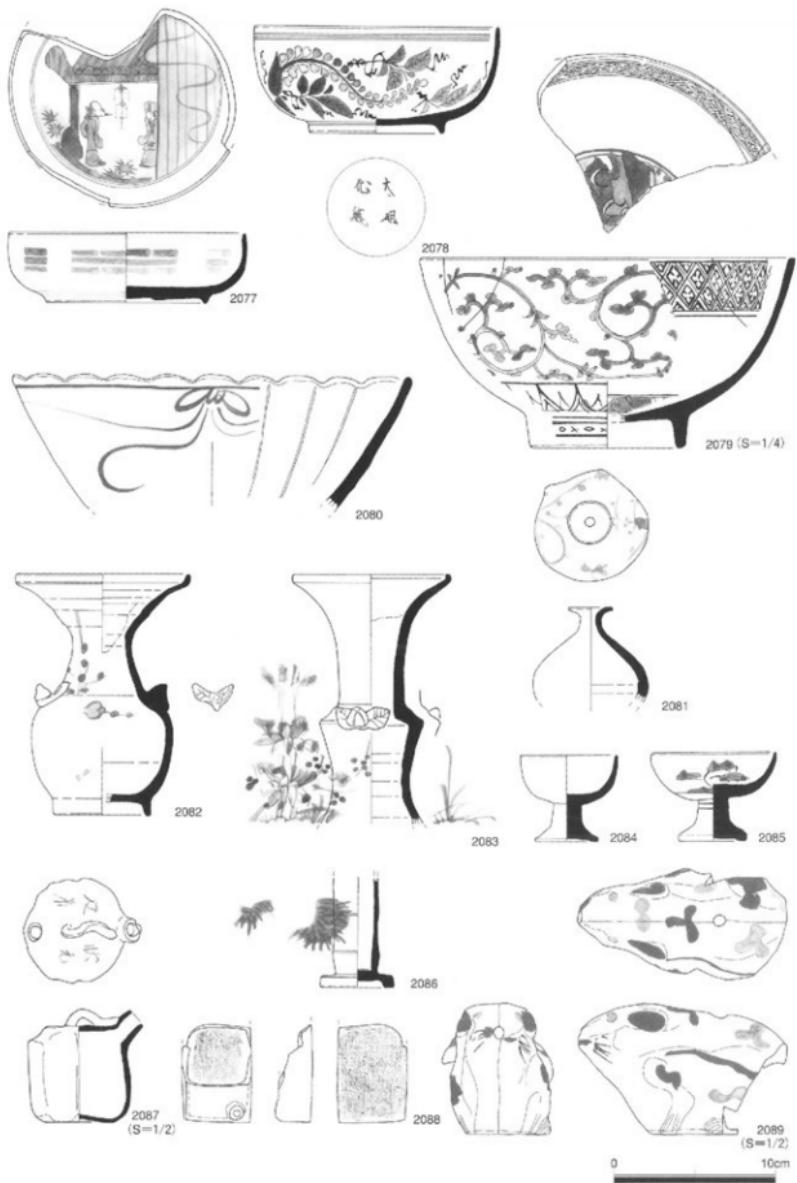


第469図 包含層出土遺物実測図 (2)

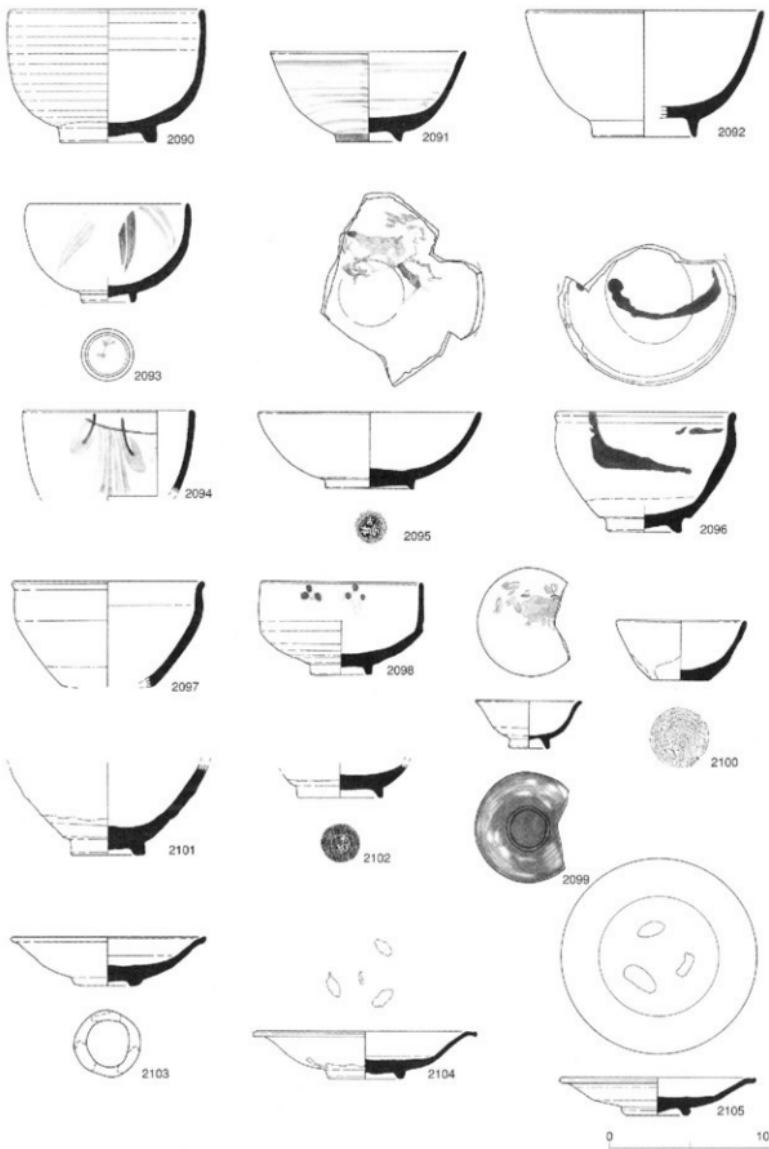
るが、高台置付部分の釉は剥ぎとされている。2068は肥前系の染付磁器皿である。口径124mmを測り、内面見込み部には蛇ノ目釉剥ぎが施されている。2069は肥前系の染付磁器皿である。体部内面には花唐草文、内面見込部には五弁花文が描かれている。また見込部には蛇の目釉剥ぎが施され、高台置付け部分は釉が剥ぎ取られ砂が若干付着している。2070は口径130mmを測る肥前系の染付磁器皿である。体部内面には亀甲文、内面見込部には亀が描かれている。2071は口縁端部に口銷装飾が施された肥前系の磁器皿である。体部内面には「梧桐一葉天下皆秋」の詩文と葉文が描かれ、高台外底面には二重圓線内に「宣明年製」の銘が書き込まれている。2072は輪花型打成形で製作された肥前系の磁器皿である。体部は内外面とも染付により蜻唐草文が描かれ、内面見込部には五弁花文がつけられている。2073は肥前系の磁器皿である。上絵付けの錦手で外面に菊唐草、内面には桃が描かれている。2074は内面に櫛目が付けられた肥前系の青磁鉢である。2075は肥前系磁器の皿である。18C後半の植口窯のものと思われる。高台内にはハリ支え痕が見える。2076は変形八角形の肥前系の磁器皿である。型打成形で製作され体部外面には宝、内面には岩花木鳥・青海波・窓絵竹・櫛齒・四方櫛などが染付により描かれている。高台置付部分は釉剥ぎされ砂が付着している。高台内にはハリ支え痕が1点残され「乾」の銘が書き込まれている。2077は肥前系の蛇ノ目四形高台の磁器皿である。外面には八卦、内面には八卦に家屋と唐人がそれぞれ染付によって描かれている。2078は肥前の磁器製大碗である。外面には片藤花が染付で描かれ、高台外底面の圓線内には「太明化製」の銘が描かれている。口縁部内面は釉剥ぎされ、高台置付部分は無釉である。2079は肥前系の磁器製大鉢である。外面は蓮弁と唐草、内面は四方櫛文が染付により描かれているほか、見込部にも文が描かれている。焼締ぎによる接合痕が認められる。2080は輪花型打成形で製作された肥前系の磁器鉢である。外面には染付により宝文が描かれている。初期伊万里で17C(1630年から40年)のものである。2081は外面に草枝文が描かれた肥前系の染付磁器製油壺である。2082は肥前系の磁器製仏花瓶である。頸部両脇に耳が貼り付けられ、外面には染付により梅花が描かれている。2083は肥前系の磁器製仏花瓶である。頸部の両脇に把手が貼り付けられ、外面には染付により草花文が描かれている。2084・2085は肥前系の磁器製仏飯器である。2085は外面に染付で樹木が描かれている。底部外面は無釉のまま残されている。2086は肥前系磁器の線香筒である。底盤竹形で体部には染付により桙が描かれている。2087は磁器の水滴である。型作りで上部には染付により文字が描かれている。2088は肥前系の磁器製水滴である。2089は型作り貼合せ成形で製作されたねずみ形の瀬戸美濃系の磁器製水滴である。中央上部と前面上部に穿孔が見られ、色絵染付により彩色されている。2090は瀬戸美濃系の腰張形の陶器碗である。高台内回転ヘラ切りされ、高台部分を除き御深井釉がかけられている。2091は肥前唐津の丸形陶器碗である。内外面ともに鉄釉と白泥による刷毛目文様が描かれている。高台置付部分周辺には砂が付着し、見込部には重ね焼痕が認められる。2092は京信楽系の陶器碗である。高台部分を除き透明釉がかけられ、全面に貫入が入っている。2093は京信楽系の陶器碗である。外面には上絵付けにより笠文が描かれ、露胎のままの高台の外底面には墨書が見える。2094は外面に上絵付けによる注連繩文が描かれた京信楽系の陶器碗である。2095は肥前唐津の京焼風陶器碗である。内面には染付により山水が描かれ、露胎のままの高台の外底面には「小松吉」の刻印が捺されている。2096は外反する口縁と削り出し高台を持つ瀬戸美濃系の陶器製天目茶碗である。内外面ともに鉄絵が描かれ、腰部と高台部分を除き鉄釉がかけられている。2097は口径は115mmを測る瀬戸美濃系の陶器製天目茶碗で、底部を除き褐色の鉄釉がかけられている。2098は瀬戸美濃系の陶器碗である。外面には灰釉と染付により竹が描かれ、高台部分は無釉である。2099は陶器製の小杯である。口縁端部には口銷装飾が施され、外面は



第470図 包含層出土遺物実測図(3)

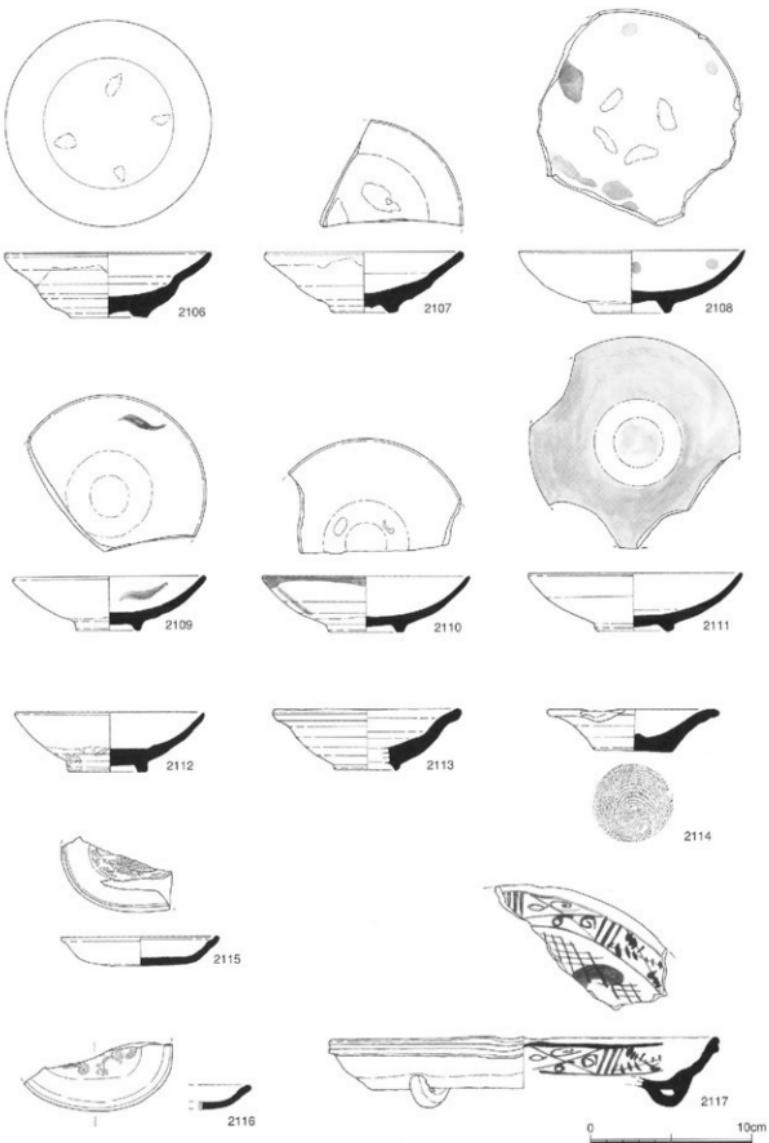


第471図 包含層出土遺物実測図(4)

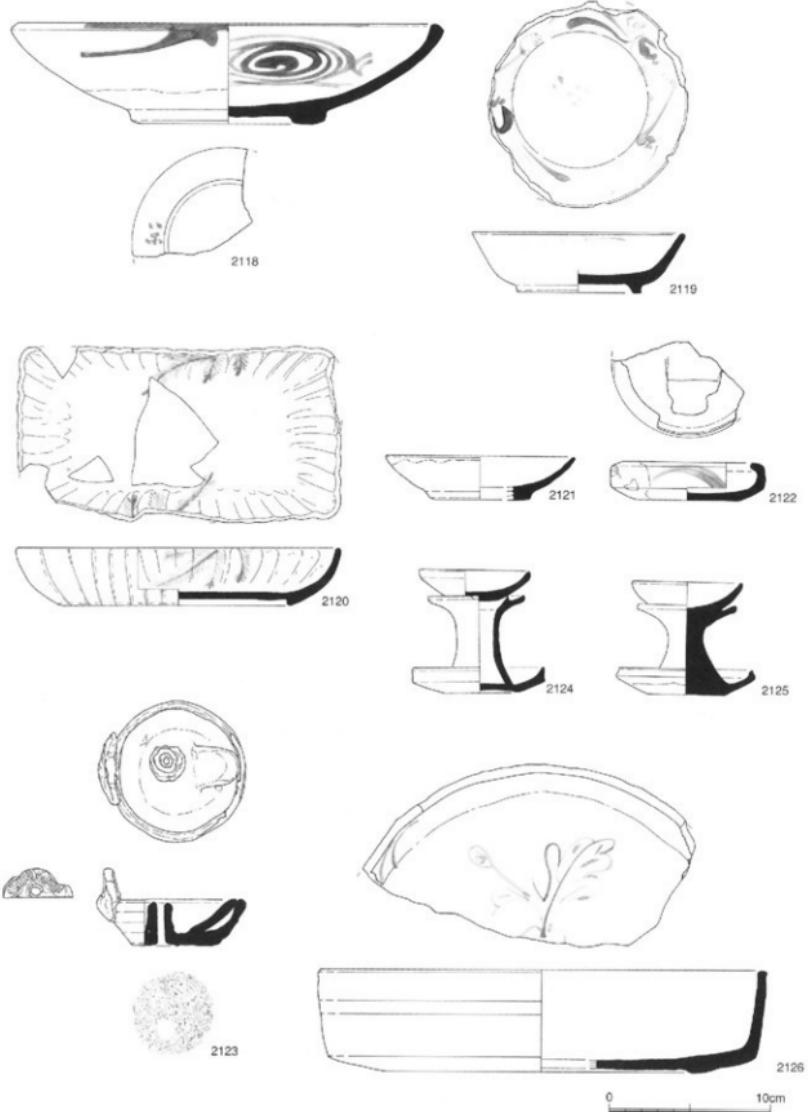


第472図 包含層出土遺物実測図(5)

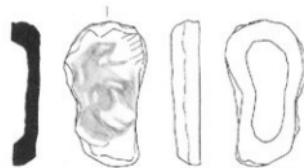
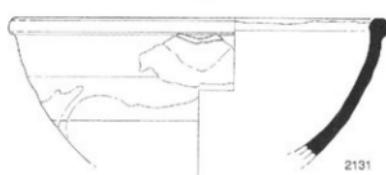
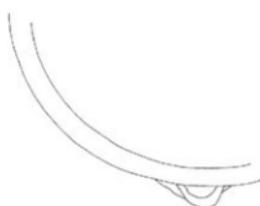
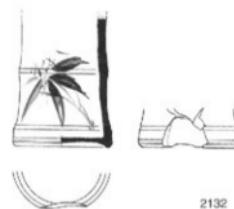
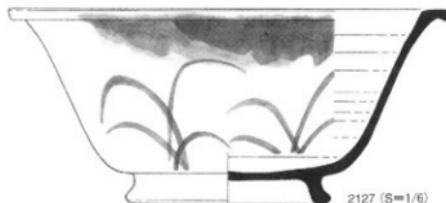
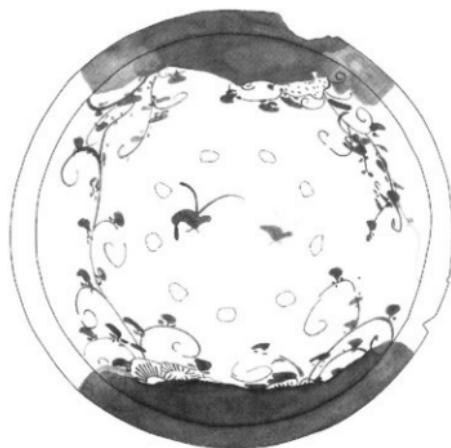
刷毛目文様、内面は草花が上絵付、鉄釉、白泥により描かれている。2100は肥前唐津の猪口である。切り離しの際の回転糸切り痕が残された底部外面を除き全体に灰釉がかけられている。2101は瀬戸美濃系の陶器製天目茶碗である。腰部から胴部にかけてはヘラケズリが加えられ、高台部分を除き内外面全体に黒釉がかけられている。2102は肥前唐津の京焼風陶器碗である。底部外面を除き透明釉がかけられ、高台外底面の円刻内には「木下弥」の押印がある。2103は肥前系の陶器皿である。縁折型で高台部分を除き全面に灰釉がかけられている。内面見込部と高台置付部にそれぞれ3カ所胎土目の痕跡が認められる。2104は口径137mmを測る肥前系唐津の溝縁皿である。内面見込部には砂目痕が残されている。2105は肥前系の陶器製溝縁皿である。外面の下半部を除き全体に灰釉がかけられ、内面見込部には砂目痕が3カ所に見られる。2106は肥前系の陶器皿である。削出高台の底部外面を除き藁灰釉がかけられている。内面見込部には胎土目痕が4カ所に見られる。2107は肥前唐津の陶器皿である。内面全体に灰釉がかけられ、見込部には砂目痕が見える。2108は口径138mmを測る肥前系の陶器皿である。高台部を除き透明釉が施され、口縁部内面にはまだらに青緑釉を落としかけしている。内面見込み部には4カ所に胎土目痕がみられる。2109は肥前唐津の陶器皿である。体部内面は鉄絵で草花が描かれ、見込部は蛇ノ目釉剥ぎされている。高台部分を除き全面に灰釉がかけられている。2110は高台部分を除き青緑釉がかけられた肥前系の陶器皿である。内面見込部は蛇ノ目釉剥ぎが施され、砂目痕が見える。2111は肥前唐津の陶器皿である。丸形で内面が青緑釉、外表面が灰釉とかけ分けられている。内面見込部は蛇ノ目釉剥ぎが施され、高台部分は露胎のまま残されている。17C末から18C後半のものである。2112は口径114mmを測る肥前系の陶器皿である。底部外面を除きほぼ全面に青緑釉がかけられ、内面見込み部には蛇ノ目釉剥ぎが施されている。17C末から18C前半のものである。2113は肥前系の陶器皿である。体部は外面下半部を除き灰釉がかけられ、内面見込部には重ね焼きの痕跡が見られる。2114は瀬戸美濃系の陶器製耳壺の壺である。体部内外面には灰釉がかけられ、底部は外表面が露胎のまま残されている。2115は在地の祇平の小判皿である。内面には型打成形により雲龍が陰刻され、全面に黄釉がかけられている。2116是在地系祇平の陶器皿である。型打成形され陽刻の雲龍が描かれ、緑釉が施釉されている。2117は瀬戸美濃系の陶器製の志野向付である。底部には半環足が貼付られ、内面には鉄絵が描かれている。2118は瀬戸美濃系の陶器製馬目皿である。口縁端部には口銷が施され、内面には鉄絵で渦が描かれている。底部外面は無釉で、脣付付近には墨書が認められる。2119は肥前系の陶器皿である。体部外面には線文、内面には草花文が染付により描かれ、内面見込み部には簡略化された五弁花文が染付で描かれている。2120は型打ち成形で製作された京信楽系の陶器製角皿である。底部は露胎のまま残されている。2121は内面に灰釉がかけられた陶器製の灯明皿である。外表面には煤が付着している。2122は瀬戸美濃系の陶器製の灯明具と思われる。外表面には鉄釉により業文が描かれている。底部の外表面は無釉である。2123は陶器製灯明具である。把手内にヘラ彫りが施され、本体には注ぎ口がある。内面には煤が付着し、灯心部押さえ痕が残る。2124は在地(大谷)の陶器製灯明具である。底部外面を除き全体に鉄釉がかけられている。2125は在地の大谷焼の陶器製灯明受皿である。底部を除き外表面全体に鉄釉がかけられている。2126は口径273mmを測る瀬戸美濃系の陶器鉢である。全体に長石釉がかけられ、内面には草花文が描かれている。底部には重ね焼きの痕跡が認められる。2127は瀬戸美濃形陶器の水鉢である。折縁丸形で銅緑釉が2方流し掛けされている。2128は肥前系の陶器製香炉である。陶胎染付で文様が描かれ、高台置付け部分は釉が剥ぎ取られ砂が付着している。2129は肥前系の陶胎染付の火入れまたは香炉と思われる。体部内面と高台部分が露胎のまま残され、外表面には唐草が描かれている。2130は瀬戸美濃系の陶器製三足香炉で



第473図 包含層出土遺物実測図(6)



第474図 包含層出土遺物実測図 (7)



0 10cm

第475図 包含層出土遺物実測図 (8)

ある。外面には鉄絵による菊弁文が描かれ、内面と底部外面は露胎のまま残されている。2131は口径233mmを測る肥前系の陶器製片口鉢で、鉄釉がかけられている。2132は陶器製の線香筒である。体部には竹筒を思わせる館が作られ、染付により折枝竹が描かれている。2133は陶器製の水滴である。型作りにより製作された人形で頭部としっぽ部に穿孔がある。2134は陶器製の不明遺物である。型作りで製作され外面上部には白・緑・鉄等の釉がかけられている。2135は陶器製の茶壺又は小壺である。瀬戸美濃系のもので外面には鉄釉がかけられている。2136は瀬戸美濃系の陶器製壺である。体部外面上には鉄釉がかけられ、底部には鉄塗が塗られている。2137は瀬戸美濃系の陶器製水注である。高台部分を除き灰釉が施され、外面上部は綠釉が流し掛けられている。2138は陶器の御神酒徳利である。外面体部には透明釉と色絵で梅が描かれている。2139は丹波の陶器瓶である。内外面には沈線がまわされ堅く焼き締められている。2140は在地系大谷の陶器瓶である。1升の通い徳利で、外面は底部を除き鉄釉がかけられている。筒描により「紙屋町一 醤油 阪本」の影り込みがある。2141は備前の陶器壺である。化粧土が施されているが口縁部には自然釉もかかっている。2142は外面に鉄釉と白泥による刷毛目文様が描かれた肥前系の陶器壺である。2143は陶器の壺である。2144は在地の大谷焼の陶器壺である。鉄釉がかけられ、体部には一重方形内に「本漁」「阿波梅林軒」の刻印が捺されている。2145は備前の陶器製擂鉢である。内面に3条／cmの擂目が付けられた桃山時代のものである。2146は備前の陶器製擂鉢である。火摺痕があり内面には10条1単位の擂目がつけられている。16Cのものと思われる。2147は内面に9条／2.8cm1単位の擂目がつけられた備前系の陶器製擂鉢である。2148は備前の陶器製擂鉢である。内面には15条／3.1cm1単位の擂目がつけられている。2149は備前の陶器製擂鉢である。擂目12条／2.9cmを測り、口縁部に重ね焼きの痕跡が見える。2150は内面に10条／1.8cm1単位の擂目がつけられた堺明石系の陶器製擂鉢である。2151は瀬戸美濃系の陶器製植木鉢である。上げ底の底部中央に口径20mmの穿孔が施されている。脚部は1カ所に半円の切り込みが見られ、外面は底部疊付けを除き灰釉が施釉されている。2152は瀬戸美濃系の陶器製植木鉢である。内外面とも灰釉がかけられているが内面の下半部と高台部分は露胎のままである。2153は陶器製の土瓶蓋である。体部には直径3mm程の孔が開けられ、外面には柿釉、内面には鉄釉がかけられている。2154は上面に灰釉がかけられた京信楽系の陶器製の合子蓋である。2155は万古系陶器の土瓶蓋である。口径132mmを測り大型の摘みが上部中央で貼付けられている。2156は土師質の灯明皿である。底部の切り離しに回転糸切り技法が使用され、口縁部には煤が付着している。2157は土師質の灯明皿である。底部の切り離しに回転糸切り技法が使用され、口縁部には煤が付着している。2158は土師質の灯明皿である。口縁部には煤が付着している。2159は土師質の灯明皿である。底部の切り離しに回転糸切り技法が使用され、口縁部には煤が付着している。2160は土師質の灯明皿である。底部は回転糸切り後にナデ調整が施されている。内外面には煤が付着している。2161は土師質の灯明皿である。底部には回転糸切り痕が残され、口縁部には灯心油痕が認められる。2162は土師質の皿である。底部の切り離しには回転糸切り技法が使用されている。2163は土師質の皿である。底部は回転糸切り後、ナデ調整が加えられている。2164は土師質の灯明皿である。底部は回転糸切りで、口縁部には煤が付着している。2165は底部の切り離しに回転糸切り技法が使用された土師質の皿である。2166は底部の切り離しに静止糸切り技法が使用された土師質の皿である。2167は口径148mmを測る土師質の皿である。底部には回転糸切り痕が残されている。2168は土師質の灯明皿である。底部には静止糸切り痕が残されている。2169は口径106mmを測る土師質の碗である。底部には静止糸切り痕が残されている。2170は土師質の灯明皿である。口縁部には煤が付着している。2171は底部にナデ調整が施された土師質